主幹・麻生路郎

川柳雜誌

第七卷 第八號

八月特輯號

大正十三年三月二日第三種郵便物認可
昭和五年八月一日發行（毎月一回一日發行）

川柳雜誌 第七卷 第八號

川柳雜誌社發行

川柳漫画 いのち洗濯

盃を子にふせられて飯にする（天志）

月へなげ草へ捨てたる踊りの手

一小隙よこめで通るいゝ女（山内）

トテモ堪らぬ面白さ！

如何なムッツリ屋も忽ち腹の皮を撚る

集めも集めたり一千二百餘の名川柳名漫畫

一つ見ても面白い、一頁見れば飛び上る、幾度見ても捲くことを知らない、漫畫は日本一の川柳漫畫家谷脇素文畫伯、川柳は古今の名吟玉作、味へば味はふほど面白い、機笑！苦笑！快笑！ この一册忽ち憂ひを拭ひ、夫婦仲を良くし、一家を明るくし、而も笑ひの中に人情を解し、世の中を知り、社交に家事に處世に修養に驚く許り教へられる事が多い。

快著！快著！ 天下無比の大快著！

これこそ家中揃って笑へる家庭讀本 ぜひ御覽あれ、

川柳漫畫第一人者 谷脇素文畫伯編並畫

定價一圓八十錢（送料十二錢）

東京本郷 大日本雄辯會講談社發行（振替東京三九二〇）

養榮の髪毛ぬせ戟刺を髓腦

ドーマポ椿豆伊

精の椿島大　一唯產國

伊豆椿香油本舗

いさ下用愛御に直今
りあに店藥品粧化名有國全

川柳雜誌八月特輯號（第七卷第八號）目次

【感想・評論】

柳壇の人々（三）……麻生路郎……（六）
月・詩人・あらエッサッサー……川上三太郎……（八）
自動電話……川村花菱……（二四）
大地から……蛭子省二……（三五）
川柳に浸る……阿部閑生……（五四）

【研究・其他】

句作に關する座談會……路郎 杏三 雨町 山雨樓 愚陀 町二 紋太 亂耽 綠雨（ひろし）……（四）
旅のこゝろ……麻生路郎……（五六）
唐柳短解……蛭子省二……（三）

白黑……麻生路郎……（三八）
七月三日……鍋平朝臣……（三八）
關西辯の進出……赤井清司……（三一）
腹卷の答案調……岡田三面子……（三九）
眼にはられた銀幕……小出檜重……（三九）
木枕のしみ……蛭子省二……（四〇）
オラガビール……川上三太郎……（四〇）
汗（繪）……柴谷柴舟……（四〇）
平和な一日……長崎柳秀……（四〇）
中年……安川久流美……（四〇）
稽古三味をきゝつゝ……窪田銀波樓……（四一）
舟……楫元紋太……（四一）
靴の紐……森東魚……（四一）
カほちや……篠原春雨……（四一）

◇七月五日の私……大島濤明……（四二）
◇車掌と愛煙黨……長谷川一徹……（四二）
暑い日……亀井花童子……（四三）
◇やなぎかけ……高橋かほる……（四三）
ハガキを受取つた日の日記……庄萬よし……（四三）
蜘の奇禍……中島鐵洲……（四三）
夏帽子は語る……福田山雨樓……（四三）
子を落す……酒井駒人……（四四）
フォード抹殺……住田亂耽……（四四）
カツイソウな頭……伊藤愚陀……（四七）
黑の手提鞄……岩崎柳路……（四五）
心和む……松丘町二……（四五）
「施療室にて」を讀む……出口雨町……（四五）
生駒の一日……橋本綠雨……（四五）

新活生

幸福……水谷鮎美（四六）
往復葉書の味方……竹内多聞（四六）
半弓場にて……朝田新水（四六）
ある日……安井ひろし（四七）
大弓……太田朝陽（四七）
時代の波……伊藤綠之助（四七）
戻り……淺井冷々子（四七）
金總……池田鯔峰（四八）
無題……上田柳影（四八）
お美しい方だつたら……三輪夏曉（四八）
竹光の劍戟……友淵貴山（四八）
川柳粉……順崎豆秋（四九）

◇

風景

女百句……櫻井圓角（四九）
友の欠伸……山本凡々子（四九）
フェルトの爲に……木山青砂郎（四九）
子供ごゝろ……川村觀月（四九）
落した堤……丸山公二（五〇）
冬物のつゝらから……生田翠夢（五〇）
蟻の勇猛心……山本雨迷（五〇）
夏の方程式……桑原京郎（五〇）
忘却税……阿部閑生（五〇）
硝子窓の切符……西村市公（五〇）
寡婦をめぐりて……平井蒼太（五一）
西洋の委を覆ふ……熊本黄蛾（五一）

◇

【創作】

川柳塔……一徹・かほる・愚陀・町二・萬よし・亂耽・綠之助・雨町・鐵洲・新水・鮎美・柳路・山雨樓・綠雨・圓角・敏郎・閑生・里十九・京郎・貴山・光路・翠夢・觀月・蒼太・夏曉・石竹・黄蛾・青砂郎・豆秋・市公・濁水・杏三・公二・冷々子・光穂・雪峰・柳影・凡々子……（一〇）

粒々集……富士野鞍馬・長崎柳秀・前田五健・大島濤明・安川久流美……（五一）

光耀抄……信子・武子・喜緒女・誼女・吟女・愛女・ふく子・よし江・壽枝女・雅女・スエノ・霞乃……（五二）

句會の横顔……朝田新水……（三一）

杭全町MEMO……綠雨……（六三）

編輯後記其他……路郎……（八二）

一路集

秘密……高橋かほる選……（六二）

深夜……福田山雨樓選……（六三）

空車……中澤濁水共選・出口雨町共選……（六四）

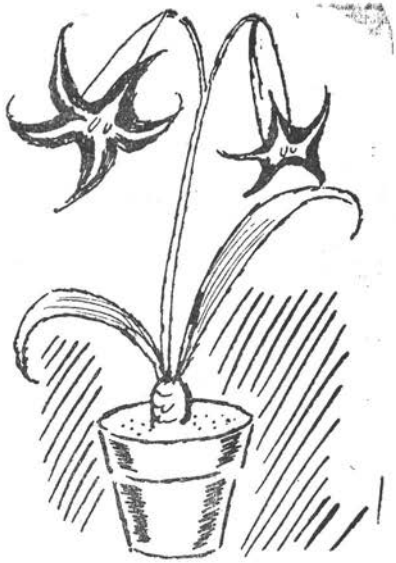
本社七月例會……公二……（七四）

近作柳樽……話家……（二六）

川柳書架……（三一）

各地柳壇……（七四）

BUILDING……櫻果・雅幽・かほる・石竹・久流美・文醉・山雨樓・大夢子・雨町・双車・海洋人・蒼太・夏曉・まんはつたん・青砂郎・籬楓……（六七）



作句に關する座談會

川柳の滑稽味に就いて

路郎――作句に關する座談會を催す事にいたしましたが、作句に關する座談會と申しましても、非常に範圍が廣すぎますから最初は「川柳の滑稽味」について、お話をして戴きたいと思ひます。夫れから順次他の問題に就いてお話を願ふ事にしませう。

滑稽味の句については紋太君は一倍親しみを持つて居られると思ふので、紋太君から何か發言して戴きたい。

紋太――川柳と云へば滑稽を思はせる程に重要なものでありました。近來の川柳にはそうしたものが殆んど影を沒したやうに思ひます。川柳を讀むだけの人には殊にそれが目立つて見えて大抵の人が其事を云ひます。僕は近來の句を首肯しながら、そうした昔の滑稽味を何うかして挽回したいと云ふやうな氣持が心の隅から消え去らないのであります。

山雨樓――併し柳樽が持つて居た滑稽味と云ふものを、現代に復活する事はそう云ふ趣味或は道樂と云ふ點から見れば勝手だが川柳を本當によりよくしやう、本當の自分を現はそうと云ふ考へからするならば徒事ではなからうかと思ひます。殊に近代の忙しい生活にあつてそうした遊戯的な道樂を引張り出そうとする事は何うかと思ひます。唯生活が忙しければ忙がしい程、ゆつたりとした餘裕と云つたやうなものを求める心持は起り易いものと思ひますが苟も川柳は文字の遊戯でない以上柳樽の以つて居た幼稚な滑稽味なんかは時々振返つて見る位で澤山ではありませんか。

（此時亂耽君出席）

路郎――紋太君は柳樽の滑稽味をそのまゝ復興させたいと云はれて居るのではあるまいと思ひますが、私の云ふ滑稽味は

柳樽の滑稽味、しかも幼稚な滑稽味を問題にして居るのでなくて、近代には近代的な滑稽味が在在すると思ふが最近の川柳に新らしい滑稽味と云ふものが少いので川柳の要素としてはもう適しないのか又今の柳人が新らしい滑稽味を解しないのか、そんな事を問題にして見たいのです。しかし、柳樽の滑稽味の中にも、時代を超越した滑稽味を含んだ句のある事も忘れてはならい事だと思ひます。

ひろし――滑稽と云ふ事も文化の進歩につれて進轉して行くのではないでせうか例へば昔はクスグリ式の大阪二輪加が持囃されて居た時代もあり、會我廼家や淡海の連中が喜ばれた事もあり、一時はあの下らぬ萬歳と云ふものも全盛を極めた併し現在ではそうした滑稽で滿足出來なくなつて居る。しかも現代人はユーモアを求める事が切實であります。

路郎――勿論滑稽味は進化します。生活の激甚さは其反面に、滑稽味の油を要求して居ます。

ひろし――そうした新らしい滑稽味の現はれが諧謔小説や漫談或はナンセンス物となつて出て來し居るのではなからうか川上三太郎君が週刊朝日に書くものなど仲々面白いものがあるではありませんか

路郎――そう云ふ他の文學方面に就いてでなくもつと句と交渉を持つ話へ移つて戴きたい。

雨町――話は戻りますけれども、山雨樓氏の述べられた話は非常に苦しい言ひ方のやうに思はれます。古川柳に於ける滑稽味は遊戯的のものであるとは思はれません。古川柳に於ける所謂滑稽味がその時代の民衆にアピールするものが在つたと信じます。そう云ふ意味に於て古川柳の滑稽味を一概に遊戯的だとは云ひ得ないでせう。唯ひろし氏が云はれたやうに時代々々によつて其形式上に於て幾分づゝ變つて行くのだと僕も思ひます。だから現代人は夫れに對する興味がある以上滑稽味のある川柳を作る事に躊躇する必要はないと思ふ唯現代では滑稽味と云ふものが川柳に於ける一要素に過ぎない事だけ附加へて置きませう。

山雨樓――僕は紋太さんが柳樽のやうな滑稽味を復活させたいと云ふやうな意味のお話を聞いたので、先程のやうに思つたのであります、滑稽と云ふもの、普通の人が面白がる滑稽と云ふものが極めてナンセンスな卑俗なものが多いので、藝術としての素材に迄上る滑稽と云ふやうなものは極く稀れなのではなからうか。それから柳樽が當時の民衆の期待に添つたといふ事は柳樽が現代に於ても猶其價値を主張する理由にはならぬのではなからうか。兎に角近代思潮の傾向はナンセンスものに傾いて居る點があるが夫等のものが末期的な頽廢した一現象に過ぎないのだらうと思ります

雨町――僕の云ふのはさうした滑稽味に作者の興味があるのは或期間だけであつて興味を持つて居るものが滑稽的川柳を作つて居る内に、何時しか夫れが詰らないものになつて終ふのであるから、そうした滑稽に興味を持つて居る間は滑稽的なものを作つてもよいと云ふのであります。

ひろし――川柳に現はれる滑稽と云ふものは特に滑稽な句を作らうと意識的に作

出席者

麻生路郎
安西杏三
出口雨町
福田山雨樓
橋本緑雨
伊藤愚陀
松丘町二
楫元紋太
住田亂耿
安井ひろし

（ABC順）

杏三、山雨樓、愚陀筆記

られないのではなからうか。例へば僕等には何うも滑稽な句は出來悪い。そして普通に云つて居るものが非常に皮肉に聞へる。處が源坊君等の作る句は自然に滑稽である。そうしたわざとらしく巧まない處から滑稽味が產れるので作者の性格に依るのではないかと思ひます。

山雨樓――そう云ふ點が多いにありませうな。性格と環境なんかにも依るのでせうな。

路郎――勿論さうだと思ひます。僕なんかはかなり滑稽味の句の愛好者でしたが――今でもさうですが――自分では段々滑稽味の句が出なくなつて終ひました。年の加減かも知れません。二十代の人間に非常に滑稽に感じた事が三十代ではさほど滑稽でなくなり、四十代ではもう滑稽でも何でもなくなると云ふやうな事もありますからね、私も性格と環境及年齢に依るものだと思つて居りますが夫れにしても、今の若い人達には性格や環境の上に滑稽味が減少したのでせうか。

ひろし――時代が苦しくて笑へないのでないでせうか。

路郎――僕はさうばかりとも考へられないので、若い人には僕等の想像出來ない滑稽味があるんじやないかと思ひますが此點亂耽君や愚陀君は何う解釋を下しますか。

亂耽――人間がさうである樣に、社會も年をとつて行くと、段々滑稽味に悲慘さが加速度的に增して行くのではないかと思ひます。柳樽の中の所謂滑稽味と今のナンセンスものとは其處に非常な距りがあると思ひます。

町二――眞のよき滑稽作家は選ばれた少數の天稟の人達にあるので、性格や年齢などは餘りその作品に影響をしてゐない場合が、屢々優れた作家の作品と生活に於て窺ふことが出來ると思ひます。滑稽作家若くは俳優などで悲劇的な性格の人を非常に多く發見する樣に思ひます。殊に川柳の如き短詩に於ては、その作家が選ばれた人達に限られはしないかと思ひます。

路郎――天稟と云ふことは云ふ迄もないことですが、この場合は一般的に亘つての話なのです。喜劇俳優や落語家等で有名な人は多く日常生活では眞面目くさつた人が多く、ゆら〳〵笑つたりふざけたりする外面的に面白いと云はれてゐる人達には眞に滑稽味がないと云ふことも面白いと思ひます。川柳家でも五葉君のもつ滑稽味、紋太君のもつ滑稽味の句から窺つてもその作家がふざけた人ではなくて、寧ろ眞面目な人であることを發見します。だから僕は性格及環境說は或る力强さを持つてゐると思ひます。先程年齡に付て云つたがそれは同じ人の年代の相違で滑稽を感ずる程度が違ふと云ふことを述べたまでゝあります。

紋太――それから僕はこんなことも思ひます。今の句に滑稽の句が少い原因は、從來の川柳界が滑稽を愛し乍ら上乘の滑稽を生み得なかつた爲めに、その反動として滑稽を排斥する傾向が生れたと云ふことも云へると思ひます。だから僕は又今の反動に滑稽な句が多く生れる時期が來ることを信じて居ります。

勿論僕の云ふ滑稽は縱には其の時代々々をリードするものであつて、橫には各時代を貫ぬくものであることを目標と致します。兎に角近來の川柳評論が柳樽の滑稽を排斥する傾きがある爲めに滑稽そのものを無視するかの樣に、近頃生れる川柳家がそれを鵜呑みすると云ふこともこの頃の句に滑稽味が乏しい原因の一つに數へられませう。眞の滑稽句がもつと生れてよいと云ふことは雨町氏のお說の通りだと思ひます。

町二――現在の柳壇でも滑稽は依然として迎へられてゐると思ひますが、只さつき云つた樣に誰でもが天與の才能を持ち合せてゐない、才能のないものがいくら眞の滑稽を生まうとしてもがいても徒勞に終ることが多いので、よき滑稽作家がなかなか出て來ないのではないですか？

紋太――その意味から云ひますと、如何なる種類の句にも天與の才能を有する、選ばれた作家があることを思はせられ、多くの才能を持ち合せない作家がもがいてゐることを思はせられますね。

町二――しかし滑稽は文學の内でも最も六ッ敷ものに屬してゐると見えて、よき滑稽作家、ナンセンスもの作家等が盛んに要求せられるにも不拘文壇に於ても誠に少い樣に思はれますが……

杏三――現代が資本主義末期である爲めにくだらない戯歳やナンセンスものが横行するのは當然であつて、眞の意味の滑稽を生むには次の時代を待たねばならぬと思ひます

雨町――僕は町二氏の云はれたやうな一般文學上に於ける滑稽と川柳に於ける今問題にしてゐるところの滑稽とは切り放して考へたいと思ひます。でなければナンセンスとか會我廼家式滑稽とかチャップリンの滑稽とか云ふやうに非常に錯雜してくるから今論じてゐる問題よりも範圍が廣くなつてゝるからです。

ひろし――川柳だけが現代の一般文學から切り離して考へられると云ふことはどうもおかしい。最も大衆的だと云ふところの川柳に於ては少くとも時代と共に進まなければならないのだから、一般文學と違つた足取りで進むことは時代錯誤だと思ふ。つまり時代の影響化にあるものだと思ひます。

亂耽――眞に現代の社會意識に目覺め、近代感覺を鋭角的に働かす人々は、そう云つた滑稽味なんかに多く關心をもたなくなるのが自然の結果ではなからうか。意識的にそうした滑稽味を排斥したり又それを求めんともがくことは無駄なことではなからうか。

路郎――まだ滑稽に就ては云ひ盡してゐない點が隨分ある。例へば客觀的には滑稽であるけれども主觀的に見れば悲劇と云つたやうな滑稽もあり、色々分類してあらゆる方面に付て話して頂きたいとは思ひますが、今夜は滑稽味に付しはこの位に止て次の問題に移りたいと思ひます

句が作れない時に就いて

路郎――こんぢは「句が作れない時に就いて」と言ふ題で談していたゞきます。

雨町――この題だと、川柳をやり初めてから相當の期間を經た人であつて現在に於ては一寸行きづまつてゐるといふ人にとつての問題であつて作句熱の旺盛な一般作家に對して齎らす所が少ないと思ひます。

路郎――それでいゝじやないですか。行きづまつた人だけでも有益であればこゝで談し合ふと云ふ事は無意義ではないと思ひます、それに行きづまつてゐると云ふ事は、十年も二十年も句を作つてゐるから行きづまると解するかもしれぬが、句が作れなくなると云ふ事は半年の作家にも一年の作家にも三年、五年の作家にもある事で絶体に句が作られない樣な事を感じた事のないと云ふ樣な作家は寧ろ稀であらうと思ひます。各人がそれぞれに時々さうした体驗を持つてゐられるだらうと思ふので、それを話してもらいたいのですが。普通の句であればいくらでも出來るが、それで滿足の出來ない時に行きづまると云ふ事になるので、さうでなくて單に句がどうしても出來ない場合もあらうと思ひます。

雨町――僕なんかは机に向つてペンを持つと(勿論拙い句ではあるが)可なり出來ます。この机と云ふものが創作の上に隱れたる役目を果してゐるのを思へばちよつと面白い感があります。

亂耽――不幸にも僕の机は魔術をしらない。實驗談を話すと去年の七八月頃麻雀に耽溺してゐた時分は全くそれは文字通り句が出來なかつた。あの時分に雨町氏の机を拜借出來たら或いはもつと進んだ

ものを持ち得たかもしれないと思つてゐます。

杏三――私は川柳を初めて以來常に句が出來ないので苦しんでゐるものであります。朝起きて考へ、電車の中で考へ、會社で考へ歸つて考へても一句も出來ない事が一週間も十日も續く事がしば〳〵あります。さう云ふ時には一旦句を作ると云ふ考へを拋棄して色々の文學物などを讀んだり、他の短歌や俳句等を見てゐる中にひよつこり又作れる樣になります。

雨町――僕もさう云ふ意味のことを机と云ふものを通して云ふてゐるのであります。句はどんなにあせつたとてほつかりと生れるものではありません。机に向ふとか、短歌や俳句などを見てそこから端緒を得る樣に、短歌を見るといふことや机とか云ふ樣な條件が句が生れるためには必要だと思ひます。

ひろし――紋太さんは饅頭をまるめてゐる時によい句が生れると云ふて居られましたが……。

紋太――そんな事もあつた樣に思ひます句が作れぬと云ふ事に就いては僕などは相當威張れると思ひます。僕の体驗を語ると句の出來ぬ時に机に向へば出來ることもあつたし、疊を視つめてゐると出來たり、町をあるけば出來たり、色々な滑稽な方法をこつて句を作りましたが、今ではどんな方法をこつても作れないと云ふ樣な心持に怯やかされてゐます。でもこの頃は無論今までやつた方法をこるしさん〳〵に苦しみますが結局はちつとも休みなしに句を作らうと思ひつゞけてゐる中に何かの方法で偶然に句が出來るのです。句を作ると云ふ事を一時中止すると云ふ事なしに、用事なんかで忘れてゐる時はとにかくとして、暇さえあればどんな時でも句を作る事を心掛けてゐるのです。つまり寢ても覺めても云ふ口ですな。それから大分前に句が色々な方法で句が出來なくなる度に自分は苦吟してゐると云ふ樣な事を思つてゐましたが名古屋の一絃氏が苦吟苦吟と云つてゐるのは大方の者は苦吟でなくて困吟であると云はれたのを讀んで大いに得る所がありました。それから苦吟と云ふ事は云はない事にしてゐます。句が出來ないで惱む事は得てして偉い樣な氣持を持ちたがるものですが餘り偉い者ではありませんね。

ひろし――お話の一絃氏は番傘の同人も退き所藏の柳誌も賣つてしまつて近頃一向句を見せんではありませんか。又夢路氏も行きづまるなどゝいふ事は弱虫の云ふ事だと書いてゐたが、全ゆる藝術界に精進するものはそれが眞面目であればあるだけより多く行きづまり、さうして又そこから進路を見つけて進んで行くやうに思はれるから、つまり行きづまる事が進歩の段階でないかと思ひます。從つて苦吟してゐる事を偉らがる必要もないが卑下する必要もないのです。

山雨樓――行きづまり禮讃説は面白いと思ひます。定期航路の樣に定つたコースを行く汽船の進み方と違つて句作のそれは常に發見であるから山中で途を探す樣な目に逢ふ事は豫期してかゝらねばならぬでせう。しかし僕はそこに句作の意味を認めるものであります。川柳を作るのか、川柳が自分の一生にどう云ふ役目を果してゐるのかと云ふ樣な事に就いて眞面目に考へ及ぶ時何處からともなく作句の靈感にうたれるのを覺へます。僕は最も苦吟してゐる方であります。

ひろし――僕の句の出來ないのはそんな風に意識的ではないのです。とにかく川柳の出來ない時には全てのものに感興を失つた少しも刺戟をうけないときです。例へば今年などは春からだん〳〵と夏に變つて行く世の移り變り等は殆んど無關心で何時の間にやら礼袍から浴衣に變つて居たり、しらぬ間に庭の筍が大きくなつてゐたりして、びつくりして呆然とする樣な狀態にあるのです。從つて私の川柳と云ふものも出來ないのが當然だと思

ひます。わざ〳〵作らうとか拵へようとか云ふ考へを持たない。以前には一年程まるつきり句の出來てゐない時もあります。その中に自然に又私の心の中に川柳の芽が吹いて來てひとりでに生れて來る事を待つ主義とでも云ふのでせう。

杏三――近頃出來ないと云ふのは麻雀に淫しすぎてゐるのではないのですか。

ひろし――夫にも餘り興味がもてません

路郎――ひろし君の最近句の出來ないと云ふ原因に就て僕は次の樣に考へてゐる。二月に妻君を失つた、これはひろし君の人生にとつて非常に大きな刺戟であつたと思ひます。餘りに大きな刺戟にぶつゝかつた時には却つて句が生れないものです。尤も特別の人があるかもしれませんが、普通は大きな刺戟にぶつゝかれば少時は堰き止められた河水の沈滯と云ふ形になるものであります。ちよつとした悲しみにさへ涙が出るのに、大きな悲しみにぶつゝかると却つて涙が出ないのとよく似てゐると思ひます。私が句に行きつまる場合は大ざつぱに云つて二つの場合があります。生活に疲れて全てのものに感興を失つた場合と、それから餘りに大きな刺戟にぶつゝかつた場合のその直後であります。前の場合には少しく頭を休めれば普通の句は生れるがしかし普通の句には滿足出來ない場合には隨分苦しむ事があります。後の場合はその大きな刺戟が堤をきつた勢で、實に素晴しい勢で句が生れて來ます。例へば子供が死んだその時には一句すら、句の形をとつて表はれないけれど、相當の時間がその間に置かれると非常に自然的にしかもある力强さを持つた句が生れますと云ふやうな場合を云ふのであります。

町二――私は過去に於ては暇のありすぎる時には却つて句は出來なかつたが、近頃は相當忙しくしてゐますが僅かに電車の中で少數出るのに過ぎません。少々疲れたんじやないか、とひそかに恐れてゐます。過去の垢がまだ多すぎるのでせう

ひろし――川柳雜誌創刊以來一月もかゝさずに川柳塔に句を見せて戴いてゐる綠雨さんの倦まない努力の御經驗を一つうけたまはりたいと思ひます。

綠雨――川柳が作れない時には机に向ふと却て作れない。締切が近つくと無理に作ります。其場合は行儀が悪い樣でが一人、室で寢そべつて川柳以外の雜誌とか新聞とか讀んでゐて作る事が有ます。其他郊外電車で坐り込んで句を考へる事もあります。其關係上荒刻りな下手な句を作るのではなからうかと思ひます。

雨町――僕がさつき机を云々したのは、机を單なる比喩に用ひたのであつてつまりどんな作品と云へども作らうと意識しなければ出來ないと云ふ意味の事であります。ところが机に向ふと一種の空氣ないし氣分が醸成される。この點はさつきのひろし氏の意見と反對 樣だが僕はやはり以上述へた事を信じたいのです。

ひろし――僕のは意見ではないんです。眞實の事を云つてゐるのです。若し句が出來ないからどうしたらよいかと凝ねられたら又別のお答へをするでせう。

路郎――この問題は人に依つて違ふのであるから種々の体驗を語つてもらふ事は非常に面白いと思ひます。漱石が小說を書くのにとにかく机に向ふ。そして書けない時は種々な本をひつぱり出して讀むそんな事をしてゐる中にあるインスピレションが來る。そこで筆をとる。だから作れても作れなくとも机に向ふと云ふ樣な事を何かで發表してゐた。川柳を作る場合にも同じ樣な事が云ひ得られる、この話は諸君の中のある人達の場合と合致してゐる樣に思ふが、川柳の樣な短詩型では殊に詩では必ずしも小說の場合等とは一致しないので、ひよつこりと句を生む場合があると思ひます。飛行機が飛翔するに先立つて滑走するのが漱石のインスピレイションに依つて小說を書くのとよく似てゐるが川柳ではさうした滑走によつてゞなく極く瞬間的にある感激から句が生れる事があります。此の問題に就いても尙詳しくお話を願へば際限がないであらうと思ひますが最早時間がありませんのでこの位で閉會致すことにします

川柳塔

□□□

○　長谷川一徹

ライター點かず隣りがマッチ貸しやりぬ
女給さん帶の汚れはつらからん
人妻もおり〳〵夢は見るものぞ
披露宴議員と云ふがしやべるなり
電車やり過ごせ雲雀鳴くなり
仲人の一役濟ませ足袋をぬぐ

○　高橋かほる

キユーピーの頭と枇杷とまちがはれ
惡口を云ひ〳〵蒲團にこぢをする
僕が僕がと山の話なり
燒き板の塀と朝顏とかしや札
藤椅子もちようど置かれる椽の巾

○　伊藤愚陀

STAGEの勞働脚氣の足をふる
唇を誰にあづけん夏雲よ
風情にたゞ〳〵首は細り行く

城東線風景

並ぶ物干ならぶ人の子黑きなりはひ
夢はふわ〳〵臍より湧きて
手と足から女の線を拾ひ集めて
カーテンと椅子に痴情の果しなく
BUILDINGが囲喰つちやつた彼女のキツス
髯の社長の髯を拂ひしおず〳〵と
母子して朝餉に茄子のつやゝけき

○　松丘町二

四捨五入その生活が恐ろしい
プチブルといふ蝙蝠の黄昏だ
行水や隅の幸福に甘んじて
烈日――街の體臭は昇華する
子等よ前へ！取り残されて老ゆる父
こゝろのふるさとがないさみしさです
ジャズとエロ睫毛を落つる酒の泡
朝は哀し昨日の汗と明日の米

○　庄萬よし

おごしでもなく閉鎖しますと工場主
聯隊區こわゞ會費取りに來る
特高課俳句もやつて小柄なり

○　住田亂耽

水の光る誘惑よ夏海水着の線よ（四句）
潑溂と海へ進出する日傘
甘い汁吸ふべく蟻も生れ來し
蜥蜴のなめる燈籠の苔

巷塵譜（四句）

大空を求めて街へ首を出し
圓タクと今の自分と引きくらべ
華かな嘘がテーブルからこぼれ
CAFEの燐寸をすりし煙くる

緣雨さんへ

童謠のレコードばかり殖へて夏

○　伊藤緑之助

大雨大出水（三句）
人家だけ残して廣い湖になり
嫁ケ島かと思はるゝ桑畑
街道を横切る鮒の列を見し

農民は怯ゆ

百姓は足をはなしてどこへ行く

ある女性に（二句）

バンプかも知れぬ心で紅をさく
倫落につかれし心空も見ず

○　中島鐵洲

龜甲萬の栓が出張つた臺所
長右衛門の戀を笑ふた頃がよし

○　朝田新水

詰襟のやはり女に眼が屆き
積立は女房が知つてゐてくれる
エプロンの白きが故の煩悶か

博多人形

ひよろ長い姿体聖書を胸に抱き　青洞門

拗ねてゐる牛に洞門走りぬけ　別府

湯の街の晝を淋しく羅宇仕替　瀬戸内海

しばらくは白帆も見えぬ雨の中

肺病の散歩漁師は笑ふなり

○　水谷鮎美

宵の雨枕のさやの白すぎる

嗤ふばかりの反逆兒にもあらず

初戀の指先きにつく赤インキ

のろけてゐれば鼻のすゞしき

勝美ちやんの死（二句）

凹んだおもちやが母の眼にのこり

御詠歌がちにぎやかで泣かされる

○　出口雨町

西瓜ごろり晝寢ごろりの夏の晝

煙突がぬつと立つてゐる晝日中

曇つた空だ雀が一羽飛んだきり

求めてるものは世界の外にあり

興奮もよいが力はあるのかい

金に走ることにも理論つけたがり

子や孫にこのみじめさは傳はるな

合理化の聲が脅迫めいてゐる

食へぬ人は來いと牧師も言はぬなり

タクシーの殘したガスと失業者

リンゼイも讀んだが俺はまだひとり

處女の夢　夢は林檎のつやに似る

文明がまねるニグロのジャズバンド

カクテルを運ぶに袖は無駄でなし

一匹の螢にフェルトまで濡らし

○　福田山雨樓

養蛙塲世は不景氣となるばかり

搗いてゐる月の兎はさかさんぼ

國產品を贅澤に買ひ

桐の葉繁り家は逼塞

鮮人の小屋の跡かや夏の草

○　岩崎柳路

四帳半香水線香等を立て

緊縮と空のドックとストライキ

○　橋本緑雨

云ふことだけ云はし盃持たすなり
夏羽織師を迎へるにかるすぎる
云ひよられた女解雇をおそれて居
月給は次から次へ支度金
日曜の打合せが出來てさようなら〳〵
合理化に親子三人浴衣也

◇　櫻井圓角

意地悪のことまで母に似た娘
事務やなごしてる女が貰へるか
理學なごそれやふ縹緻な娘ぢやろ
駈落ちを女恥ても居らぬなり
姑へつかへますことは悲しき妻よ
女ですものをと無茶を通すなり
リーダーがなくては女生きられず
經濟と云へば女はけちになり
妻と云ふ名は毛蟲ほど嫌ひ
愛故に夫と罪を共にした
街見ゆることで御裁縫はかどらず
苦勞だけしに來た樣な妻だつた
大官であるから嫁げと兄も兄
今生の緣を彼女と切つて死に

◇　松村敏郎

鹿島立つ姪へ花輪も買へず病み
女の子一人あらばの愚痴が合ひ
口々に子を當にさす見舞人
振り袖を着せて御國を忘れ兼ね

◇　阿部閑生

からだなごかもて居られぬ酒ぞかし
ことかくして女は戀を吐き出した
寢てるまにそつと取替へばや心
唇は石に觸れたる如くなり
金龜子ものを思へる顏をうつ

◇　永田里十九

俄雨相合傘をよけて逃げ
里心我れにも思ひあたること

◇　桑原京郎

馬鹿でゐればごやら今年も夏の來つ
世の中よちやんちやらお可笑し薪木割る
正直に正直にして怒鳴られる

（一句）
甥の成長をよろこんで

そらこんごへのへのもへの書いてやろ
つゝけばしぼむ乙女ごころよ
花嫁となつてほんとに泣きに來た
大社前にて
帳落ちになつてまへんか出雲神

◇　友淵貴山

子福者の子と生れきてめぐまれず

膏藥を張つて醫大の學生だ
虛無僧の尺八くれる方を向き
印刷になつた督促ほつとかれ
資本家の尙俺よりも脊が高し
朝戻り袂に錢の音がする
二人して歩けばあかい夏帽子

中見光路

◇

舶來にせうにも金がないのなり
納棺を思ふ胡坐の鐵砲風呂
呑めば止め呑まねば呑めと云ふ女房
蝶々の何求めてか塀を越し
面白いことには今日も生きてゐる

生田翠夢

◇

皆んなから離れ夜汽車を寢てゐなり
サラリーマンサラリーマンと云ふ姿
横顏に疲れを見せて女王なり
もう醉へて女給は一寸すねても見
眞劍な程女給の戀はあはれなり

川村觀月

◇

さよならと書いて子供も死んでゐる
俺を見て彼も彼の女も笑つたな
二十四五障碍物がせまりくる
その中に指をくはへる子が一人

平井蒼太

◇

木馬に乘るたはけたるわれ
木馬が乘せ行く心のふるさと

三輪夏曉

◇

細やかな情よ他人の妻で居て
言ひそびれ結局友に奪はれる

森石竹

◇

林檎を頰にあてゝ走つて歸る

熊本黃峨

◇

君をだしぬいて何が出來ようぞ
國に居る時を忘れず木綿着る

木山青砂郎

◇

象牙箸重湯に手持無沙汰なり
立膝の娼妓娘の頃をいふ

須崎豆秋

◇

青葉の影に馬の性慾
物食へはいちゝ障る哀れさよ
たくさんなゴム靴乾して日曜日
せつかくのピラだ程よく貴ろてゝろ
公休日娘晝寢をしに歸り

西村市公

◇

のんびりとした町に來て苦勞する

小指まで汚ごさずにすむ狐ずし
學生のストライキです文房具屋
雨にぬれても遊びに無中です
言ふ事がまだある伯母の卷煙草

中澤濁水

◇

子の爪を切る丸髷の歪む顔
手が塀へ伸んで隣こお裾分け
下女探し近く奥様お目出度し

西安杏三

◇

影が行く辻占持つた影が行く
五圓札握ればおごる心にて
たまさかに乘れば圓タクバンクする

三女出生（二句）

梅雨晴れの空に産聲こゞかせる
生後五日まつたき母の玩具にて

丸山公二

◇

白日の道にうごめく撒水夫
ひがまれてたつ瀬のないはなさぬ仲
死ぬ事は嫌こて女しらじらし
頼み甲斐ない轉寢へ着せてやり
名も知らぬ子もくる内の辷り臺

淺井冷々子

◇

妥協して播いた豆さへ芽が出たよ
ほめられて左様〳〵それは左様です
文化村眠氣ざましの鍬を持ち
病妻の寢顔淋しく蚊を拾ひ

水田光穂

◇

玩具屋に立つてゐた俺のをかしさ
獨身の内を男は愛される
失業の友に冷たい眼で見られ
淋しさは女給が猫を飼ふて居る

池田雪峰

◇

妹のたもこの輕さうらやまし
おかしくもなし八十の妹よ
妻よりもその妹の美しく

上田柳影

◇

笑くぼ見たさの僕の道化よ
卑屈にも身に嬌聲を浴びにゆく
結局は人道主義の域を出ず
歳上の女を戀ひぬ梅雨ちかく

山本凡々子

母と歩む

握力つよくおろかしき手に母のみ手
氣儘なんでせうかこ令孃の不滿

柳壇の人々

【3】

麻生路郎

安川久流美君

安川君は其の柳壇的華やかさに於て昔日の觀が無いといふ人があるかも知れぬが、その華やかさを失つてからの君に反つて人間味も出て來たし、作品の上にも藝術的向上を思はせられるものがあると思ふ。

○

君は古くは柳誌『六華』『礎』『百萬石』を主宰し、北陸柳壇のために大いに氣を吐いてゐたが、曾ての君はあまりにもブチブル意識に煩はされ過ぎてゐたと思ふ。大正八年に出た句集『かき松葉』の如きも又、そのころの君を物語るに充分な所産の一つであろ。

○

その後、環境の逆轉するに連れて人間味が漸く首を擡げ、遂には君の句作態度にまで影響し、近年著しく心境作家としての色彩を濃厚ならしめた。

そして幾分暗い詩人といふ型に落ちつきつゝあるやうにも思へるが、しかし安川君は性來の暗い詩人でない。暗い詩人が持つ獨特の陰慘さや憂鬱さが無い。それは黄昏が持つ寂寥さといふ程度である近ごろの句に就いて見やう。

○

君が後援しつゝある柳誌『風見草』から左の數句を抜く。

死骸見た戻りに儲け口を訪ひ
悟つたかこの寒いのにサイダ抜く
涙なき悲しみの日よ晝の鐘
死人の前に錢の音かな
燃え盛る躑躅の蕋に殘る春
花桐に惱みのつゞく片便り
緋牡丹のくづれて蟻の足早し

曾ての君は『死人の前に錢の音かな』といふやうな句の境地へは振り向ふこともしなかつたが、環境は君を批判の世界へ持つて行かうとしてゐる。が、まだ〳〵ごつかに享樂的な句ひがひそんでゐて、昔日の君を想起させるものがある。しかしそれは必ずしも惡い意味ではない。寧ろ落日の偉觀にも等しい美の殘象とも見ることが出來る。

殊に『悟つたかこの寒いのにサイダー扱く』の句を讀む時は近時酒を斷つた君を思ふて涙なきを得ない。酒ばかりは眞に君の溺愛するところであつたが、酒を斷つてもなほかつ『片棒をかつぐゆうべの海豚仲間』の古句を愛誦しつゝありや否や。

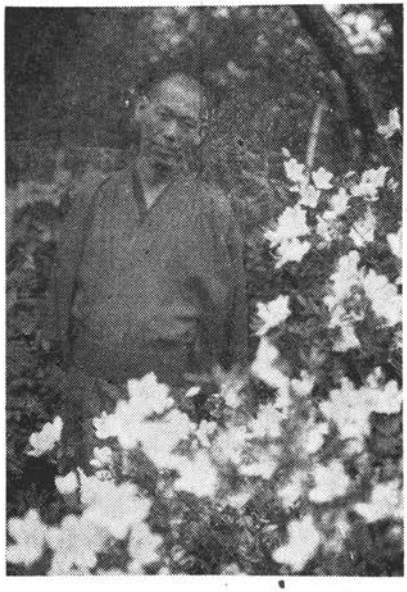
『川柳雜誌』の粒々集をのぞいてゐると、

浴衣着ですんなり水を見て過ぎるの句が眼に映つた。北國川柳詩人のすがゝしさを懷しく思ふ。

○

君は堂々たる偉丈夫である。性格は至つて磊落で、物にこだはるといふことを知らない。しかしながら、他人の句などは比較的よく暗記してゐる。この事たるや、必ず對手を驚かすに足ると共に如何に君が川柳を熱愛するかの證左となるだらう。

君はデモ政治家や、デモ辯護士は嫌ひださうだが、なるほど、君の性格だつたら、デモ政治家やデモ辯護士などとはそりが合はないだらう。



數年前まではよく旅に出たが、近ごろは殆んど鄉土から外へ足を向けない。

○

全國幾多の柳誌に、君の斷片的感想を見る。說くところは常に平易であり、簡勁である。ただ惜しむらくは、この筆をもつてして研究的大文字に乏しいことである。

が、しかしその地方に於ける新聞紙上並びに柳誌上には、常に啓蒙記事、鞭韃記事を掲げて縣下柳人のよき先輩であり、よき指導者であることには敬服せざるを得ない。

○

安川君が川柳に指を染めたのは明治四十二年だとのことである。窪田銀波樓君の北國柳壇に育てられ、遂に北陸を背負ふて立つた君も、又日本柳壇に於ける一偉彩たるを失はない職業は新聞記者、年は三十九、居は金澤市味噌藏町。（寫眞は安川久流美君）

月、詩人、あらエッサッサー

—（川柳的小話五ツ）—

川上三太郎

—◇はつきり◇—

此の間のロンドン會議が成立する數日前の事である。或る男が勇敢にA大臣を道に擁した。

『軍縮會議は成立しませうか？それとも又……』

×

相手が口を開く前に此奴何を言ひ出すかといふ事が、頭へ直ぐピンと來る迄に昔から始終多くの客に接し、殆ど洗練に洗練され切ッたA大臣も、流石これには消防自動車に會ッた乳母車ほど驚いた。そして

『さあ……』

とその儘、何氣なく體を躱して行ッてしまッた。

×

だがその男はすつかりその返事で滿足した。さうしてまた感心した。何故かと言へばそれから直ぐ會議は成立したからである。

ところで彼はよく此の事に就いて人に語つた。

『君、何うも偉い人間ほど、總て物事をはつきりと言ひ切らないものだね』

さう言つては彼のA大臣を引合に出した。

×

『けれど本當にさうでせうか』

だが或る時彼の妻が彼に斯う反問した時

『本當だとも！これだけは確かに斷言出來る！』

と彼ははつきり言つた。

—◇夫の心配◇—

『やあ、よく來たね。まあ上りたまへ』

『有難う。何うも偶のお天氣でも、斯う世間が不景氣ぢや、あんまり暢氣な顏をして往來を歩いても居られないから困る』
『さうでもないぜ。君はかなり暢氣な顏をして歩いて來たぜ。僕は此の窓から見て居たンだ』

×

『こころがこれで却々暢氣ぢやないンだ。今朝も飯を食ひながら、フト月給が三十で割つて見たら　飯が咽喉へ通らなくなつてしまつた。すると妻のやつ、貴郎此の頃本當に紳士になつたわね。一寸もガツ〳〵なさらないもの……ッて言やがつた』

×

『やあ、夕立だ〳〵！』
『何だ顏の色を變へて、何うしたンだい？』
『妻が君、今朝から銀座へ出掛けて居るンだよ』
『なるほど、さう言へば先刻から令夫人の姿が見えないやうだね』
『しかも傘なしで出掛けたンだ』
『ナーニ君、それなら大丈夫だ。雨の歇む間三越か松屋へでも寄つて居るさ』
『飛ンでもない、それだから斯うして狼狽へて居るンだ。妻は今朝僕の生命保險料を保險會社へ拂ひに出掛けたンだ』

——◇　詩人兼資本家　◇——

彼は醉歩蹣跚として外へ出たっ月は絹のやうに彼を照した。

×

『旦那、五十錢やつて下さい』
『冗談言つちや不可ない。直ぐそこぢやないか』
『それでも……』
『いや好いよ。ブラ〳〵歩いて行くから』
『ではお幾何なら乘つて下さるンで！』
『まあ、三十錢だね』
『宜敷う御座います。何うせ歸り俥です。お供致しませう』
やがて彼は俥上の人となつた。月は彼と彼の俥夫の影を追つた。

×

『旦那、參りました。もし旦那、參りましたよ』
『うん、やあ御苦勞々々！』
彼は俥から下りるとポンと一枚の銀貨を俥夫の掌へ乘せた
『おや旦那、こりや五十錢ですぜ。モシ旦那、これぢや二十錢餘分です。旦那、旦那！』
『なあに、好いよ、とつときな』
『……』

×

月は此の時獨り言を言つた。
『あの男は詩人だ……だが資本家にもなれる』

——◇　首飾りと女性首　◇——

冷靜な文豪チエホフだつて、時には癇癪を起す事がある。それは恰度我々が朝起きると新聞が配達されて居ないので、大急ぎで新聞屋へ赤ン坊を背負つた子守を取りにやると、今度は昨日の新聞を得々として持つて歸つて來たので、思はず

『チヨツ！』

と舌打をするやうに。

然しチエホフがそんな時、さうなればなる程落ちついて行くのは彼の愛妻であつた。

×

或る日チエホフの癇癪が完全に破烈した。さうしてそれが彈丸のやうに彼の夫人に打つかつた。彼はナイフとフオークを投げ出して怒鳴つた。

『おい、一體お前は何の爲めに頭をくツつけて居るンだ！』

すると彼女はその鳩のやうな眼を一層丸くして應へた。

『妾の此の頸飾りが落ちない爲めにで御座いますわ』

さうしてその見事な眞珠の頸飾りを引張つてにつこり笑つて見せた。その和やかな空氣に彼の機嫌は忽ちなほつた。

×

だが日本の此の頃の洋裝をした若い女性の首だつて、矢張りその頸飾りが落ちない爲めについて居る……然り只單に頸飾りが落ちない爲めに……。

◇あらエッサッサ◇

人間は誰でもそれが稼業といふ事になると一種の昂奮と奮鬪的精神が湧然として來るものですね。私が淺草の或る安來節の一座に手叩きとして雇はれて居た時の事です。エ？手叩きですか？手叩きといふのは觀客席の前の方へ朝の十時から陣取つて太夫が聲を張り上げた時、こゝぞと思ふ頂上のところで

『あら、エッサッサー』

と手を叩く役なンです。するとそれにつり込まれて他の客が思はず

『あら、エッサッサー』

と浮れますといふ事になるンです。一座の方で豫め日給で五人も七人も雇つて置くのです。その上恰度オーケストラで言へば、指揮者みたいな男が居て、萬事その男の尖鋭な指の行動に依つて、それぞれ手を叩くのであります。勿論今日でも此の拍手係却々繁昌してますよ。

ところで私が此の拍手係の指揮者だつたンです。笑ッちや不可ません。何しろ私の最初の拍手一ッで十人の拍手係、それにつり込まれて滿場割れン許りの喝采となるのですから私の得意は絶頂でした。殊に私が窃に思ひを寄せて居る小花といふ花形が出る時なぞは、私の魂は異常な緊張を帶びて、殆ど夢現のやうになッつて奮鬪活躍するのでありました。

さて或る時、一座に何か祝ひ事があつたので、私たちは樂屋に呼ばれて一杯御馳走になりました。斯ンな事は一年に一度もない、所謂千歳一遇です。みンな親の仇敵にでもめぐり會つたやうに牛飲馬食しました。食ふは〳〵、飲むは〳〵、その中で

も私は全くへゝゝゝレケになッて仕舞ひ、歩く事は元より動く事も出來ず、到々その儘そこへ打倒れて仕舞ッたのであります。

『困ッたぞ、こりやあー』

何しろ指揮者が打倒れて仕舞ッたのでは、いざ開演となッた此の間際に大騒動です。何とかして酒の醉をさまさせやうと、藥を飲ましたり頭を冷したりしたのですが一向に効きません。私は全くグニャ〳〵になッて居るのでありました。

するとそこへ娘屋入をしたのは例の小花でした。彼女は此の態を見てにつこり笑ひ、

『あたし、やッて見て上げるわ。一寸誰か、三味線ゞ彈いて頂戴……』

やがて皷、太皷、尺八まで入ッて安來節……。

唄は彼女の十八番の曉の鐘です……。

〈曉の鐘、ゴーンと鳴りや、雀がチウ〳〵、鴉がカア！ 雞はコケコッコー！……』

豫て思慕する彼女の玉のやうな聲……私の魂は徐に意識し始めました。さうして俄にカッと眼を開き、起き上ッたかと思ふと忽ち、何と私は

『あら、エッサッサアー』

と手を叩き始めたではありませんか！

○

僕は此の話を聞きながら

『なるほどヒョッとしたらさうかも知れない……』

と思つた。然し家へ歸つて夕方へちまの花へ水を打たせてビールを飲み始めたが、ビールが三本目になつた時、僕は斷乎としてさう思つた。

『いや、あれは正にさうだ！』

川柳書架（卅九）

風雅 柳多留講義 初篇

西原柳雨 著

▼その序の一部を抜く。

これまで柳樽の解釋を試みた人は二三ありたれども、いろ〳〵の事情にて三篇以上續いたものは無い（中略）柳樽初篇より第二十四篇までは全篇百六十七卷中での骨子とされてゐるので、本づ夫れまでを第一期事業として毎月約一篇宛卽ち二ケ年位の日子を以てその講義を終了する豫定を以て着手した。

（中略）一、由來古川柳の解釋は非常なる難事とされてゐる、されば疑問不明の句多きは、寧ろ其分にて敢て不思議は無いのである。本書も又誤釋謬解甚だ少からざるべきを恐る、切に大方の叱正垂示を仰ぐ（以下略）

▼昭和五年六月二十日第一刷發行、菊半截三〇六頁、定價壹圓五拾錢、發行所東京市神田區一ッ橋通町三番地岩波書店

▲序文にもあるやうにこの種の刊行はなか〳〵難事業だけに幾人か手をつけて完成しなかつたものである。著者西原柳雨氏はこの道の第一人者であり、造詣と努力と相俟つて、必ずや完成し得られるものとして大いに期待したが不幸にして病のため斃れられた。因に第二篇は脱稿濟とのこと。

唐柳短解

蛭子生

唐柳短解をモット續けよとの御註文がある。實は三年がゝりで百十二句の始末をつけたのであつた。何分詩的價値の乏しいもので、餘り參考にもならぬからと思ひ、且は私の如き無學な者には御想像より骨も折れる。短辨はなるべく原本通り引用したい爲めに、印刷や校正にもお手數を煩はすので遠慮してしまつたのであつた。然し本誌でなくてはコンナものは快く引受けて呉れる先もなさそうなので、一頁限度で時々掲載を復活し、諸氏の御助力を仰ぐ事としよう。

野球フアンである私が『ホームランへ天も地も躍つた』といふ樣な昭和新興川柳とかに、更に興趣をもたず、ルールの飜譯におさまつた川柳を發表する人々の氣が知れぬと思つて居ると同時に、今日でも牛若が世辭を言つたとか、小督の局の門に馬の糞があつたとか、所謂歴史吟許り年が年中作つて居る人々の餘りにも遊戯態度にアイソがつき、傳統川柳も哀れなものだと感じて居る矢先き、唐柳短解なぞは大に誤解を招く恐れなしとしない。これは全く興味本位な知的なセンサクに過ぎない事を呉々もお斷りして置くそして現川柳詩徒としては、ヨロヅ屋に

句會の横顔

大正十三年一月十九日 南堀江書林倶樂部に於て川柳雜誌社創立句會を開催してから昭和五年七月六日端之坊における 本社例會は實に例會九十三回に及んで居ります。私は自分の寸閑を盜んでそれ等の句會に 出席された多數の作家の出席數を調べて見ました。今後句會への精進を思ひ御參考に供します。改名同名に依る多少の誤報があるかも 知れませぬが極力調べたつもりであります。

（朝田新水調）

（カッコ内は出席回數）

綠雨(八五) 路郎主幹(八四) かほる(七二)ひろし(六四) 萬よし(五八)松郎(五二) 突支坊(四五) 紋太(四二) 鮎美、山雨樓(三九) 飯山(三八) 琴人、馬行(三七) 三笑(三六) 方眠、刀三(三五)源坊(三三)文久、聞路(三二) 彩秋(三一) 加香(三〇) 愚陀、孤舟(一九) 亂耽、助六一路(一八) 里十九(一七) 舟々(一六)双柳、嶺月(一五)文蝶、鵜足、翠峯、鶴峯久郎 一四)波郎、柳骨(一三)山月、觀月溪花坊(一二)雨川、新水、凡平(一一)公二、貴山、輝翠、黑天子 一〇)素人(一九)乾坤、炭車、露斗(一八) 蒼梧樓、紫明、陽喜亭、三次、冷笑、一南、双葉子(一七)しげる、幸泉、卯三、松雨(一六)苔香樓、壽仙、葉平、鳶歩、三平(一五)秀哉、虚白、黄峨、一柳、夕鐘(一四)放

斯る仕事にも努力して置かねばならぬ、マダ〳〵過渡期だと考へさせられる。古句の六分はドウヤラ氷解したかの悦びを有する。今二十年も掛つたら後進者に。いらぬ古句地獄の憂き目もみせずに濟むであらうか。

（一一三）伊勢の留守西門慶が入りびたり伊勢參りの留守中に、家庭の紛擾を生ずる因が出來るのは

○伊勢の留守女房阿漕な事もする

○心細さうなたちかと伊勢の留守

等古句に澤山よみ殘されて居る。

西門慶は水滸傳に出てくる男で、武大郎の妻が淫婦であつた處から、夫の旅行中に關係を生じ　遂に夫を毒殺する。「西門慶は彼の人と共に房間の裡にあり、頓て王婆が計によつて、一對の筋を袖にて拂ひ落しけるに、已に因緣到來したるにや　かの筋幸ひ武太郎が妻の脚の邊に落かかる。西門慶急に是を拾ひ取る體にもてなし、彼人が失々と文佳なる小脚に碍りけれども、彼人これを曉さず顏にて微し笑を含しかば西門慶これを見て心の内に金を鳴し皷をうち已に　計　の如く行て頭を擡げけるに、彼人打笑つて云く大官人は是何の戯れをなし給ふや、西門慶これを聞て、身を抖ひ顏を紅らめて云ひけるは、我は原來夫人を慕ひ想ふこと、方寸に逼て此身を惱ませり、願はくば夫人我一點の誠を察し給ひて、廣く恩情を垂れ深く愛憐を惠み給へ、彼人此言を用ひて答へ云ひけるは、大官人もし實にかくのごとくんば、我又何ぞ情なからんや此上は只長遠の契を結ぶべしとて、遂に兩人恩愛を相交へ、此日ぞ乃ち雲雨の始めなり」である。

西門慶は武太郎の弟武松に頭を刎ね落さる。阿嫂も亦然り、以て兄の靈を慰めた。

馬、石竹、水府、武子、一醉、塊人、桂風、一杉（一三）沐天、英郎、柳影、夢路光太樓、青砂郎、古　山、雅幽、悟空、百石、吉丁、十紫、青影子、悠々（一二）のほる、文錢、百雷、長人（一一）芦穗、屏三呂、南枝、たけし、豆秋、枝呂、丸葉、惡源太、鳴玉、白帆、流星、翠川、子行、さだを、古燈（一〇）杏三、多聞、梢雨、幽香、蚊十、太閤、雅流、赤城、靖弘、内匠守、柳笑（九）テルホ、悟郎、普門、史風、金剛坊、松籟、竹榮、川洞佳山、蝶二、喜由、碧樓、武藏坊（八）麥郎、秋晴、伴内、駒人、啞人、稔、朝陽京二、千春　卯生、柳人、萬年青、十字路、つばさ、一文字、薫流、青歌、四五麿（七）東洋鬼、柳甫、萬樂、素生、わたる、明果、麓生、一狂、溪水、清公子、彩峯、楓林、沒食子、夢中、瓢山、小六迷亭、吉郎、蝶哉、二葉亭、順三、仕鳴世間亭、木三、幸堂、徹底郎、春魚、蹄二（六）夏曉、野人、双車、憲太、柳水、梅風、きよし、千沙、苦笑、萬翁、麥魚伊佐美、山花紅、夢遊、雪峯、英賞夫、灯舟、裸人、勇宗、九柳、鴻堂、多喜女二水、其象、花月、靜雲、月兎、飛水、好古、革郎、五葉（五）狸山、水鏡、津々欣遙子、一洲、千代二、春篁、日車、二葉、美の作、秋水、信かず、碧水、萩磨祇梵、仙秋、春莊、琴月（四）以下次號

自働電話

川村花菱

四月の半頃、私は例のジュンバー事件の參考人として檢事局に呼ばれた。今でこそ參考人と云へるがもらつた手紙には『相尋ねたき筋有之――』と云ふ罪人あつかひのもので、十二時に來いと云ふからその時間に行つた。受つけにハガキを出すと、トルストイのやうなヂヽイが無雜作にそれを重ねて仕舞つた。すぐ取次がれるのかと思つて居たので、その事を聞くと

朝から晩まで待つてるのもある、向ふの都合でそんな事は分るもんか、そつちで待つてるんだ

とぬかした。全くぬかしたのだ。見るとうす暗いひかへ所には百人以上も待つて居る。私はこりあ大變だと思つた。

氣にしながら見て居ると二階からつるべのやうな糸が下つて居てそれに紙ばさみと號外屋のリンのやうなのがついて居る。上から呼び出しの紙が下つて來ると受付からはたまつたはがきをはさんでやる。仕事が舊式そのものだと私はイヤンなつた。

控所の中には、四十がらみの女が、印紙を賣つて居る。それが椅子に犬の皮を敷いて、白たびの下に黑い靴下をはき込んで居る。守衛のやうな男こお花見のはなしをして居る。

私はそれ所ぢやない。いつまで待つか分らないので、家へ一應電話をかけたいと思つて自働電話のありかをたづねると、門の外にあると云つた。玄關を出ていくらさがしても一つもない仕方なしにかへつて來た。

控所の中の人は、自働車の事件が非常に多く、呼び出されるとすぐに紙を持つてかへつて來て、印紙を貼つては納めてかへる。それは簡單な罰金らしい。

たゝきつけてやると云ふ風な態度で納めに行く。

『驚いたナ、あの十五兩の一件な、あれまですつかり種が上つてやがる……』

こんなはなしも聞こへた。二時間程待つとよび出された。二

階の室へ行くと、病院のやうに廊下にドアが並んで、廊下にはあみ笠の人々がずつと並んで居た。

十二號室と云ふのへ這入る爲に、ドアをノックすると、返事がない。そのまゝ這入ると背廣の人が居た。はがきを出すと

『イヤ御苦勞さまでした、今檢事正の所へ行つてますが、下でお待ち願ふのも失禮ですからお呼びしました……どうかお樂にと……』

云ふので私の氣持は少し落ついた。しばらくして檢事が來た。はなしは非常に永くなつてしまつた。その間に、煙草の火をつけてくれたりした。

『一つお茶をいれませう』

と小使を呼んで、一度茶道具を洗つてくれと賴むと、小使はだまつて云ふ通りにしたが、その態度が、おれは裁判所には使はれて居るが、あなたには使はれて居ないと云ふ風があり〳〵と見えた。やつぱりロシアの小說に出るヂヽイの感じだ。

檢事は、自分で茶壺を出してお茶を入れた。

『まだ出ませんかな……』

こんな調子ではなしがはづんだ。電氣が來て仕舞つた。用がすむと雜談になつた。

『私は○○と云ふんですが　官用名刺は上げない事にしてありますから……あゝこれです』

と机の上にある黑ぬりの三角の木に、白で○○檢事と書いてあるものをつまみ上げた。

いよ〳〵かへる時、檢事は室の外まで送り出して

『いろ〳〵御苦勞さま、御かげで非常に參考になりました、ありがたう』

と大きな聲で云つた。私は、これがだまつて歸ると、

『長時間嚴重なる取り調べをうけて、やう〳〵一先づ歸宅を許された……』

と云ふ事になるんだなと思つた。階へ下るともうみんな引けて居た。暗い廊下をまがりくねつて、やう〳〵明るい外へ出る、とそこに自働でんわが四ッ並んで居た。

ナーンダ……こゝにあつたのか

と、すぐその一ッに這入つて家へでんわをかけたが、五錢がないので十錢入れた。用はすんだが、五錢損するのもイヤだと思つて又友達の所へかけた。

『モシ〳〵すみませんがね』

と交換手が云つた。

『何です？』

『あの、三ッ目の自働でんわに、デンキがついてるかついてないか見て下さいませんか』

私はやれ〳〵と思つた。一度箱を出て、それをしらべると、電氣はついて居なかつた。その事を答へると

『ごうもすみません、變だと思つてたんです……何番へ？』

私は引かれものゝ弱さと云ふやうな事を、しみ〴〵と考へて自分てものが可笑くなつた。

近作柳樽

路郎選

朝の濱歩けば逃げる蟹がゐる　東京　佐保蘭
涼み臺按摩チョコンと忘れられ　同　同
い人のこと想つてる絹うちわ　同　同
肩をぬぐ母親がゐる青簾　同　同
うちにゐた方が涼しい夏の母　同　同
會社側門閉めきつたきりになり　大阪　露斗
朝顔の八寸咲きにうらぎられ　同　同
濃くぬつた上で男をあざむかん　同　同
すなをな象が叩かれてゐる　同　同
夜の底をんなの頰をつゝきたし　京都　無冠王
おもひきり男をしほれ賣春婦　同　同
低能の子の寂しさよ曇る空　同　同
東京から來た親戚を上に据え　大阪　素峰
暫くは子を中心に應接間　同　同
職長の趣味は風呂屋できかされる　同　同
夏を早や案じてかゝる女の子　別府　綠灯
唄の文句が氣に入らぬ母　同　同

肺病は悲しし　女も酒も毒　同

ケーブルの灯が見えてます泣いてます　大阪　曉風

泣く爲に長い睫毛を女持ち　同

人ごとでない狂人に目をそむけ　同　空山

二等室ひつそりとして讀んでゐる　愛媛

積んで置くだけの書物も金が買ひ　同

一坪の畠地主の氣で作り　同

生きたいが爲の裏切者だらう　金澤　冬青

苦面して歸れば白粉ぬつてゐる　同

ひがむではなかつた妻も味方です　同

チップはチップ戀は戀だよ　別府　晃卓

戀は今百パーセント死ぬもよき　同

寢は寢たが續く思案に眼が冴へて　同

仰山に虫を怖がる顏でなし　福島　狂水

部下の首馘るに村正よりも冴え　同

思ひ出は遠く腕卷買うた頃　螢ヶ池　武郎

お妾の手當をこりに御出勤　同

養生のプランを立てゝ落付きぬ　愛媛　英賀夫

夕陽照る〳〵大阪がなつかしい　同

當にせぬ妻の儲けにふれんこす　大阪　沒食子

うつこしい話ビールが泣いてるよ　同

神前をこは何事ぞるざりの子　金澤　木偶人

油さし〳〵好きな女工の機へ來る　同

自炊生活

文化生活ですねえと女將言うて去に　島根　紫光

Kへ

看護婦を若いと見てか無理を言ふ　同

失業はしても酒だけあるのなり　京城　瓢二樓

鉋研ぎ〳〵大工は思ひ出し笑ひ　同

目覺れば搾取々々の手が亂舞　大阪　沐天

みなし子となつた五月の空蒼し　同

爪に火を點したにせよあの資産　同　吟風

單線の枕木にさへ夏の色　同

レコードホルダー明日へそなへる汗となり　同　山茶花

手折るとか何とか言うて金で買ひ　同

閉められた窓へ嫉妬の身が慄ひ　松江　喋朗

憂鬱をかなぐり捨てゝ床屋を出　同

暇乞ひ母の情の荷がかさみ　大阪　且泡敗メ　櫻果

ほんとうの廢兵だのにあやしまれ　同

すれ違ふ衣裳も夏の輕さにて　大阪　明果

氣苦勞も出來て事務服脱ぎ捨てる　同

下宿でも仕ませうねえと妻は云ふ　松山　玄々子

野心家と云はれる程に世故に長け　同

髪むしるやうに惱みのある男　大阪　影人

上手下手なし吸取紙の仕事　同
丸髷も裾も氣になる砂埃　京都　呑空子
就職も出來た四月の花盛り　同
挨拶はよせよと奥に友の聲　大阪　夕鐘
待つてゐる娘へはづかしい太閤記　同
金壹封もろくも爭議團は負け　姫島　方眠
早出居残り此の頃ためて居る話　同
欠伸して子供の慾をきいてゐる　神戸　九葉
夏の海十八圓の二階にゐる　同
天井は高く和尚が一人居る　島根　麗亟
惡友のだん〳〵背へ迫つて來　同
子を叱る事さへ出來ぬ其暮し　大阪　四五磨
看護婦の嬉しい世話も今日限り　同
故郷は忘れられぬが暮されぬ　鳥取　湖山
嫁の來る隣にすまぬ子を叱り　同
ブルと云ふ其の城壁の冷やかさ　鳥取　耕民
對手にもされずに貯めてごうする氣　同
朝と云ふ氣持が花の庭に見え　大阪　凉哉
何と子の多い夕暮ほたる狩　同
委かされて長男急にふけて見え　河内　赤笑
戀かしら夢の娘を考へる　同
生活に疲れし髪の赤毛なる　大阪　捨男

病床にて

淋しくも藥袋のよれてゐし　同

氣晴らしのキネマ皮肉を見せられる　奉天　登美坊

日曜日三越へ行く名古屋帶　同

ラッシュアワーで戀を落した　金澤　今雨

釣れてゐぬビク覗かれてかるく逃げ　同

テントから夢遊病者になるピエロ　大和　勝二

閑話休題君よ十圓持つてるか　同

保險あるばかりに火元疑ぐられ　長野　柳兒

揉めて居る聲を集金聞いて待ち　同

負けてやる事を六年生は知り　大阪　南牧

安く賣つたので店員怒られる　同

愛の巣のけつまづいても笑ひ合ひ　大阪　ドシヂ

娘十八赤い鹿の子も欲しからう　同

カロリーの足らぬ子供を着飾らせ　松山　青帆

新らしく生きて救世軍の卒　同

子を負うて夫のあとに嵐山　姫島　二竹

クッションに其の幸福を忘れまじ　同

尖端を行く氣美人座麗人座　神戸　艶笑

羽根蒲團重しと云ふも笑はれず　同

追ふ氣ではないに蛙の飛んでゆく　兵庫　白水生

元祖の店が横町になる驛ができ　同

犬が鳴いてる小判でも出るのかい　金澤　旭花

當直のシャツ白々と干してあり　同　同

腕時計買うて希望へ進む氣の　大阪　裸人

日が暮れて屋上監視ほつとする　同　同

パトロンを又欺きに行かんかな　金澤　旭虹

いつそ女の髪をきりたし　同　同

貧乏もついてまわつて春が來た　大阪　ト居

自制して歸るに雨のほそぼそと　同　同

何がをかしいヘラ〳〵と酒呑おやぢ　道後　計加

悠々と飛んでる蚤を眺めてた　同　同

良心に苦しむ寢顏とも見えず　島根　專路

音ばかりする飛行機の五月晴　同　同

母の染毛手傳ひながら泣けてくる　豐橋　枯骨

嬉しさは又月掛けが一つ增え　大阪　一騎

長上に變な言葉がひよいと出る　鳥取　源太夫

ウエトレス夕飯までも扳きで來る　大阪　烏莊

眉毛まで白うになつて微祿なり　神戸　桔梗

きゝわけのない子と母はねてしまひ　大阪　一柳

發狂の友慰むる術もなく　螢ヶ池　房夫

御鷹野立へ骨もあらはの案山子向き　同　明佳

贈られて枕邊にある金魚鉢　同　石子

一厘も負りませんと意地になり　大阪　碧水

出來たこと出來たで母の善後策　神戸　可村
不景氣を種に調度は値を叩き　大阪　麓生
オキシフル　ビールの泡をしのばせる　螢ヶ池　重郎
此れしきのこと云ひ〳〵喘いでる　大阪　鯉友
何か知ら貴樣こと呑めば角がたち　鳥取　のぼる
見知らずに泳ぎ姿を撮らさりよか　大阪　竹勢
熱が下がると思ふのは家のこと　同　明治
口ほごになく運命に負けてるる　松本　つば
看護婦はつめたきものよなすな戀　螢ヶ池　松路
あは餅や近所の御客唄でよせ　大阪　珍猿
枕がや覗けばガラ〳〵吊つてある　明石　靜波
保險屋は清き一票をこと言はざりき　大阪　燦郎
ぢき庶務沙汰にして了ふ施療院　螢ヶ池　紫浪
巡査今日捕鼠の人夫こと歩かさせ　大阪　與詩夫
崖の藤汽車にあやうく觸れんこすな　松江　華雪
塲末こと云ふな赤い花も咲かうのに　大阪　柳翠
踏んだ蛙阪妻の型眞似て死に　伊豫　春市
あれば こそ人物本位なこと云へ　大阪　舟々
お隣に負けずになれよおゝ茄子よ　攝津　素萠
言ひにくい事へしぴれが切れて來る　大阪　灯舟
打水を高くあげたは男の子　岸和田　幸泉
二年生こと云ふ洋服の破れ方　大阪　さだを
融通のきかぬ一人に下戸の父　神戸　不然
人間味有つて四方時不如意勝　大阪　紅
陽炎に三越前の小商人　守口　當り矢

ちこ不滿あれごやうやく職につきけだものゝ如くその夜は二人切り畝傍羅楓炭車
病むために積んだ貯金で無かつたに　大阪一舟
この上の節約親子死ぬばかり　明石了念
居酒屋の騒ぎへ巡査呼んで來る　大阪山月
こりこめた命へこわい息をつき　吳落葉
人絹が氣になる程の雨が降り　大阪吐句
百ケ日立てば貰への世話するの　尼ヶ崎虛白
ハンマーを握つて居れご今に見よ　大阪雪松
母の癖いつ覺えたか女の子　金澤白雨
些かの貯金で命ひろひしが　大阪憲太
差押へ母一人呆然こする差押へ　奈良青柿
バスガール足の太さを立ちつゞけ　大阪大黃
きちきちこ草を引くのも都の子　豐中洋太
讀んでゐる新聞の上へ來てウンコ　大阪無鬼
煙突の長さに暑さ負けてゐず　臺南冬木
露臺から見るやゝこしい大阪市　大阪菊路
人は何故親しみ合へぬ海の極　金澤好次
判じ絵をあてし女給の高笑ひ　大阪靜香
酷熱の中にも足袋の羽織のこ　神戸四三
女店員頰紅少しつけすぎて　大阪千春
空想の鼻ッ柱へ蚊が止り　大聖寺溪鶯
新妻のやうにしてゐるお人よし　大阪樹光
いふこゝが下手ではあるが眞の友　鳥取雨樂之
アルプスを道頓堀まで續かせり　大阪志洋

理屈家なりし茶毘のけむりよ　島根龍村
早引の途中主任と道でありひ　大阪英郎
雨はらむ空だに傘が荷になつて　大聖寺吉祥
だから言つてるぢやないかと子を諭し　大阪愚坊
口答する子に母の指鋏み　大聖寺溪柳
釣り蕊に雫こさえて待つてゐる　神戸志郎
瓜粉お腰のまんま付けてやり　大阪桂枝
天川砂の音は乾いて月見草　神戸一鶏
金魚釣店番だけは糸きれず　大阪桃太郎
泣くまいと思ふ涙に子を育て　東京歸一
御歴々なんと御顔の長い事　大阪骨皮
起重機も人も動かず海光る　神戸浪人
もう叱る父をのがれし勝手元　龍田翠峯
苺提げたる足をそろへて　大阪海洋人
俺の足袋疊の上はあるかれず　松山紫石
餌をやるに小鳥よ何故に恐ろしい　大阪憲坊
ハムエグス食べた藝者に送らるゝ　神戸卯生
生還の利那をカメラ向けて待ち　松山春峰
不景氣の打撃臍繰へも響き　奚光哉
就職のテスト冷たい目を感じ　神戸三霞
金もなく反物あさるみゑもあり　大阪路鳥
つやのある柱へ餘程醉つてゐる　長野蛙皷
雀よ雲陽炎の中へおちるのかも　同利春
釣竿にビクに新綠縫うて行き　同双車
飢さして信用しろもないものよ　同黒天子

大地から

蛭子省二

安井君の「大空から」の姉妹稿として、二頁限度で井上信子夫人第二句集「蒼空」（新刊）讀後感を綴ってみる。

◇

私は第一句集評を『鯱鉾』誌にかいたそれは丁度私共夫妻が川柳行脚をした際二タ昔も逢はなかつた劍花坊氏を、東京郊外にお訪ねした直後で、夫人とは初對面であつた。その生々しい印象は評言に必ず卒直に記錄した事と思ふ＝手元に其舊號を有すれ共、今は殊更に讀返し參照せぬ＝而て本誌六月號で、英雄主義の夫君を論じた筆が、今や夫人の上に回ぐる事程、着々と句集刊行の快擧が實行されるのは慶祝に堪えぬ。私は其後無論豫交ゆる機會もなく、年始暑中伺狀に夫人のペン書の御返事を頂く外交際を有せぬのであるから、或は誤つて居るかも知れぬが、アノ第一印象を蘇らせつゝ句集の隨所々々を開くは、私丈けには特異な感興が湧くのである。

多くのお子さんを立派に世の中へ送り出された家庭上の尊い貢献は、顔を合せた丈けでも、泌みぐ〳〵と母たる絶對ヂグニチーに感電するものがある且つは柳樽寺の機關誌を永續させる上に於ける内助の功をも、其の應接に窺ひ得て感激の外はない。それ程の——或る意味で男まさりの——勇者には、句の上にも必ず迫力否壓力に徹した、體驗の生活意識主張が端的に具現されるは當然じあつて、飛躍といふよりは昂奮性な執拗觀念が飽く迄直接法的に到達する處まで＝川柳詩として＝充論し盡さねばやまぬのは無理とは言へぬ。

沈默を破る一字は生きんとす
寂寥を長く引かして戸をしめる
昂奮が膳のさかなの色へ來る
感情を絞れば玉となって落つ

『沈默』『昂奮』等々のみが強く痕跡を殘すのは、俗に云ふ、いきなりオッカプ

セられるからで、急壓な自覺過多である斯る句風が作者好みであることも思はせるは、說き來つた夫人の人間的偉大さから自然にプロダクトするのであらうけれ共そこに革新川柳としてのドクマも宿つてこれらの句にのみ餘りに親しむと、遂に概念的な傳統性或は必然性のものとなり化してしまふ恐れなしとしない、新しい中の古い手法ともいへてくる。で私は目選句集中の劍花坊氏の作を再吟味した處却て計算的にはそういふ傾向が非常に乏しいのを興味深く思ふ。結局氏は東洋流の英雄主義者で、どこかにボウと霞のかかつた幽寂味があるからであろう。そこへゆくと夫人はヤハリ女性である。無頓着では居れない、ダメを押す敏感性が多分なのである。

◇

然しだ、夫婦は一體である。殊に夫唱婦隨思想は夫人の御年配では完成すべき道德律なのだ。井上信子は獨步のポヂションがあると云つても、所詮は劍花坊夫人としての一家こゞつての川柳詩が、柳壇にサムシングを附與するのであるは爭はれない。卽今プロ川柳を宣揚する背の君に多く共鳴さるゝは、何人もが忌避すろ詞を發し得ない處のものなのだ。

空の色より菜ッぱ服が青いよ

たまに握つた錢の感覺

夫人の勝利の生活から同情的に客觀的把持があるのは、その感受性の弘汎なるに敬服はするが眞の主觀を投じた環境裡の暴露でない丈けに、其の社會觀に若干の割引をしてかゝる私の如き者か在る事は恐らくドウしたつて剪除するは不可能であらう程生地だとは思へぬ背景が私が認めたのは決してヒガ目ではない。柳樽寺の壁は書棚であつて菜ッ葉服の一着もがブラ下つてゐなかつた。庭は小じむまりと淸洒に赤い花が、こりゞゝ咲いてゐた。知識階級（學生も含め）のプロ運動なるものが、御都合に因る欲求の簡潔な陶醉法で、やがてカリカチュアライズされる迄、尖端的に主張してみる事に因つてのみ、恰もリーダーでありパートナーであるかの如き態度は、インテリの小兒病化と遊戯視せらるる虞がある。プロ川柳の一味中には此の機械作用の徒かザラにあるのは見逃せない。

◇

女にして詠み得る材——そは身邊雜事的な日常茶飯事らしい感じからのものはかなりの量が印刷されて居るようだ。

ほゞく瀑に空しい今日の皺
ものいふて愚かな顏を派手にする
ポカンとした顏で答は濟んで居た
ひからびた生活しの中に肌が荒れ
氣がつけば女は狹い坐りやう

自己を省み家族をいたはる者の正直な詩は、身邊の出來事か、夫れからの思索に動作すべきで、自己を離れて眞情の流露はない。自己の周圍には幾多の人間の生活もが接觸して居る。身邊の雜事は悉く相對關係のものだ。此の眞實な基調が川柳家に誤解され勝なのはおかしい。殊に女性は多くの時間を家庭に捧げる、主

婦の感悼感覺は家族の上に光被するものが甚だ濃厚で、實に私の血液は妻の味覺から新陳代謝させられる。朝炊ぐ米に、夕煮る菜に淨化されて私の詩となる。信子夫人の身邊雜事吟は川柳家の眼には、隨分刺戟的な鑑賞に價するものであるべく、又あらねばならぬ筈だ、それ程柳壇への苦勞人じはないか、近時革新傳統兩派の人々が頻りに身邊雜事吟排斥の筆を弄せらるゝが中に、私は一層自己信賴家族信賴の主張から出發する。

二アつの眼の正しさを子にむける
娘はいつか別な生命に向いて居る

恐らく心底からの希求句であつたであらう。然し日常生活には悲喜交々錯雜し、世間態とか禮義とか、紛擾葛藤に不純な交渉をも生じ易すく、詩とするには技巧苦表現苦に惱まされる。

◇

夫人は多作家の一人だ。多作家の常態としては(一)不知不識類似な句が生れたり、(二)コリ過ぎて混沌とした表現に了る＝作り放なしにするには女氣質が許さず、後から筆を入れ過ぎるのであ。

老いたる夫人の昂奮は到底單純化を容さない。複合的な表現でより多く深きを盛らむとする結果、句の消息が概念化に陷るものも見出せぬ事はない。

書架の隅から擴がる人格
尖端を行けば胃の腑を貫かれ
豆を食うにもテンポが早い
幽閉の檻へ不運と罪を投げ

然らば夫人の眞骨頭眞價値はどこにあるか――私の眞は今や盡きんとして居る。即ち井上信子の全部に觸れてみようとする人々へ『蒼空』の靈感をわかたれたのである。第二句集が諸兄の坐右に備へらるゝ日に、容易に解決されるクエッションである。

◇

私は夫人の第三句集の誕生日までイキて居たいと思ふ。

（六月九日夜　喘息發作し始むゝを、いきて靜坐）

暑中御見舞
申し上げ候
色紙　短册の
御用は
和正堂
大阪市東區安土町二丁目
電話本町一〇四六番
振替大阪九一七五番

新生活風景

「川柳雜誌」の血が流れてゐる人たちで、お互ひにどうして暮らしてゐるのだか想像もつかぬ生活をしてゐられる人があるに違ひありません。
それを知ることも一つの銷夏法であらうと思ひます。そこで「この葉書お受取の日のこと」といふ質問に答へていただきました。

白と黑

大阪　麻生路郎

僕の机の横で杏三と雨町が碁盤を前にして坐つてゐた。「僕はいつでも黑しか持てへんね」と云つて雨町が黑を取ると「さうかよしや」と云つて杏三が白を取つた。「アッサリしてんねな」と雨町がビックリしたやうにいふ「ごつちが強いかわかれへんのに、譲り合ふても仕様がないやないか」
そして二人はすぐにパチパチとやつてゐる。すぐに解決がついた。白が負けた。「サア」と云つて杏三が白を渡して黑を受取つた。そして又パチパチとやつてゐる。この會話にはある親しさが流れてゐる。いかにも夏の夕べにふさはしいすがゝしさがある。柳人の誰もが斯うした輕い氣持であつて欲しいと思つた。（七月二日の夕）

七月三日

大阪　鍋平朝臣

朝船場警察署の刑事から電話がかゝつて

「一度來ていたゞきたい」と云ふ。社へ出勤する途中に立寄つて見ることになり正午に同署の刑事室といふのを訪ねる。ナンダつまらない、僕がとつてゐる帝室博物館發行の「御物上代染織文」といふ冊子を各回に配達する男が同じ號を二度も三度も持つて來たことを數日前發見したので談判したことがあるが「その犯人が自白したからその始末書を書いて下さい」といふのだ。そして代書屋に書かせてくれる。その犯人といふのはその室の疊の上で洋食をとつて平氣でたべてゐる。代書屋や刑事と「船場の警察がこんなに汚いとこまる、せめて曾根崎署位はなくともも少しごうとかしなければ……」といふと「もう建てかへねば……」といつてゐた。はじめてといつた位だがこんな處へたまには來るのも面白い。午後一時に出社。午後珍らしい男が西洋から歸つて來たーといふよりかやつて來た。といつて日本人なのだが、しかも道修町生れの正眞正銘の大阪ッ子なのだが、米國に七年ドイツに四年、佛に七年、トルコに一年と歐米に十九年暮して來た男——僕とはドイツと巴里との古馴染だが、二三日前にシベリア鐵道で十九年振りで一寸やつて來たといふ。伯林で武林文子に會つたら僕によろしくといふ傳言であつたとか、何んのかのと話仲々がつきない。御靈附近の腰掛Mへ食事に行く。平野町の變つてゐるのには僕でさへ驚ろいてゐるが十九年ぶりだと全く初對面のやうな氣もしやう。「その角から二軒目の小間物屋に美しい娘があつた筈や」といふ阿呆かいな、その頃の評判娘が生きてたらもう四十の婆さんやないか。近所に腰かけてゐる老人が一杯機嫌で「私もこの近處で生れましたが、その娘はかう〳〵だすやろ」「そら三味線屋の方の娘だすやろ」何しろこの男花の巴里でも日本人中音に聞へたダンスの名人で、こんな話をしてゐるうちにも脚がピョコ〳〵踊つてゐるやうに思はれる位、「どうしても夢やなあ」その店の大きな小僧曰く「旦那はん、わてらその時分まだ生れてえしまへんがな……」それからその男と別れたのは翌日の午前二時。

關西辯の進出

東京　赤井清司

御下命の葉書が私の机上に廻つて來たのは七月四日の午後一時過ぎでした。ちやうど、昔なじみの野田九浦畵伯御宅へ電話をかけて「……ア、さよか、おほきに」とかなんとかいつて、汗を拭き〳〵電話を切つた處でした。「とても勇敢だわ、大阪辯をまるだしにしてねえ」と部の婦人記者さんのカゲロが聞えてゐました。僕が勇敢だつて？うちの婦人記者さんは東京への關西辯の進出振りを知らないのです。ちつとは銀座のカフエーなんかへ同行してやる必要を認めます。まして、この人にこんな話の判らう筈はありませんからね。

大阪の島成園さんが展覽會か何かで二三年前に東京へ來たことがあります。その土產話に「アノ、チョット、おかしおまんねん、わて東京でナ、乞食見ましてんや、そしたら、エラソウニ、乞食だてらに、江戸ッ子つかうてまんねんもん

腹卷の答案調

葉山　岡田三面子

七月四日九十二度といふ暑氣其中で腹卷ばかりの裸で某試驗の答案調なか〳〵川柳どころでない姿が卽ち川柳式。

眼にはられた銀幕

芦屋　小出楢重

毎朝、コーヒーを飲んでゐる時に手紙類が配達されるのです。それ等の手紙を讀み乍らコーヒーをのみます。扨てこの手紙をいたゞいた日は秋の製作の爲めにモデルが毎日おしかけてくる日

課となつてゐる籠居の一日でありました私の眼の奥に張られしゐるスクリーンにはその裸女の姿勢と繪具とが燒け付いてゐます。ハガキを讀む間も消へてゝれません。その上梅雨が晴れてかんかんとするさしも暑くるしい朝でした。

木枕のしみ

朝鮮　蛭子省二

▲七月三日(正午八十七度)半夏生。よく降つたものだ。暦通りあがつて呉れるかどうか。▲北陸旅行の與水君、魚津町より繪ハガキ―蜃氣樓の事を追記し、朝のうちに東北三柳誌八月號分三十四枚の處理をする▲百華園鞠塢翁より御成座敷の寫眞と角田川古圖繪一枚を貰ふ竹馬居雜筆の資料となる。▲高尾書林絶版書目錄―欲しいもの若干照會する。▲臺灣日日新聞―日本語改良論がある。浴衣でアグラが、かけぬやうなら凡人の私には生甲斐がなくなる。平凡寺上人圖案の手拭染をきる。「男女大人小兒共通もの」が本來の浴衣趣味なのだ。夫婦お對ひ物でブラついてごらん。乙な風俗だ。昔は夜のみ用ひたもの、「普通の婦女にても美人の如く見ゆる者也」だ。

木枕のしみよエジプト文字の浴衣

▲夕食頃、自働車で無等山澄心寺行を誘はる。出掛ける。寫眞を撮る。

女が醉つてる山寺のせせらぎ

▲ラヂオの終る迄お客さん。就床「喘息なごも生涯の道の草にてめんごうなものなり」なご夢で語る。發作して居る。アンヂスピンビーを服す。

汗

魚崎　柴谷柴舟

オラガビール

東京　川上三太郎

七月三日午後四時三十五分受信――女房は留守。酒屋がオラガビールといふビールを六本置いて行つた。僕は賴んだ覺へはない。大方値が安いので女房が正文したのだらう。然し外ならぬビールの事故默つて受取つて置く。それからキングの原稿を書く。然し何うもビールが氣になつて仕方がない。そこで又階下へおりて行つて生胡瓜へ味噌をつけて一本だけ飲む。いや二本飲んだのだ。さうぢやない、何時の間にか三本目に手をつけて居た。オヤ〳〵あと二本しかないぞ。夕方朝鮮人の屑屋が來て「アキビン・アリマセンカ」と言ふから早速六錢で賣つてしまつた。一本一錢の割である。さうして今僕は銘酊してゐるのである。

平和な一日

御影　長崎柳秀

毎年七月一日より夏休暇に入りますが特別な事情のない限り安全第一主義から日々登學致します今日も午後四時頃から大學記念館へ立ち寄り同僚と共に六時迄撞球互に鎬を削りましたが幸に二對九の好成績我れ乍ら昨今妙技日と共に神に迫るを感心し乍な道中事なく電車と共に御影へ着きました。偖て夕餉には一家を相手

にチビリ〳〵灘生一本を酌み乍ら一日の出來事を話し餘興に「メンタルテスト」として夏帽子は何本の麥藁で編み上げるかと聞いて來た題を出し四百本（シャッポン）との解答を得ましたのをしほにして順々に入浴。皆々一日の疲れを洗ひ落しさつぱりした氣分で平和なしかも靜かな夕方の涼しさを味ひました。自分は何より好な柳誌の一見を怠りませなんだ。通信としては……島根縣人柳樂龍村氏より禿頭病治療に關する聞き合せ狀と神戸川柳誌ふあうすと（七月號）の二つで極めて平穏な一日であつた事をよろこびました（七月三日）

中年

金澤　安川久流美

あすが半夏生で、梅雨上りといふ天候朝から降つてゐる。毎年この頃になると氣がふさぐ。然し酒をやめてゐるので濕つぽい心を晴らすすべもない。一年ぶりで逢ふた女から涙ぐましいレターが屆く別にそれが戀人でもないのが刺戟の薄いこと。誰か知ら愛して見たいのも中年の惱み。妻や子にも倦怠をおぼえ、只管に生きてゐる事の平凡で、死んだ人々も偲ばせる夏の日だ。

稽古をきゝつゝ

金澤　窪田銀波樓

勤め先から歸つたのは四時、チョット前三味の音が聞える、長唄の師匠が來てゐるなと思いながら靴をぬぐ。家内は「梅の榮」の絃、娘は「忍車」の唄、椽の籐椅子で暫く稽古ぶりを聞く。

庭の捨石の硝子鉢に入れてある龜の子が藻の中にうごめく。三味の音を龜は聞かうといふのか。やがて浴衣に替へて茶の間に入る。近頃酒を封じたので冷しビールを抜く。不圖狀さしへ目が行く「東京通信」といふのは講談社の野間社長が「躰驗を語る」の宣傳冊子、他の往復ハガキは卽ち川柳雜誌の「この薬書受取りの日のこと」——

舟

神戸　楫元紋太

川柳だつて舟の樣なもので、進む途中右に傾き左に傾き中正な時は非常に尠いごちらかに偏つて仕方がない。右の者には左が反對の行動に見え左の者には右の行き方が間違つてゐる樣に取れる。公正に見る時ごちらも進むことには間違ひはなく一つの行き方ではあるがごちらも傾いてゐるのでそれが過ぎると顚覆することになる。顚覆しては舟の價値がなくなる。成可顚覆線に遠い中正の道を行きたいがそれでは進行が鈍いか停るかだ。矢張左右に動搖させるのがよい。よき船頭はよろめかず正しく舟を進めるべく櫓をあやつる。

靴の紐

名古屋　森東魚

出勤の靴の紐へあわてゝゐる時「この薬書」さ。

出勤薄あたふたと來て安くされ
店へ行けば思ひもよらぬチョキンの噂。
いつかは同じ秋風ぞ吹くかな。
淘汰沙汰もうむね打ち　喰つたやう
上五を三遍つゞけて云つてみたまへ……
おまじないださ。

かぼちや

甲府　篠原春雨

若し私に倅夫婦が無かつたなら、ごえらい夫婦喧嘩をしたかも知れない。それは此の春の事、今度の家の前に三坪ほどの砂園がある。之を花壇にしやうと云ふのが私の意見、之を蔬菜畑にしやうといふのが老妻の申出。論爭の行き詰りは、

經濟的と云ふ聲が、不景氣の空氣へピン〳〵響き、口惜し涙をのみこんで自說を徹回したものだ。

「生つた生つた」と大喜びで、イトモ可愛らしい南瓜、生れたての嬰兒の頭ほどの青々とした南瓜を、老妻は畑から切り取つて來て、先づ佛壇に供へた。何も彼も古川柳通りだ。此のカボチャめ、と取つて投げやうとは思つたが、經濟の合理化にノドをしめられて、聲が出なかつた。

此の日昭和五年七月三日、川柳雜誌社からハガキの來た日の朝、最高温度華氏九十一度。

七月五日の私

大連　大島濤明

朝、資本金四百萬圓、大連屈指の輸出入貿易商株式會社福昌公司の取締役佐々木彌太郎事、三福君から電話がかゝる、ハテ何事かと出て見ると、八十圓の家を特別の御詮議を以て六十圓にして僕に貸してやろうとのこと、廻轉椅子と葉卷で每日暮れる重役卽ち、プル級の君も流石に川柳家なればこそ大奮發の減額である。その家は今の住居のすぐ前で西公園町一四九番地なのだ、兎に角借りて這入ることに約定。

午前十時失業者救濟對策に關し、土木建築協會の役員會を開催、正午閉會。

晝、滿洲の特產は大豆、豆粕、小豆の類である、之れを取扱ふ店は特產商といつて大連でボロイ營業の一つであると共に之れに携はる人々は大抵有福な懷ろの持主である。その井上麟次商店主昔の柳號葉吉こと井上麟二君來訪、主旨は川柳以外に艶つぽい用件だがそれは內所々々。午後三時待合喜扇の女將がやつて來た、勿論勘定のことなのだ。

夜、春柳吟社の七月例會が青山屯氏邸で開かれたので出席、集まるもの凡稚、立峯、佛心、一水、紫浪、岳泉、南九、南天、よし坊、不動、淀月、青々庵の諸子宿題、娘、喜、浪、泣面、席題、氷の五題何れも濟明選で當夜の秀句は右の通りであつた。

病院の夜半に氷を碎く音　凡稚
泣顏が唱歌に替る幼稚園　紫浪
天才があつて娘の嫁きおくれ　青々庵
福の神靜かな浪の舟にのり　よし坊
喜んで吳れる母親もう涙　淀月
賞狀を挾んで親と子の笑顏　不動
大浪が來て娘等のあわてかた　苦月
泣面になつても子供負けてゐず　佛心

車掌と愛煙黨

大阪　長谷川一徹

阪和電車の一隅には普通の電車の御多分に漏れず「煙草御遠慮願ます」と書いてある。この電車の併行線の南海はのませて吳れるのでその習慣のある愛煙黨は知らず〳〵遠慮しながらのむ事になる。氣の利いた車掌さんの多くは遠慮して知らん顏して居て吳れる、ところが今日の歸りの車掌は遠慮せずに「どなたも煙草は御遠慮願ります」とやつたので善良なお客さんは吸ひ殘りを窓外に捨てたのである。ところが次の驛でのお客は三人共云ひ合はしたやうに煙草をのんで居た氣の毒にこの車掌さん如何するかと見て居ると默つて居る。その筈である。其次の驛では交替と御座る、これでほつとした。

暑い日

函館　龜井花童子

丁度七月五日の夕刻でした。三才になる女の子とレコードを掛けてそれも珍らしく當地方としては暑い日なので浴衣着のまゝでした。短時間の留守居番の子守も或る時は面白く感じた。

やなぎかげ

大阪　高橋かほる

柳陰、いかにも涼しそうに聞こへる名

まへの夏の飲み物、今のカクテルとか云ふ洋酒より暑い時は柳蔭なんて涼しそうな好い名をつけたもんやなア。

ハガキを受取つた日の日記

大阪　庄　萬よし

此日は市會は理事者提出の議案に二三の質問をした外聯合會派(市長派)の三つの建議案を勞農黨の小岩井君の外の無産派十二名の議員が全部賛成した。去年の六月から滿一年の市會で無産派が、兎に角理事者與黨派の虚を突かないでは氣がすまぬ無産派が與黨派の建議案に賛成演説をする、珍らしい市會であつた。それは失業救濟の土木起債促進案と、商品切手課税案と、庶民銀行設立建議案とつまり無産派の主張その儘を與黨派が建議してくれたからだつた。私も商品切手課税案の賛成演説で、歿落に瀕した小賣商人の苦衷を訴えて理事者並與黨派が素直に社會施設をやる氣なら我々も虎や毛蟲でないと萬よし一流のユウモアーを發揮した。市會がいつもより早い散會を勞働組合の大矢君にとつ捕まつて大軌の柏原紡績の爭議應援に出掛けた、堅下の驛から柏原の小屋まで雨の中を掛け足で二丁ばかりとつ走る十時に近いのに聽衆は芝居小屋の外へ迄はみ出てゐる。這入るなり「有名なおでんや市會議員庄健一氏」を紹介されて、爭議團男女工諸君町民諸君へ、一年速成の闘士としてアジを飛ばして、米騒動の富山の女房連からジアンダークまで引出して妙齢の女工諸君の感銘を得た。婦選さへ通過すればもう落選の心配はない確信を得て樂屋へ這入ると再び驚いたことは樂屋一杯の女工諸君がレビューの歌でダンスの眞似をして爭議指導者からお目玉を喰ふてゐる所であつた。

甥の奇禍

鳥取　中島鐵洲

アッ！ヤッタ、駈出して傷口を押へる繃帶意識回復。

同僚を附けて病院へ送つた。重苦しい感じの内にフト今頃は傷口を縫ふて居ると思ふと自分の其の邊りが痛みだした。高い所から落ちると云ふ事は原則だが落ちないと云ふ事はないものかと考へさせた。失敗の原因は早く降り樣とした爲だ早く降り樣が「スピード」から來たのなら「スピード」の半面に危險と云ふ影のある事を忘れてはならぬ。怪俄をした當人が私の甥であつた爲めかこうした事が次から次に浮んで來た。

夏帽子は語る

大阪　福田山雨樓

過剰人員について‖この不安時代に鐵道從事員はどうすればよいか‖こんな記事(その朝著いた或鐵道雜誌の)に眼を落してゐた彼は、かなり充血した眼であつた。それはその筈であらう。彼はその前夜から今曉の午前三時半頃まで彼の玄關兼書齋で川柳の仕事に沒頭して、今朝いつもの樣に出勤して來たのである。うつとうしい天氣が頭を押へつけるやうに重苦しく彼等の事務室に覆ひかぶさつて、さなくとも月始めの忙がしい彼を一層いらだたしてゐた。

雜誌を仕舞つて役所の仕事に全能力を傾けつゝあつた彼の前に一人の見知らぬ男が立つてゐる。彼がペンの手を休めて來旨を聞くと其男はものなれた樣子で名刺……東京○○營養研究會主事○○○○……を差出して、健康相談の一端として血壓の測定は如何です、料金はオンリイテンセン、確かに參考となるです、と來た。彼は一抹の興味に引きづられたのかそれでは一つやつて見て下さい、と男の

商賣にさくらのやうな役目となつて應じた。いざ檢査に取り掛らうと件の男が機械に手をかけた瞬間、惜しいことには一番大切な目盛りを計る水銀が、ほろ〳〵〳〵こぼれてしまつた。彼は危くふき出すところだつたが同情に堪へぬまなざしを投げ與へて、出してゐた腕をさすりながら、ペンを握つた。

件の男は水銀を買ひに走る前に水銀はとても恐ろしい化學的作用があつて、自分がかけてゐる金緣眼鏡の如きは一年に一、二度必ず、ほろ折〳〵れてしまふ程であると話すことを忘れなかつた。感心して聞いてゐる彼の机の前に、郵便が屆けられた。封を開くと、柳誌「たまむし」の七月號である。

やがて晝食となる。彼の左の手は輕く「たまむし」のある頁を押へ乍ら、右の手の箸を動かしてゐた。

そこへ今度は彼のうしろから靜かに肩をたゝくものがある。彼が振り返つて見ると、同僚のTが笑ひ乍ら「A驛にならべてあつた川柳雜誌が全部賣れたそうです追加を頂けませんか」と耳もとにさゝやいた。雀躍した彼は手許の雜誌を引つこ抜いてTに渡し、滿足に近い微笑をたゝへてTの後ろ姿を見送つた。

水銀を買ひに行つた男は生憎塗の用意を持たなかつたので、雨の中を自動車を奮發して、そのあたりの藥局を殘らず漁つたけれども結局ぢこにもなかつたさうである。仕方なしに宿屋まで取りに歸つたのださうだ。やつと機械を整へて、これから檢査にかゝると云ふ時分には、陽は面憎いほど暑く輝いてゐた。のみならず役所の人達は退廳時刻が迫つたので、さつさと腰をあげて机の上を片付け初めた。

その晩彼は午後十時頃迄居殘つて、ある整理の仕事に汗を流した。ふら〳〵になつて家へ歸る間にも、その日の川柳に對する關心を思ひ浮べて、快心の笑をもらした。（七月二日）

子を落す

平塚　酒井駒人

受取つた日は平塚海水浴場開きだつたので、子供を自轉車に乘せて、海岸へ行きました、人出約二千人位でした、餘興の寶探しで、サイダー三本、マッチ一箱當りました。があまの夢中になつて子供を迷子にしてしまい、青くなつて探して居る内に見ず知らずの人が子供を抱いて、迷子々々と言つて居るので、抱いてゐる子を見たら我子だつたからお禮を云つて受取り、其人にお禮としてサイダー二本上げました、家へ歸つて妻に話したら叱られるやら笑はれるやら、今だに一つ話しにしています。

フォード抹殺

魚崎　住田亂耽

T型フォードの考朽車――エンヂンが全く露出してしまつて、それが一度動き始めるや、忽ち猛然と製材所の鋸のやうな音を立て、肥滿しきつた牛でも、も少しは早く進むであらう速度しか出ないほんの名ばかりのボロ自動車――のいとも危ふきハンドルを、ちよこなんと固いシートにはまりこんで、操りながら、グランド一杯にしきつめてあるコース網を、よち〳〵と切り抜けてゐる私。之が私のデイリー、タースクであり、運轉手甲種免許證を得ん爲のプレパレーションなのである。私は之に乘る度に、何故、今をさかのぼる三十八年前、ヘンリー、フォードが、こんな厄介な馬のない馬車を發明したのかをつく〴〵恨むのであるが、私を毎日、一度は必ずあのろくでなしのボロ車へほりこむであらう或る大きな力を背後に感ずる時、思はずフォード抹殺論も頭から消えかゝるのである。

ここにかく、今の私は太陽のある日も、無い日も、フォードを心の底から恨みながら、よち〳〵とやつてゐなければなら

ぬナンセンス風景の中へ全く閉ぢ込められてゐるあはれな、まことにあはれな私なのである。

カワイソウな頭

大阪　伊藤愚陀

全くだらけきつてしまつた私の鈍い頭はユーモア一つ見つけ出すごころか水を腹一杯吸ひ込んだ食パンの様になつてしまつて――干からびた食パンより餘けいに仕末が悪いわ――二本の手と足の支配さえ時折忘れようとしてゐました。それでゐてカワイソウな頭はこうぐ〳〵360度廻轉して――重役の椅子だつて大抵は180度しか廻轉しませんわね――去年の七月二日の日記を繰りひろげました――だが悲しくもサミシイことには私の頭はそこにも白紙を殘してゐるだけでした。

黑の手提鞄

ハルピン　岩崎柳路

私の現在の商賣は電氣醫療機械の外商であるが、滿鐵の官舍を訪問すると私のタイプを見て名刺を見る迄の間は多く保險屋と間違はれて面喰ふ事が度々あり内地と同樣支那にも保險の勸誘員は餘程多いらしい。

私の商賣を知つて居る人々は皆面白い呼び方をする。電氣屋さん、アンマ器屋さん、マッサージ屋さんと一定して居ないので馴れる迄は實に變な氣がしました。時代の尖端を行く好い商賣だと賞められたり其んな物効力無いと排斥されたり外商戰線大いに異狀あり過ぎます。

黑い手提鞄を持つて訪問するので一度醫者と間違はれ病室へ通され先生扱にされたので心苦く私は醫者で無い此の機械を賣るのだと云へば二圓包んで呉れた人もあり金を返したら氣の毒がつて一臺買つたのでこちらが氣の毒。

「施療室にて」を讀む

大阪　出口雨町

「私は監獄を恐れる。嬰兒を抱いて監獄生活をする女を描いて見ると内臓が縮むやうな感じがする。この子供をはじめて腹に抱いたことを知つた時にも私は、東京の大地震のごさくさまぎれで監獄に居た。私によつて運命づけられた子供の一生は監獄生活かも知れない。いや、しかし、それでいゝのだ。私は額の廣い、目の少し吊つた女の兒を生みたいと思ふ。よし、日本のボルセウイチカを監獄で育てよう」これは平林たい子氏の小説「施療室にて」の一節である。丁度私がこゝまで讀んで來た時、この葉書がまひ込んだ。その時私が如何に、作中の女主人公の強い意志力に引きづり込まれてゐたかは、この小説を讀んでゐられない方々には到底わかつてはいたゞけない。「施療室にて」は何回讀んでも、あくことのない名作だ。あへてプロレタリヤ文學中の白眉として、この機會を利用して一般におすゝめする。あゝ今一時が鳴つた。私は又次を讀んで行こう。

心和む

大阪　松丘町二

机上に大阪工業試驗所にゐる友達からの手紙「僕の藏書を君の運動費の一部に提供したいと思ふ。右の本（町二云、稀覯本）を欲しがつてゐる人はゐないか。遠慮なく使つて呉れ給へ」云々。微笑ましき友情。一日の半勞働に疲れた私に今夜の電燈は決して薄暗くはなかつた。

生駒の一日

大阪　橋本綠雨

柳友の鶴峯君と大軌電車の客になつて生駒寶山寺前で下車、寺は不動明王が本

尊で傍に歡喜天も祀られ、信仰のあつい鶴峯君は左右の佛殿佛像を懸命に拜んでゐる。僕は傍らで「ローソクも献ぜず門を後にする」の信仰の無い句をものして樂々と昇るケーブルで下界を眺めつゝ最近に山上に設けられた廣い遊園地へ來た。飛行塔ブランコ、スベリ臺スケートの運動具など備へられてゐが僕達をひきつけてくれるものはない。こゝから見る奈良西大寺附近、木津川の一部の展望だけは良かつた。陽は照つてゐるが黑い雲がおそつて來る。雷が鳴る。蒸し熱い山なので大市食堂へ飛込んでビールのコップを握りつゝ句作した日。

幸福

大阪　水谷鮎美

あをき實の成る柘榴の枝葉をほどよく生けた母は嬉しさうです。たゞ今朝飯をいたゞくところなのです。卓を圍んだ一家内は麩汁のおいしさに茶碗の數をかさね至極圓滿です。父のぜんそくは永年の患ひで今もいま咳きつゞけて苦しいのです。二頃からいろ〳〵手當をしてゐるのですが思はしくないのです。（若し諸彦に良藥療法御存じなればお教へ下さい幸甚です）母も、父も、妻も、私も……幸福です。

我が味の柘榴へ匍はす虱かな　一茶

の句を、ざくろを見たので話しました。約三十分ののち門口に立つて涼風をあびてゐるとお隣の鷄が雛を三つつれて溝や砂地で遊んでゐます。この靜かな朝の情景のなかの私は子供が慾しいとおもひました。

往復葉書の味方

大阪　竹内多聞

「此の葉書お受取り」になつたときの多聞の只今はなんかしら焦々した氣持、何時もやつて來る電話器消毒の娘さんも訝しがつてゐるくらひ無愛憎だ。

テーブルを押へた右の肱が汗で板にピタツイてゐる嫌だ。手の甲に梅雨の蠅が冷たい足でとまつてゐる。フーッと吹いてやつても構へた腰ツキで逃げやうともせぬ。電話のベルがやかましい、判り切つた事をきゝやがる。帽子きたまんま卓にゐる僕には朝からのヘマな電車事故が今日の梅雨ぞらと同じふすべてをくもらしてゐる。

郵便屋が大きな鞄から大きな口をあけて「趣味」と「報德」の雜誌と鄕里の新聞と此の往復はがきをドスンと放り出して汗の背を向けて出て行つた。慌てゝ封を切る程でもない今日の通信に又しても曇る

はがきをよんでゐると「御多繁殊に暑さの折柄甚だ申兼ますが云々」と、此の字丈けが味方してくれるやうに思からのアタマがスーッとした。

半弓場にて

大阪　朝田新水

七月三日夜遲く迄商用で市内を駈け廻つた。ふと氣付いたことに近い半弓場が殖へ出した老若貴賤の分ちなく集つて盛んに弓をやつてゐる。所は上二車庫前だ傍にゃつて見てゐたが五間先に三寸の的を掛け一本の無駄もなく二　本の矢を見事にあてた老人がいくらかの金を與へ景品を貰つて歸つた。僕はその時思ふた、「歷史はくりかへすといふがその通りだ日本古代の飛道具の弓矢が近頃めつきり流行してくるとは」早速未熟なくせに練習用の矢を射損じてはならぬとウンとつるを張つて放つと天井へゴッン何くそと二本目は黑幕へ、三本目は見事あてたと思ふとまだ自分は放つて居ない。子供に冷評かされながら三十本の矢でたつた一本あてたゞけでいま〳〵しいなと思ひながらも此間旅行した別府の海岸鎭西八郎爲朝が朝夕豪弓を鳴らした名所的ケ原を思ふと、もつと〳〵練習して見たかつた。

ある日

大阪　安井ひろし

いつも家をあけて居る私は雲雀丘の革郎居を訪れて、一日ねころんで居た。夕刻辭して神戸の「ふあうすと」句會に出席して亂耽君に會ひ、つれだつて魚崎の亂耽居の厄介になつた。

家内の死んだ家にはじつと一人でをれないものなんだ。翌日歸宅すると郵書が積まれて居る。

「啓日增暑氣に相成候貴兄には益々御壯健の事と伺上候扨七月六日より、夏季中禮拜は午前九時半より、夕八時までと相定め候間何卒御出席下され度御通知迄といふ、南教會からの便りで、大分遠のいて居る私の足を神の國に近づけてやらうとの牧師さんの御努力!も一つは「誌上で御健在をみて遠國より祝福致し居候、奥樣御死去後のお淋しさ、感じは推察に餘りあり……」

失業へふと氣がついた長い爪　柳路

としたハルピンからのエハガキである。

私がこの便りで柳路君から賴まれた書籍を郵送して歸宅すると

「拜啓陳者愚息茂樹(千代二君の本名)儀豫て病氣の處養生不相叶本日午前八時死去仕候間此段御通知申上候」

七月四日
廣島縣豐田郡瀨戸田町
父檜山詔一郎
兄　哲三

といふ死亡通知が來た。

私は柳路君へ千代二君がよほど悪いからといふ便りをすぐその前に書いたのだがもうそのときには死んで居たのだ。

私はその夜私自身も天國に近づきつゝある事を考へて居た。

大弓

濱寺　太田朝陽

四時退けを、十五年の暑さだと新聞紙で言ふ中を歸宅して此の葉書に接した。今日は例年小生の主催せる濱寺海水浴場内臨海倶樂部の開業式なので出席した。昨年追加の麻雀臺其他碁盤將棋盤の賃貸しへ今日は流行の尖端を行く大弓を加へ賑しさを增した。昨年は路郎師を迎へて句會の盛大なりしを思ひ浮かべた。

時代の波

島根　伊藤綠之助

朝——夕刻——

相變らず平凡な連續だつた。プチサラリーの機械的連續に外ならなかつた。

夜——

散髮をしやうと思つて町へ出たが、床屋の休業日だつたことに氣がついて、頭の髮が急に長くなつた氣がした。

T書店へ足を運んだ。二日前に依賴した川柳雜誌が他の雜誌の中になつかしい顏を見せてゐた。

私は岩波文庫なる「誹風柳多留」中、下卷を買つた。書棚から「川柳」に關する書物が二冊消えゝ行つた。主人が賣れたと喜んだ顏をした。そういへば路郎師の「川柳漫談」がいつしか姿〻消してゐたことを發見した。

七月二日。町の夜は緣日のやうだつた殊にこの多い宵散歩に何んと女が多いことか。七〇パーセントは女だ。彼はふらく〳〵と町を歩きつゞけて何かつぶやいた「時代の波だな」と。

總戻り

松山　淺井冷々子

黑靴を眞白に暑い埃の中を戻つて來たお姉ちやん歸つたのと云ひつゝ汗だくの服を脫ぐ卯女ちやん試驗はどうだつたの？出來たく〳〵！そしたらどれ？CO_2云々…$CaCO_3+HCl=$…等々

そこに旦那さん郵便が來て居ります…

新聞・封書、川柳雜誌社からハハア…足を洗つてゐる姉へ母さんはごんなぞい…餘り變つた事もありませんけれども…と濁る。

榮巳は遲いじゃないか！ガラ〳〵只今ア門の戸が開いた母の留守中淋しい食卓もたまに歸つた姉の調理で明るく過ぎた日！

金

大阪　池田雪峰

降つては止み、止んでは降るいやな天氣だ。

去りしかと思へば又來る、來たかと思へば又去る。

丁度彼の心の樣な雨の降る中を働いて喰はねばならぬ人が右往左往する樣を眺めた自分は如何なる客にもアイキョウを振りまかねばならぬ。こうした自分を見つけた時金々々が頭へ浮ぶ金の世だ〳〵

海に山に金さへ有れば夏もよし　雨　町

汗だ〳〵喰はんがために戰ひぬ　雪　峰

無題

大阪　上田柳影

電車の音響はゆるみきつた神經へ子守唄とリズムを變へて響いて來ます。

△

「いまあー」若い女の聲です。

やがて未來はツルゲエネフと華かな希望をもつMの青白い顏や、吾輩もピカソなりと大藝術家を目指すOのヒョットコ面がふつとどこかへ飛んでしまつて、半分出かゝつた句が出てこない時の樣ないまゝしさ。

「うゝん」と目を上げる。

綠青色の袴むつちりとふくらんだ胸のあたりなだらかな肩の曲線、唇、

「靜ちやん」女はニイーッと笑つた。

「いま早いね」「えゝ」「今度日曜日」

吾乍ら大きなお世話だつた。

△

ハットすると何んぞ果敢き一睡の甘夢寺田町に止まりつゝおこしてくれしある車掌の顏乘客の視線「きかれたのかなあ」感情かさわいで來ます。暑い七月と胸の中鼻の顏の油汗を半巾で押しきつて心殘して車を降りた。

いと甘き夢のさ中を起される

お美しい方だつたら

大阪　三輪夏曉

朝、難波驛でひよつくり敬友SS君と出會ふ。

高島屋食堂で輕い朝食をすませてから松坂屋の浴布デーに附合つた。

年の頃廿五六の美しい女性が着るんである處の浴衣を探すんである。其の方面に頗る無趣味な僕達にとつては金坑を探し求めるより以上の勞力を費やした。

たま〳〵柄模樣の秀逸な奴を拾つて店員の鑑定を仰ぐと十七八の小娘向だなんて言はれてダーと成つたりした。

此の間一時間餘り。やつと「美しい方だつたら」と言つたハンデイキャップを附けて店員の協賛を經たのである。

「友達の細君に御祝返しにするんだから」SS君の辯解を其のまま。

竹光の劍戟

堺　友淵貴山

七つになる男の子から「お父さんは生きてゆくのがいゝか死んでしまふ方がいゝか。どちらがいゝか」と突然の質問、「そうだねやはり生きたいね」と答へると「死んだら神樣と　緒に暮らせるからいゝ事はない？」「フゝ…そんならお父さんは死ぬ方にしよう」と言ふと劍戟用の愛刀竹ミツを振上げて「神樣とこへ行けるやうにしてやるからさあ、參れ！」

川柳粉

大阪　須崎豆秋

心ブラの道草に大丸へ寄つて見ました「オイ〳〵」と友だちの指ざす食料品部の方を見ると其所には

川柳六〇〇瓦五十錢、新川柳六〇〇瓦六十錢、川柳粉一〇〇瓦七錢、等々と値段紙がブラ下つて居ました。—七、二—

女百句

大阪　櫻井圓角

昨日から向ひの呉服の賣出しに來たマネキン孃の事を想ふてる處へ川柳雜誌社からの端書だ。なんでも最初來たマネキンは美人だつたが愛嬌が無いと云ふので二時間程で今のに變へたんだ。今度のは別嬪さんの上に素敵な唇の所有者で仲々愛想よしらしい。其爲か今日も其娘だ。然るに四十歳の僕がなんでマネキンにそう熱心かと云へば女百句の川柳の締切が近づいて居るからだ。現金なものだ。しかし熱心の効は大に現れてマネキンの川柳が大分出來た。少しばかり披露しませう。

商戰の中をマネキン凉しうる

モガの眼にマネキン姉さも寫るなり

友の欠伸

大阪　山本凡々子

川柳雜誌社からの葉書が家に着いてゐた頃、僕は友人のSと新開地の或る活動小屋に入つてゐた。中は夏枯れの淋しさで少數の觀客を前に辯士がうつろなかん高い聲をむやみに天井に反響さしてゐた僕の隣に坐つてゐた若いお女房さんの青白い乳房にぶらさがつてゐる女の子が可愛いかつた。お女房さんは熱心にスクリーンに見入つてゐた。僕にはあまり感興のない映畫だ。スクリーンは見ずにこの女の子に相手になつてゐた。僕がニヤツと笑つてやつたらこのいたづらさうな女の子は案外生氣のない淋しさうな笑ひ顔をした。それでも口にふくんでゐた乳首をはなして黑い瞳をくる〳〵さす。こんごは恐い顔でにらんでやつた。するとやつぱり淋しげな微笑を色の惡い唇のあたりに漂はす。お女房さんは何も知らない變に哀愁に似た氣持でゐたらSの頑强な腕が大きなあくびと一緒に、僕の横に伸びて阿呆やナーと笑つてゐた。（一九三〇、七、二、）

フエルトの爲に

大阪　木山青砂郎

けたゝましい物音に夢破られた僕は機械的に跳ね起きると直ぐ飛んで出た。地震だとは思わなかつたけれど極度の不景氣熱と血生臭い泥臭い此の頃の空氣に刺激されたのだらう。原因は娼妓の一人が二階から勇敢に墜落したのだつた。大きな尻を兩手で抱へてへたばつてゐる彼女にもつと手の存在を許したなればそれらの總てを使ふ事を惜しまなかつたらうそれに彼女の偉大な尻ノ下にはフエルトの片草履が裏むけに敷かれて居た。彼女は愛する草履の爲めに勇敢にも身を階下に轉落させたのだ。彼女の痛苦は、フエルトの草履が落込んだ痛みと同等であつたかは草履に聞かなければ釋らない。

子供ごゝろ

大阪　川村觀月

この朝私は太陽のはるかにのぼる頃、洗面器を片手に二階を降りると、隣りの秋坊(四才)がやつて來て「おばちやんお早うさん」いつも必ず今日はと云つて來るのに」と云ふなりすぐやつぱりむつかしい今日はと云ひました。おばさんは噴

き出しながら「秋ちやんおませね」と云ふと秋坊は「僕おませちがふ。秋坊よ」と云ひました。おばさんもおぢさんも私も笑ひ乍ら秋坊の頭をなでました。

落した壜

大阪　丸山公二

「ガチヤ」と壜のわれた音がしたので、店先から往來を見ると、顔見知りの婦人が困つた顔付で立つてゐたが、やがてあたふたと元來た道を引返して行つた。今しがた撒いた水も乾き氷屋の旗が暑い陽を浴びて風もなく重く垂れてゐる。しばらくすると强烈な油の香が鼻を衝くので現場へ行つて見ると、レッテルに南京虫を描いた壜が空しくころがつてゐた。

其の婦人は、近所の人にも南京虫は居ないと云切つてゐたのに。

蟻の勇猛心

大阪　山本雨迷

丁度アメリカから「マニユアル、オブピンポン」といふ本が屆けられて、世界的に誇る我國のピンポンの技倆から、其本の何處かに何ものかを見出さそうと思つてゐた。チルデンが卓球に關心を持ち此本の序文をものしてゐるなど新らしい消息が知り得た事は何だか嬉しい氣持であつた。リチャーズもウイルス孃も亦ピンポンのプレイヤーである事を知つた時には、日本でも原田、佐藤も之に同じ事である對照に微笑まされた。疲れたので庭に出て蠅を氣絶さして蟻に與へてやつた。蟻と蠅の爭鬪、身をとしての蟻の勇猛心は何時もながら疲れを癒してくれた

夏の方程式

京都　桑原京郎

「夏は暑い事によつて人間を自然に一等近い姿になさしめる」てな方程式を立てゝ、アッパッパの娘、ランニングシャツの兒、褌だけの親爺、腰卷だけの嬶等々夏のナンセンス美感？に、パン拾ひごつこを忘れかけてると、お隣さんから「お電話ごつせ！」……

「コチラ○○家の□子ごすがまだ裾模樣のキモノ染つてまへンの」「まいごオホキに……隆り續きでエラウ遲なりましたけど、もう染上りまして今仕上げ中で…」「今、今着な間に合はへンワッ、」「ヘエ！エライ濟まンこつて出來次第お屆けしますさかい」「アンジョウ染つてますか」「ヘエそらもうお好みが上手ごすさかい、ヨウ引き立ちまッせ」「チュッ！」と云ふ音がして通話が終つた。「？？？にやごーッ！」は口の中ふと思ひ出した山雨樓氏の名吟一句

地聲出したら商賣になりませぬ

冬物のつゞらから

大阪　生田翠夢

二五九〇年七月二日。

急に上昇してゆく水銀線。さなきだに狹い家は益々鈍重な暑さに充滿してゆく

昨日から引續いて母親は汗にまみれて昨年しまつたカーテンを探すのに夢中だつた。

多くもないものを二度三度ひつくりかへして探しあぐんだ。——夕方ふと出した冬物の葛籠をあけると僕のバンツの間から洗濯屋の包紙のまゝ出て來たのだつた。母親感心して曰く「矢張り七度尋ねてから人を疑へ」と。

忘却税

豐中　阿部閑生

川柳雜誌社の端書と大阪地方裁判所の書留が一緒に來てゐる。裁判所のは登記を忘れた辯明の呼出狀である。この前阪急の遺留品の棚に自分の洋傘と包物を見

出して、完全に忘れた事を忘れてゐた事實なぞ辯明の例にはなるまいか。結局十圓の罰金忘却稅を徵られるのだらう、忘却稅を徵つて然るべき人は外に幾らもあらうに、そんな事は何うでもいゝ。雷が鳴つて梅雨が終つた。夕月に簾の影が濃ゆい。子供の時分母がしたやうに軒に岐阜提灯に燈を入れませう。

硝子窓の切符

神戸　西村市公

蒸し暑い或日の午後丁度ラッシュアワーで吾家へ吾家へと汗にぬれ乍ら急いで居る時、電車の中でも油汗の匂ひ、安ポマードの匂ひで殊に市内電車は運轉臺といはずぎつしり壽司詰めにされて居た。後部の車掌が前部にゐる客の切符を切る可く運轉臺に行つて居る時偶々或る停留所に停車して今迄後部車掌臺に乘つてゐた廿才前後の黑衣々つけた丸刈の僧侶がすたこらと行きかけたので前部に居つた車掌はてつきりタダ乘り者だと思つたものか急いで呼び止めて追つかけて行つた。その坊さんは惡びれもせず又元の電車の所まで歸つて來て車掌臺の硝子窓を指さした丈けでものをも云はず又元の方角へ姿を消して行つてしまつた。

乘客一同汗の中から、クスクス……車掌は妙な顏してオーライ。指さゝれた硝子窓には唾で切符が一枚張られてありました。

寡婦をめぐりて

大阪　平井蒼太

「おさちさんも未だ卅七だからな」「ふん茲四五年が一番危險な年ですよ」昨年夫を失つたおさちさんは結婚以來石女で過して來た健康な肉体と、過剩な時間とを持て餘してゐる寡婦である。其處で私は性の解決に例のリンガ型保温器を持ち出してK氏に言つた、「不自然かも知れませんが、かと云つて御心配になつてるやうなことを、精神的努力丈けに賴つて未然に防がうと考へるのは少し無理ですよおさちさんがモダン婆さんであつて一瞬の享樂の後のさよならに依つて、顏を合しても知らぬ顏で通せる人だつたら少しも問題ではないんだが、やつぱり古い道德に縛られてゐる昨日の社會の女なんだから」「おさちさん自身の方のこともだが色々出入を續けてゐる男達の方が一層問題だよ。何處までおさちさんが闘ひ抜くかと云ふが點さ」朝の電車の中で、一人の寡婦を廻る噂さ話に、變に興味を見出してゐる自分の姿に、苦酢い不潔さを覺える私ではあつたが夫れにしても女子多難の幾變形相は矢張私自身も其一員である處の社會の無數の實在として、多少の關心を持たねばならぬことではなからうか。—七月七日午前のメモ—

西洋の姿を覆ふ

大阪　熊本黃蛾

ソフトワイシャツの上に伴天を着た變てこな私の姿にある奥さんが

「ね、洗濯屋さんなぜワイシャツの上に伴天着たりなんかするの、人が笑つてよ」

「ね、奥さん笑ふ人を笑ふてやりましようよ。國產品愛用の意味で少しでも西洋の姿を東洋の姿で覆ふたまでです」

川柳青明忌

◆日時　八月三日(日)夕七時

◆會場　神戸市仲町五丁目　協和會館（市電有馬道下車西へ半丁三八銀行横）

◆兼題　「顏」三句　ひろし氏選

◆講演　「青明藤村一」　麻生路郎氏

◆會費　三十錢

主催　川柳雜誌社神戸支部

後援　川柳雜誌社

粒々集

○　東京　富士野鞍馬

柳橋大東京を川に見る
逞しき女房は揖へ斜に構え
ゴミ舟はどこまでゆくか黄昏れる

○　御影　長崎柳秀

口紅に笑くぼに親の金をつぎ
君なんて嫌よと女給酌きこぼし
硝子越し床屋の世辭は無駄になり
乘て鉢の姿動物園の虎
出世する積りカバーの灯にそむき

○　松山　前田五健

法螺貝は案外やせた男なり
庭石のこぼれではない墓
夏の山瀧一ゝ筋に活きてくる
繩のれん日本主義の氣焔あげ
工場主いやなら止せゝ云ひ放ち
夕方の富士へ外人浴衣がけ

○　大連　大島濤明

物乞ひの額をよごす石疊
乳多く兒の瞳から湧く歡喜
先頭の父を信ずる子女七人
友禪の母の好みに針動く

○　金澤　安川久流美

夕ざれば毒だみの花白かりき
石蹴つて蹴つて話のつきぬ河岸
枇杷の實の皮を刹ぐ手も病上り
飯臺に夕刊のせて亭主の座
プラットで摺れ違つたこもうあへず
子を伴れて寄席へ行く夜のやわらかみ

光耀抄

○　東京　井上信子

雜談に汚れたまんま朝になり
影かゝ見れば手足の萎えた男
一瞬の狂ひに立つて風車

青青青街は勞働五月祭

○　魚崎　杉原吟女

泣きぬれた瞳ゝ瞳に船の灯がゆれる
影の多い顔今朝の鏡の中の我

青葉惱まし緣先に肩上げを取る
猿の母子へ涙ぐまれて立ち去れず
兒の寢入つたうでの重さに虫のなく
かたづを呑んで寢て行く兒をば見て居たり

○　松山　岩本武子

支拂つて見れば金錢だけのこと
繪はがきに只東京とあるばかり
眞劍に生きて居ようが居よまいが

○　京都　萠黃ふく子

その後はこれ見よがしの女にて
逢ふたびに新芽一寸二寸のび

○　大阪　松盛壽枝女

梅雨近し借て來た傘返しとき
木琴をたゝいて雨の日を遊び
節約はしたし要る物ばかりなり

○　大阪　朝田スヱノ

言ひまけて呑む牛乳の冷たすぎ
かちわりを口にしてまでほどきもの
若造りしても夫の氣にいらず
商賣の有難さとは思ひ居ず
丸髷の白粉はけたまゝで寢る
涼み臺梳き櫛一つ忘れられ
引き汐へはるか白帆が見えるのみ
減給と別に妹昇給し

○　島根　杉谷喜緒女

注射はいやだと涙ぼつたり

○　岐阜　太田誼女

見せつけてやりたい人が先へ死に
金魚やの聲の涼しさ美男やろ
燒く氣にもなれずレターを持てあまし
何にするも女てふ名がすぐたゝり
死にたいと云ふ人肝油飲んでゐる

○　愛媛　矢野愛女

自分のでない裾模樣はかごらず
入港へ女せはしいコンバクト
胸のへん撫でゝ針箱しまはれる
水泳に行く子へ母のくどい事

○　大阪　畑田よし江

幼子の兩手トンネル出來上り
隣からやもめの三味が派手に鳴り
國產を愛せよ腕卷スイスなり
師の君の返歌に戀愛籠つてる

○　愛媛　尾下雅女

月の出るきざし納涼唄ひ出し
涼み臺北斗の位置の變ること

○　大阪　麻生葭乃

沖へ沖へ提灯となりし海豚の靈
噴水のしぶきが屆くハムサラダ
叱りつかれて深く眠りぬ
ざくろ一つ二つ立ち初めた雲の峰

川柳に浸る

阿部閑生

三の力を五に働かせてゆく人と、七の力を五だけしか出せない人とある。現はれた所は等しく五であつても、底力には大變な差がある事になる。

詩的な、そして刺戟の強い感傷文字を用ゐて、巧妙に言ひ廻し、充分に言ひこなした川柳と、肝腎な所へ極めて鈍な文字を當篏めて平凡化し通俗化した川柳とがある。前者は一應の喝采を博するだけの効果があつても、それきりのものであり、後者はこかく見のがされ勝ちでありながら、何日までも持前だけのうま味を失はないのが多い。

川柳は最も短い型の詩である。これを才と技とで押し切つては、上滑りをして眞の味を出し損ふ嫌ひがある。寧ろ思ひ掛けなき鈍な文字が挾まつて眞味を出し澁ることが、一句の重きを成す場合が無からうか、鈍なそして幼稚な言葉でも、眞實の一片を把握した句は第三者の腦裏で思はぬ發展をし、飛躍をするものである。

感興が頻りに動き、腹案が雲の峰の如く湧いて、十句でも二十句でも立ちどころに成るといふ樣な時が稀にある。こんな時には次から次へと句は生れるが、多くは淺薄である。時を經るに隨つて價値が剝がれてゆく、夢で川柳が出來た時には夜明けが待ち切れない程のものでも、日光に曝すと全く價値が消えてしまふ。それとは反對に何の感興もなく至極白けきつた心持ちで苦しいながらも、一つの事象を次第に考へ狹めてゆくと、奥底に何物かゞ閃いて、僅かに一句を得、或は二句を得る事がある。斯うした句は出來てからも何處か物足りないものだが、一種の擴がりを以て人心に喰ひ入る力が、微かながらもあるやうだ。

眞向から上段に構へた句は、派手で幅はあるが奥行が乏しく、素知らぬ顔で一瞥を與れた句に捨て難いものがある。一歩を進めた際ごい描寫には、ある程度の厭味と卑しさが附き纏ふけれど、僅かに接して遠く離れたやうな句法には心惜い

ばかりの牽引力があるものである。

驢事馬事として徒らに觀過してしまふ日常の些事でも、卒然として知覺を呼び起した態度で、全く路傍の人として是を眺めると些事と思つた事柄やその變化にも奇異の影が附き添ふて、我だけの注意を向けねばならぬであらうが、既に因習の久しく目に見馴れ耳に聞馴れた事物の中に、強いて新味を求めるには勢ひ奇警な一角に探りの筆を入れる外はない事になる。

が併し奇警も、破格も、そして平明もそれは要するに巡環的な流行に過ぎない一事、一物、微に入り細を穿つて、そこに眞理の棲家を見出し、わが心境を託して月も映らず水も映さずといふ濁らぬ一滴を掬ぶのが大切な事ではあるまいか。

眞理とは爾く單純ではないかも知れないが、それは案外平凡なもので、平凡なために捉へ難く扱ひ難いのではなからうか、眞理とは三度焚く飯さへ硬し軟かしの米の飯の樣なもので、平凡に過ぎて眞の味を味ひ難いのでは無からうか、米の飯と同化した川柳を作つて見たいものである。

川柳を考へて居られる日が續くのは幸福な時である。朝は床の中で川柳の事を思ひながら夜が明け、朝餉の箸の合間にも、川柳を考へてゐる顏になり、歩きながらも、仕事をしながらも、或時は人と話しながらも、川柳を思ひ煩つて居られるのは、最も幸福な日である。

胃弱が暑熱に征服せられる夏が來たが海へも山へも　避暑なんか毎年できないから今年もできず、家の中を猫のやうにした〳〵歩いて、此處も暑い、其處も暑いと、さて坐布團を押し除けて　緣側へ座つた膝の狹く薄べたく、脚を組んで椅子に凭り掛つた腕の竿の如く細く長いことよ、この上痩せる事もまづあるまいから溶爐の前に唄ふ戀歌の心理で朝から晩まで、晩から朝まで、このひと夏、今日から獨り川柳に浸る。銷夏の一方法としてではなく、生活の全方法として。

もとより佳句を得られぬ惱みはあらうけれど、人には見られぬ下手な句にも、我ものと思へば一沫の涼味が通ふであらう。

吟行

深日より加太まで

昨年は淡路行で暑さを吹き飛ばしましたが本年は海濱の眺望美を以て鳴る加太方面に涼味を趁ふて一日の清遊を試みることに致しました川柳と酒と無駄話の夏を味ひに是非々々御參加下さい

日時　八月十日　日曜（雨天延期）
集合　南海電車難波驛前
出發　午前八時勵行
會費　實費（約三圓內外）
服裝　可成輕裝の事
申込　八月五日までに本社事務所又は幹事迄
行程　觀音岬＝谷川港＝小島住吉＝報恩講寺＝大川峠＝深山＝淡島神社

（幹事・新水・里十九・かほる）

旅のこころ（II）

――海峡親善川柳大會より――

麻生路郎

ほがらかな朝となる。函館の空は明るい。なかんづく青柳町は靜かで、ほがらかだ。

『朝の一番で來た』

と云ひながら三休君は縞のズボンの膝をくづした。三休君と云へば渡島の農事試驗場の場長さんだ。それにしては役人らしく鯱こばつたところがない。人懷つこい温顏の紳士だ。

花童子君とは親類づきあひをしてゐるので案内もなく二階に上つて來たのだ。僕とは數年前大阪の宿で會ひ一昨年は、君の案内で當別のトラピストを見物に行つた仲である。お互ひに打寛いで語る。九時から、こちらで會合があるんださうな。さうだらう、明日の大會へ出て來たとしては少し早すぎると思つた。又明日來ると云つて九時五分前に歸つて行つた

◇

朝の食事が濟むと、花童子君と二人で水産陳列場へ出かけることにした。一昨年そこを訪れた時の印象が未だに去らないからである。もう一度、海の怪異にしみ〴〵觸れて見たいと思つたからである

水産陳列場は函館公園の中にある小ぼけな、古ぼけた平家の洋館で、第一陳列場と第二陳列場とは別棟になつてゐる。第一は海中に棲息するものが陳列され、第二はその捕獲器具、統計表及び罐詰類の如き即賣品が陳列されてある。私は特に其第一に魅力を持つ。しかし、私は彼等が持つ魅力を ここでくだ〳〵しくべることは 避けやうとは思うがその名前や形態の一端位は記して置きたい。

左右が三尺餘もある『たらばかに』四尺餘の『まんだい』、同じく四尺餘の『いとまきえい』の雄・その雌は、左右が八尺以上もあるんださうな。丈が三尺五六寸もある『かすざめ』、繪ではよく見るが實物を見るのは今がはじめての『みのかめ』、これは案外形態は小さい。丈が四尺餘の『あなうみがめ』、明治十二年渡島國茅部トベホッケ村で二日間を費して捕獲したと云ふ丈二間の海象・海象の胴の周圍は一丈から一丈二尺・體重は一トンからあるんださうな『ろつぺん鳥の卵』の偉大さはとても卵といふ感じがしない。白い象牙のやうな硬さの細くて長い『うみやなぎ』それから『をつとせいの頭骨』だの、『をつとせいのはらご』だの、『さめの頤』だの『わにざめの齒』だの、『うみすゞめの巢』だの『むらさきうに』だの、『だいないうみへび』だの、數限りなくある。尤もこんなものは專門家や北海道の人たちの眼には珍らしくもなんともないのであらうとは思うが瀨戸内海で生れた自分などには幾ら見てゐても飽かないものがある。

陳列場を出る。公園は櫻の眞ッ盛りだ。園内の木橋を渡る。橋下には水が無い。落花をもつて埋められてゐる。

橋上にしばし佇ずんであたりを眺める。夜の美觀を思はせる雪洞や飾電燈が春をいやが上にも春らしくしてゐる。

花童子君の語るところでは、夜の二時三時ごろまでも市民はここへ來て騷ぐんださうだ。なるほどれ、さう聞けば飲むべく騷ぐべき準備がかなり大仕掛に出來てゐる。色ッぽい女が通る。どつかで絃の音さへもする。

◇

午後も二人で出た。曾遊の街が私の眼を眼りなくよろこばせる。

途上、函館新聞の×編輯長を社に訪ねたが不在だつた。函館毎日の編輯長C氏には折よくお目にかゝれた　應接かふさがつてゐたので迷惑とは知りながらも編輯室で三十分ばかり話込んだ。現代の思想詩としての川柳について談じた。

C編輯長のすぐ横で花童子君と話しながら夕刊のために働いてゐたM君が、急に私の方へ向いて、『僕は『川柳沙談』の中にある若原鎭吉の友人なんですよ』と、いかにも記者らしい話題で話しかけた。僅にこの一語がM君と私との間をどんなに接近させたか知れない。

私が一昨年、函館の共同墓地に立つて不用意に呼びかけた墓石が、生前川柳家であり、新聞記者であつた若原鎭吉の墓だつたので　その奇しき因緣を漫談の中に書いたのであつた。が、今度は私の『川柳漫談』を讀んだ、柳人でないM君が僕は若原鎭吉の友人ですと名乘つて私に呼びかけて呉れたのである。

不思議でないと云へば不思議でないかも知れぬが―私には鎭吉の靈がどつかに働いてゐるのではないかとさへ思へた。M君はM君でうちの新聞へ是非川柳漫談を書けとすめてくれたほどに好感を以て迎えてくれた。

新聞社への長居、殊に編輯局への長居は心なき業であるから、時に質問を投げ時に大きくうなづいて私の所說に耳を傾けられたC編輯長の好意を謝して辭去した。

◇

ランマンと呟きみだれた櫻の五稜廓はたしかに一九三〇年型ではなかつた。

富田あたりが演つてゐた新派劇そのまゝの舞臺だ。醉つぱらつてゐない方がはづかしい位だ。みんなヘウ〳〵ロウ〳〵といふ奴だ。敵討でもあるやうに、あつちでも、こつちでもまん幕を張り巡らしてゐる。湯の川あたりから引つぱつて來たらしい美しいのと入り亂れてジャバンダンスに興じてゐるのは、まだ〳〵上の部である。目鬘が飛んで出る。女裝で醉態を演じる。まだ〳〵上の部である。商ひは亭主にまかしてありますと云つた風な町内のお神サン連までが踊るは〳〵花ものかは、酒ものかはである。プロはプロらしくといふつもりでもあるまいが淺黄服に身をかためて安酒に醉拂ひ絃の要らない歌を唄つてゐる勞働者連もゐる。

斯うした雰圍氣を味うべく ゾロ〳〵押しかけてゐる人々が蟻のやうに續いてゐる。大阪あたりではとても見られない 全くの無警察狀態であるが大した事件も起らぬらしい。あれでも干渉したら相當に騷ぐんだらうが、うつちやつてあるだけに、い、加減に醉ひが醒めたら、ぼつ〳〵引きあげるらしい。

尤も騷ぎ足らねば公園が二時までも三時までも騷がせて呉れるんだから譯はない。つら〳〵考へて見るまでもなくこゝは榎本武揚や大鳥圭介等が 騷いだ五稜廓なのである。何れにして五稜廓は騷ぐここに出來てゐるのかも知れない。

督遊の地ことしは櫻觀て歸り

◇

それから二人は函館商業の實習販賣展覽會へ立寄つた。木造のガタ普請の校舍ではあるが、かなりの面積と、かなりの教室とを持つてゐる。こんなに澤山あるんだつたら這入るんぢやなかつたと思ふほど ぐる〳〵ぐる〳〵と隨分の距離を巡ぐらされた。

感心したのは郎下と云はず教室と云はず空間のない程にお手製のポスターを張詰めてあることだ。それに商賣人そこのけのサービス振りだ。先生だか、生徒だか、もうはつきり記憶しないが、香具師の口調さへ交じつてゐたのには驚かされた。苦笑してゐるうちに又一つ買はされてゐるのも可笑しかつた。

たつた一つ嬉れしかつたことがある。それは非常に快感を與へる森永のポスターを見つけたので、あれを呉れませんかと云つたから、何か賣れでもしたやうに、氣輕く、二三の賣子（尤も學生だが）がそれを外して、おまけに他の一枚をも外づして、キリ〳〵と卷いて、それをシデ紐で括つてまでくれたことである。

學生の描いた多くのポスターと違つてこのポスターばかりはたしかに室内の美觀を維持したであらうところの、このポスターであつたのであるから おそらく大抵の場合は呉れないであらうし、呉れなくても何んの不足も云へないところのものだつた。

自分はH・C・Sの學生のこの氣輕さを愛する。無闇矢鱈とコンマーシャル、ナレージを積め込むよりも、この氣輕さ一つがどんな結果を生むものであるかを自分は知つてゐる。

◇

旅の疲れを休めてくれるべく、菊水の閾を跨いだ。M君へも電話をして、來て

貰つた。お互にプロフエショナルな意識から開放されて話したかつたからである勿論會へばこれと云つて話も無いのだが人間は顔を見てゐるだけが、ごれだけ力になるか知れないのだ。

これについて思ひ出すのは今年の二月廿八日のことだつたがI氏の紹介で幽靈を見せて貰ひに某時計店の三階へ出かけたことがあつた。その夜は雨が降つてゐて、幽靈が出るにはふさはしい晩だつたが、幽靈は遂々出なかつた。その夜一室に集つた人々は二十七八人ゐたが、室を眞ッ暗にするとお互ひの心を疑ひ合うものだからと云つて、みんな一本の細引で括られたことがある。なるほどそんなものだ。その中にはF博士もゐたし、何れもインテリゲンチヤばかりだつたが、暗くなつたらお互にお互の心を疑うことは愚夫愚婦と何んの撰ぶところはなかつた。斯うした實例は震災の時に風聲鶴唳を生じたのと同じ心裡だ。その點、だまつてゐても顔を見てゐることは私のやうな凡人にとつてはたしかに利目がある見ずして信ずるものは幸なり、それは神樣の世界のことである。

それで私はM君と會つた。大した話もしなかつたが凡情のおもむくところだけを話してゐても愉快だつた。

小萬といふ妓が來た。もう姥櫻は過ぎてゐるが、酒間の空氣をなごやかに運んで吳れる點はうれしい。私に云はせれば客のこゝろの動き方を知らぬ妓は無くもがなであると云ひたい。

花童子夫妻（右左）と路郎（中央）

客のこころの動き方を知つて、客と共にはしやぎ、騒ぎ、飲み、唄ひ、沈み、談す妓がゐるとすれば、それは立派な藝術家である。

そんな妓をのぞむのは　のぞむ方が無理かも知れぬが、少くとも騒ぐのが自分達の職業だと思つてゐる妓は不幸である

折角、男同士で談がしてゐたいと思つてゐるのに、

『ねえ、ちよいと、一つお唄ひなさいよ』

とか。なんとか云つて、頻りに、ドドイツメロディーで誘惑せうとする妓があるが、あれじは全く山からぬ。妓は時には屏風の繪模樣であることに我慢してゐなければならぬ又それを理解しなければならぬ　それは贅澤な遊びであると云ふかも知れぬが、遊びそのものが、既に贅澤なものなのであるから、それ等の贅澤にあまんじるだけの覺悟がなければ、藝妓はつとまらぬものと心得置くべしである。

花童子君の話では、小万は私の醉筆の『だしぬけに鐘が鳴るのも旅のこと』といふ句を今でもかけてゐるさうだが　私にとつてはこれ位こころよい話はない。殊に『子よ妻よばら〳〵になれば淨土なり』の句を覺えてゐたこともうれしい。

私はよく川柳家に、短冊や稚帳をつきつけられることがあるが、私の句を一句すらも覺えてゐない人へは書きにくない拙くとも私は感激で書くのだから。

續いて富貴子、市子、きよ子(半玉)、お勝、灌八・扇吉、ぴん助等が來た。それから誰が來たのか覺えてゐない。

話題が言葉といふことに移つた時、暫く會はなかつた人に發する言葉を國々によつて聞いて見た。大阪から來たといふお勝は『まあ、まあ、ごきげんさん』と云つた。名古屋の小万は『まあーやつとかめだなーも』と云つた。秋田縣の權八は『あいあねはんおひさしぶりだなーすや』と云つた。秋田市の富貴子は『まあ、しばらくだねはン』と云つた。旭川のぴん助は『しばらくだねえ』(重く出る)と云つた。函館の市子は『にさん、しばらくだな』と云つた　斯うした柔かい言葉の一つ一つが私のジョニウオーカーのカップの中に溶けこんで行つた。

旅はよし夜はなほよし光る街

◇

いよ〳〵大會の當日が來た。早朝に札幌の夜半杖君が着く。花童子君と三人で、電車路を横切つてすぐ近くの錢湯に行つた。

二階へ戻ると間もなく桂花君が來た。續いて三休君が來た。花童子君と桂花君とは大會の準備で二階から上つたり降りたり、電話をしたり、見てゐても氣の毒なほど忙しい。夜半杖君と三休君と私とは、別に手傳ひやうもないので寢轉んで雜談に耽つてゐた。

そのうちに、花童子君と桂花君とは青森軍を出迎えるべく棧橋へ出かけて行つた。夜半杖君は買物をして來ると云つて　外出してしまつた。

花童子君が又戻つて來た。青森軍は五稜廓へ向つたさうだ。錦浪三太郎の兩君は谷地頭町の宿へ落ちついたとか。

◇

午後、錦浪、三太郎兩君の來訪をうけた。錦浪君と私とはこれが初對面だつた　錦浪君は『大阪で會つたやうにも思ひますが』との話だつたが、おそらく會つてはゐないだらう。たゞさう思はせるに充分な親交が續けられてゐたのに過ぎない

錦浪君は思つたよりも小柄の人だつた平面的な顏で、顏巴は蒼白だつた。長い間病氣でなやまされてゐられたので顏色がすぐれないのであらうと思つた。一見株屋の番頭さんのやうだつた。

これが、曾ては『東京毎夕』の名支配人としての怪腕を謳歌された人であり、近時は又『岡辰押切帳』の著者として一躍金儲博士に祭上げられた谷孫六先生であらうとは誰が想像し得られよう。

軈て大會の時間が迫つて來た。幹事の命ずるがまゝに一同は座を立つた。自動車が末廣町の東部事務所へと急いだ。

◇

第二回海峽親善川柳大會の幕は主催者龜井花童子君の挨拶によつて切つて落された。拍手は急霰の如く起つた。花童子君は親善川柳大會の趣旨と、その第一回が昨年小林不浪人君の手によつて青森で開催されたこと、青函兩地で隔年に開催することなどを簡單に述べた。

場の正面、中央には川上三太郎君寄贈の優勝楯が飾られ、それと並んでひぐま川柳社寄贈の花環が會場の空氣を華やか

にしてゐた。句箋は既に配られてゐる。

はる〳〵と海を渡つて來た青森軍と、これを迎えた函館軍とは息づまるやうな對峙を續け、咳一つ聞えぬ靜かさのうちに作句した。

夕刻、作句を打切り句は各選者の手に移された。披講にさきだち、一同、記念の撮影をした。

（寫眞は前號の記事中に掲載してあるから參照されたい　その寫眞説明を左にかゝげることにした。—前列向つて右より逸郎、蝶五郎、不浪人、三太郎、錦浪、路郎、三休、夜半杖、呂久、—第二列—登佐森、浪人、桂花霜烏、綠茶、玄氣血、廻樓、遊川、喜多坊、白帆、一夫、伸吉、蔦の家、多一郎、—第三列—里魚、花童子、放亭、若老子、遣宵、竹二、有石、冬子、青柳、粹狂、夢郎、自由郎、紅露、中村、利喜馬、啓夫、自眼子、都れ尺—第四列—ともえ、久車、よし丸、夏吉、粂多呂、かるた、團子、不動子、紘坊、瞭象、佐藤、三津蜂、三歩の諸君）

續いて各選者の披講があつた。兼題『壁』は夜半丈君の選『生活苦』は不浪人君の選、『交際』は花童子君の選で、席題『握る』は三休君の選、『温』は三太郎君の選、『玉』は錦浪君の選、『旅』は路郎の選だつた。私は披講に先立つて時間が無いのを特に割愛して貰ひ、平素の持論、川柳の社會化運動とその方法等について語り、同時に青函兩地の柳友への希望を駈足で述べさせて貰つた。

白熱的作句戦の結果は青森方の優勝だつた。不浪人君の歡喜したこゝと青森軍の意氣軒昂たるものがあつたこゝとは想像に難くないだらう。が、藝術は數字ではない。高點句必ずしも藝術的價値が高くない場合がないでもない。ほんとの作品は一人靜に、三昧に入るにあらざれば生れないものであることを忘れてはならないと思ふ。だから勝つた青森必ずしも誇るには足らぬ。負けた函館必ずしも羞づるには及ばぬ。と云つたからとて負けたのが自慢になる譯でもないから來るべき第三回の親善川柳大會には大いに奮闘せられんことをのぞむ。勝敗を念頭に措かぬまでも、句作には精進をつゞけて貰ひたいと思ふ。

この大會は斯くして終りをつけたのであるが、この句會の進行振りが關西方面特にわが川柳雜誌社の句會それとは多々相違してゐる點がある。先づ第一には席題が四題あれば四題とも一時に締切つてしまひ、四題の句數は通計二十句とし、各題の句數は作句者の好むところにまかしてある點であつた。一時に四題あることは入學試驗的氣忙しさを感じ、三昧境に入るのに困難を感じはしないだらうかとも考へられるが、又一面から見れば、自己の作りよき一題或は二題を選んでウンと句を練るの便もある。

又作り惡き題に向つての努力をしないために、力が早くつかないといふ缺點もあるから、この方法と川柳雜誌社の句會式に一題宛片づけて行く方法との優劣を俄に斷ずることは出來ないが、斯うした方法もあることを參考までにかかげて置く。

一時に各區を發表することは東京の句會に於ても行はれてゐる。が、この方法は遲れて出席しても多作家であれば各區に出句することが出來るといふ利便もあるが、そのために出席時刻を更に念頭に措かぬ作家が出て徒らな濫作に句會の空氣を亂す惧れが無いとは云へない、句會へ行つたが、作家か澤山集まつてゐなかつたので、選者が飯を食ひに出て、そのまま他へ外れて歸つて來なかつたといふやうな事件が生れるのも、おそらくさうしたところに缺陷があるのではないかと思はれる。何れも一利一害がある。句會といふことについても、もう少し研究されてもいゝと思ふ。

席題が印刷されてあつて各人の手に配布されることこ句數、締切時間、その他注意すべきことが、その紙面に於てせられてゐることは、痒いところを搔いて貰つてゐるやうで甚だ氣持がいゝ。句箋なども特に印刷されてあつた。川柳雜誌社の實川本位もいゝが、經費の容す節圍で斯うした方面のことをもやつてもいゝと思ふ。尤も大阪でも至誠川柳會ではズツト印刷した句箋を用ひてゐる。

兎まれ、お互ひに、いゝことは學ぶべきであらう。

◇

十時から割烹島家に於て、親善大會の畫龍點睛が行はれた。

酒間の餘興戰が再び書函の人々によつて開始された。兩軍對峙して相讓らずといふ形である。期せずして書函の各車は餘興番組を配布する　試みに書森方の隱し藝番組をのぞかんか、先づ不浪人君の監督、巨魁來、登佐森兩君の後見の下に第一部第二部に分ち、總番數を十六番とし出席者の總動員である。よし丸君の唱歌『巡業のビラ』は酒田の荒木京之助君の川柳を中山晋平君が作曲せるもの。蝶五郎君のヨサレ節『黑石ヨサレ節』、かるた君の津輕民謠『ジョンカラ節』、かるた君の獨唱『からたちの花』、霜鳥君の舞踊『婚ダンス』、自由郎君の舞踊『たこ踊』、有石君の舞踊『裸踊り』等何れも妙技の限りをつくした。中にも霜鳥君の『婚ダンス』は舞踊の尖端を行くものでグロテスクな快感をそそり、有石君の『裸踊り』に至つてはエロ百パーセントのものであつた。

函館方の餘興では花童子君監督の下に、桂花君の淨瑠璃埃りたゝき、都れ尺、呂久兩君等の舞踊一座を壓してゐた。

續いて當夜の餘興の白眉として巴見の名妓によつて川柳小唄振りが紹介された作曲は渡邊さみ子師、振附は藤間扇吉師で、川柳は三太郎君の『子供は風の子天の子地の子』、（踊きよ子、唄びん助、絃權八）錦浪君の『春を趁ふ夢に嬉しい文が來る』、（踊太郎、唄權八、絃權八）路郎の『夕櫻さんほがへりがしてみたし』、（踊市子、唄富貴子、絃權八）だつた。これは少くとも餘興程度のものではなかつた函館毎日がこの川柳小唄振りを日本最初の新記錄として紹介してゐたが、たしかに壓倒的の賞讃を博したことは事實である。かくして、ステージは多忙を極め、いつ果つべうも見えざりけりといふありさまであつた。（續く）

一路集

【募集句】

高橋かほる代選

秘密

おたがひの秘密を知つて友だち　桂舟
女の子嬉しい秘密ありはあり　一柳
狂人の今まで秘密守つて來　南牧
女房に秘密な連れの美しさ　芦穂
打ち明けた目に涙のほり吹かれて　黒天子
口止めをしたに話題になつてゐる　吉祥
こつそりと姉のくれたる煙草にて　燦郎
闇の中秘密大きな眼をあける　空山
けんかから秘密をバラス男の子　英賀夫
それ〴〵の秘密女給の厚化粧　沒食子
其秘密毒を呻つてしまつたり　涼哉
妹に秘密抽斗一つ出來　麓生
二階借り下の秘密を知つてゐる　重郎
悪人はちやんと秘密を知つてゐる　四五麿
娘の秘密死をゐらぶのみ　方眠
それからの手紙英語で書いてくる　三闘子
(人)金屏風今日の秘密を知つてゐる　素峰
(地)小便の秘密をだれも知らぬなり　今雨
(天)無口から思はぬ秘密聞き合はせ　らつぱ

深夜

仲裁は深夜になつて暇乞ひ　朝陽
深夜業同んなじ笛を聞いて去に　裸人
怪談に背を丸くして夜は更ける　志洋
はてしなく深夜を話す氣の情婦　鐵洲
寢付かぬ耳へ風呂屋の仕舞ふ音　菊路
夜の更くるまゝに捗る手内職　同
終列車着いて宿屋はすくうやう　山月
病人を氣にする深夜何か落ち　樹光
眞夜中の霧肥船の唄が來る　桂枝
終電車出たそのあこへ醉がさめ　勝二
篠穴へ月が鋭い冬の夜半　狂水
東京も眠つたらしい月の冴え　空山
貧しくも深夜の寢息恙なし　英賀夫
押合つて寢てる子供の頭數　涼哉

福田山雨樓選

杭全町
MEMO
綠雨

▼海へ山へと出かける猛暑のころになりました。柳友諸君相變らずの御後援で本誌もます〳〵健實に育つてゆきつゝあります、今後共一層の御精進と御後援を祈ります。

▼山本凡々子、川村觀月、平井蒼太、日野華水の諸氏が今回社友として入社されました活躍を祈ります。

▼同人田朝陽君は濱寺海水浴場へ臨海倶樂部を開設されました。圍碁、驟珠、半弓將棋、麻雀等の設備がありますから海水浴に行かれた際は立ち寄つて下さい

▼社友中澤濁水君「土佐を川柳化」せんとして高知新聞へ高知柳壇を設けられて早くも五百回に達し熱心振りを見せられてゐます一層の努力を望みます

▼同人高橋かほる君の宅では六月十一日長男孝太郎君を儲けられました、お喜び申し上げます。

▼安西杏三君の宅では三女英子さんを七月二日に儲けられました、お喜び申し上げます。

▼編輯會議を六月二十八日夜、句作に關す

深夜の壁にもの云はぬ影　枯骨
附馬と二人眞夜中寒ふなり　白雨
深々と更けてカーテン淋しいな　麗函
眞夜中をポトリ女給のごとく行く　不然
傾ける月の下行く身でありし　一水
深み夜の月に二人は滿されて　らつぱ
寢付かぬ一服つけた灯のまぶし　燦郎
眞夜中の壁に煙の消ゝるのみ　沐天
蚊を燒く母に午前二時鳴る　さだを
夜業から戻れば懸る非常線　木偶人
深夜ふと笑つて見たい大廣間　豆秋
くやしさを竈筒にもたれ泣く深夜　三洞子
醉眼の愚かな我れに夜は深く　紫石
熱のある兒へ眞夜中の下駄を穿き　三絃堂
寢そびれのそれば蚊を燒く俺の影　同
戀の便りを眞夜中に讀む　松露
物干棹も切れそうな深夜なり　利春
ゆら〳〵として舟が寢るのです　捨男
あばら數へて二時を聞いてる　海洋人
良い智惠もなくて深夜の差し向ひ　芦穂
爪先きへ深夜感じてゐる歩哨　同

（五　客）

深夜を突いて石炭はくべられる　新水
空罐を灰皿にしてうつろなる夜　繁坊
廣告燈のみが又變り　海洋人
夜番もう俺だけの夜を眠くなり　柳兒
眞夜中の列車首首首を見る　一柳
（人）色灯を一丁反れて知る深夜　芦穂
（人）夜中に歸の茶漬ですまそ　松露
（地）氷枕の音に夜がひし〳〵　市公
（天）明日の夜もあるともを更け惜み　可村
（軸）びつくりした妻に夜更し叱られる　山雨樓

空車

◇　濁水選

空車音立てゝ行く坂を下り　可村
空車一人前の音をたて　桂舟
砂利道を音でひいてく空車　勝二
空車矢つ張り空の音がする　青水
空車れきろくとして家に着き　明果
空車空虛な音を立てゝ居る　湖山
まつしぐらトラック車庫へがたつかせ　柳兒
賑かに假橋通る空車　芦穂
空車食つて行けない音をたて　捨男
空車凸凹道の音になり　狂水
空車歸りは別な音を立て　英賀夫
空車疲れた音で戻つて來　菊路
ボロハッピ空車さへ重さうに　雪松
空車どこへ置いても邪魔かられ　勝二
空車急坂のある近い道　枯骨
二等車のもつたいなくも空の　志津
松並木空の車へ高いびき　紫石
空車に日長の道を行く屑屋　一水
夕暮の靄に消え行く空車　久雄
空車追つかけ戻る忘れ物　空山

中澤濁水
出口雨町　共選

る座談會を七月四日夜何れも本社倶樂部で開催致しました。

▼川上三太郎氏は國民川柳會を創立されて會報第一號を發行されました、東京丸の内八重洲ビル四一四號國民川柳會事務所、今後の發展を祈ります。

納涼

川柳動物句會

お馴染の天王寺の動物園で涼みながら象やライオンに名句を聞かせてやらうといふ計劃です。彼等を唸らせるやうな名句を吐く人々は果して誰々？？？

日時　八月七日午後六時半雨天中止

場所　天王寺公園市立動物園内

講演　動物園から　園長　林　佐市氏
見た川柳

講演　動物と私　主幹　麻生　路郎

兼題　「象・獅子」各三句　路　郎　選

兼題は八月五日までに着するやう本社宛に願ます。三才呈賞

會費　金參拾錢

▼本社特製の記念團扇贈呈

御注意（鉛筆持參のこと）

主催　川柳雜誌社

▼「大大阪」の更生創刊號が大阪西區北堀江通一ノ一四大大阪川柳社研究會から發行されました發展を望みます。

▼八月號發表一路集の「秘密」は素人君の選でありましたが都合で高橋かほる君の選に變更致しました。御諒承願ひます、

空車貧しき街へ歸つて來　紅一柳
空車ばかりへ塲末たそがれる　荷車月に淋しへ眠つてゐる　溪柳千春
空車田圃の中へ落つたきり　あきらめて辻で寢てゐる空車　桃太郎
空車心許ない儲けなり　提灯もなく空車へ迫る闇　沒食子麗亟
空車軒の灯影へ腹が減り　空車馬子一杯機嫌なり　黑天子憲坊
空車一杯飲める錢を持ち　空車朝出たきりの飯になり　枯骨今雨
空車夜學へ戻り急ぐなり　吊皮が白うに搖れる空電車　明果豆秋
靈柩車一直線に歸るなり　空車曳いてひょろ〳〵サラリーマン　同鯉友
空車ひまな事だと又煙草　揖棒を片手に汗を拭く歸り　方眠燦郎
客の座に還轉手の晝寢　空のバスお客のやうに車掌かけ　吉祥桂舟
運轉手何か讀んでる空車　氣の觸れたやうに響いた空車　双車沒食子
疲れたる身に空車よく響き　車空にして本當にくたびれる　耕民鐵洲
空車書の疲れを見せるなり　空車南地の廓脫けて見る　曙水三洞子
氣を變へて千日へ出る空車　今川をかぶり〳〵の空車　同蘆生
朦朧車故障らしいを裝ふてゐ　腹の立つ程勸めてる空車　樹光穂芦
團体を下した電車ガランと居　出迎への女房に空車渡してゐ　樹光洲鐵
朝陽

空車待つた待つたと追つて行き　らつぱ英賀夫
空車前の重荷へ押してやり　空車よけてゐるのへ止めてゐる　四五磨市公
空車女給の歸りとも知らず　空車斷り出來ぬものを積み　湖山不然
ラッシュアワーを故障車の行く　同
（佳）空車天長節の陽が當り　可村
（佳）空車積めるだけ積む意氣を持ち　涼哉
（佳）肥車空で曳いてる夜明の灯　碧水
（佳）空車馬も心得顔でゆき　柳兒
（佳）空車挽いて滿載からかはれ　吐句坊
（佳）二つ三つ空車もまぜて支線から　吟風
（佳）空のまゝ大阪を發つ一等車　捨男
（佳）空車で待つ圓タクの午前二時　柳兒
（佳）空車市塲に朝の數だなり　桂枝
（佳）故障車に次いで亦來る試運轉　耕民
（佳）空車後押した子を載せてやり　素峰
（佳）父に曳かせず空車汗をかき　狂水
（人）空車うつら〳〵と馬子搖られ　裸人
（地）空車不意に財布が見たくなり　桃太郎
（天）空車馬らく〳〵と草を食ふ　濁水
（軸）空電車音賑かに明けはじめ

「選後私は今日空車の選を終つたところです」迷ひました。それは空車と鼻唄（又は小唄、唄）との道中が最も長く、其の後のは酒屋（又は飯屋、辨當屋、カフエー、氷屋）の側へさしかゝると、みんな放つとかれ、次に之と殆んど同數の空車は言ひ合したやうに、妻（又は子、馬子）を載せてゐます。まだ來ます、子供に跳びつかれつゝ來るのと、歸りを急い

▼同人伊藤綠之助君は七月十三日伯耆大山へ登山されました「船通山朝の霧に浮き上り」の句を寄せられました。

▼舊同人吉川啞人君（山口縣）は電話十四番を開通されその樂のため奮闘されてゐます

▼舊同人竹田芦穗君は六月廿日高野山へ詣でられ「高野山高野豆腐に倦く話」の句を寄せられました。

▼舊同人檜山千代二君は豫て病氣のため歸鄉され廣島縣豐田郡瀨戸町で養生されてゐましたが藥石効なく七月四日死去されました、哀悼の意を表します。

▼七月號五十八頁の寫眞說明に右から芦穗綠雨、雅幽、山月とあるは向つて左からの誤りにつき訂正します

▼本號の編輯は路郎先生、ひろし、町二、山雨樓、雨町、耽亂、愚陀、杏三、公二の諸君と私とで致しました。

改號

三輪五輪君は夏曉、石川鄉一君は桐郎、藤岡且洲君は櫻果、茨木松露君は奈緒美とそれぞれ改號されました。

轉居

幸松四五磨君は大阪市西區阿波座上通二ノ一九郡方伊丹波清路君は大阪市住吉區住吉町三四七ノ二へ各移轉

新誌友

（五年七月十三日まで）

「川柳雜誌」前金半年分壹圓八十錢以上拂込

でゐるのこが、各四五臺、そして輕い荷物(又は傘)を積んでゐるのや、ボッカリ走り出したのもそれ〳〵二三臺、ずつこ離れた驛前にも可なり居ります。其の中で珍しいのは列から引き抜いて頂戴しました」五年程前半島川柳の募集吟の選をせられた路郎主幹が「誰でも考へさうな句は出來るだけ避けなければならないこ思ひます」こ言はれたこを想ひ出し、句評や、氣焰や、句選や……何よりも先づ眞隨の作句が如何に大切で、又如何に難かしいかを今更に痛感し、應募諸君の玉吟によつて、深刻なる教訓を與へられました。(七月四日)

◇ 雨町選

空車疲れた音で戻つて來菊路
空車歸りを急ぐ足こなり碧水
甲高く話して通る空車耕民
空車ここづけの荷が一つのり青柿
空車斷り兼ねるものを積み湖山
空車輕い荷物を賴まれる狂水
又今度持つて來ますこ空車麓生
北風にさらされてゐる空車市公
扱け道のこんな所に上車朝陽
道巾へその空車邪魔になり吟風
空車茶店で少し遊びすぎ湖山
空車傘一本をくゝりつけ裸人
空車芋を一株もろて來る豆秋
空車ひいて夕陽を見る心地らつぱ
空車へ日暮れを遊ぶ子がたかり一柳
空車淡きつかれに持てあまし紅
空車香具師の話へ立ち止り英賀夫
空車軒の灯影へ腹がへり黒天子
信心の客を追ひ越す空車スエノ
氣を變へて千日へ出る空車三洞子
空車この雜沓へのろ〳〵こ方眠
一夜中ガソリン代の損なりし南牧
空車さりこて止つても居れず捨男
バスガールみんな降して戀こなり鳥莊
貨車一輛レールの錆に閉ぢ込まれ燦郎
二等車のもつたいなくも空いゐる志洋
空車もう日が暮れた星の數枯骨
空車一杯飲める錢を持同
空車あのガソリンへ辻を折れ勝二
(佳)夕燒の土手を人•馬• 空車同
同)空車南京街の春を濡れ不然
(同)ちやんのこことなご浮び空車ひく凡々子
(同)空車市場へ朝の數こなり柳兒
(同)空車積ゐるだけ積意氣を持ち可村
(人)空車朝出たきりの飯になり今雨
その飯のうまさこそ働らく者のみが味わひ得る特權だ。
(地)運び疲れて車庫に寢てゐる桂技
寶石をちりばめたやうな空の下、あたりは寂こして虫も鳴かず、こでも言つた情景。
(天)空車まだ一稼ぎせにやならず千春
そして得たものは明日一日を支へる糧にすぎないのだ。……そんな所でマンドリンを彈いてゐやがるのは誰だ。おい兄弟がんばらうよ、「萬國の勞働者よ團結せよ」こマルクス樣がおつしやつたぜ。

みの讀者を誌友として、こゝに芳名を掲載します。何卒此際新讀者を御勸誘下される樣御願ひ申します。御紹介下される方には「川柳雜誌」の近刊を見本こして差上げますからお申込み下さい(綠雨)

吉原翠峰、久仁柳糸郎、五島柳江、林山々小林亂雨、山代吉祥、藤井柳鴉人、廣野溪鶯、谷本素月(高田茶撫郎)橘豆佛、廣阪素峰河野双車、(篠原憲太)桂寬々坊、加藤月天福井進、村上榮造、大國平一多喜康郎、荒田練屋丁、中西隆吉、大島重太郎、砂川米藏、竹田芦穗、上岡餘里雄、鳥居長太郎、平岡立身(本社事務所)括孤內紹介者

正誤

▼七月號 二頁
ゆうひまつかだ つまやくけむり 葉平
▼同 一八頁
この母の子か貧相な顏はかり 駒人

暑中御伺

橋本綠雨 舊二柳子

大阪市住吉區杭全町六〇三
電話天王寺一一六七番

刑事さん

藤岡櫻果

改號四度尙現在の號に滿足出來なかつた僕は、先達つて御多忙な路郎先生のお足を止めて句會を開いた際先生を名附の親に櫻果と改號したこれで惱みが一つとれた譯。歸宅後早速脫衣場へ現在の世相を怨みベンチへ寢の句箋をはつて置くと翌日これを見付けた湯上りの刑事さん店番の妹に向つて、

『櫻果云ふたら誰じや』『兄さんです』

何をしてゐか』『裏で釜焚いてゐます』『釜焚いてゐてベンチに寢ることがあるのか』『いゝえ想像して書いたんでせう』『さうか』

街に住めば（三）

高橋かほる

晝過ぎに十合へ行きますとエレベーター係が此の日だけ？も知らないが十五六の縞の着物に小倉の帶を貝の口に結んだ可愛らしい丁稚がエレベーターを動かしてゐますので面白く思ひました

タバコ漫談

安川久流美

プロ階級の男は大抵『バット』か『胡蝶』を吸ふ。然しよく兩方とも小賣店に品切れる。その爲めエアーシップかチェリーの色に誘惑される。だがマテ浪費だバットが瓶に入つてゐる所まで次から次と小賣店を覗く。すると漸く一軒見付かつた。茲で浪費を免れる。ヤレ助つた、僅かに四五錢とはいへ好きなシガーが吸えて十錢にお剩が貰へゐんだからその相違や大。

◇

『敷島』が一個十錢といふ安い時分に九錢の『大和』と七錢の『山櫻』があつた然しそれはもう無い。之では『敷島の大和心を人とはゞ……』の歌がタバコで綴れない。代りに毒々しい『昭和』の賣れ殘り。そこで鄙ふる

敷島の昭和心を人とはゞ
朝日匂はせラヂオきくなり

成程ラヂオといふ兩切があるけな この

頃。

◇

『カメリヤ』を見るミルーデサックを連想する男がゐた。一度び火に燃ゆれば××制限もなし。粉煙草の屑だからポロ〳〵兎の糞のやうに濕れる。蓋し尖端を行く卷煙草、椿ミツバメは相通ずるぜ呵々。

◇

『大和』のある頃の話、象六公園で『洒落舞會』を催しタバコはわざ〳〵『大和』を吸ふことにした、會場近く『日本武尊』の銅像があるので『ヤマトダケノムコト』の駄洒落れ！但し來客希望者へは十錢貰つてお剩り渡さず、支那の大將で我慢しておくんなさいと洒落る曰く『ソン一錢』！孫逸仙は生きてゐますまい。（實話）

深里橋竣功

福田山雨樓

道頓堀川にかゝつてゐる深里橋の架換は此程漸く竣功を告げた。一年有餘の歳月と何十萬圓かの工費とを喰つて靜かに眠つてゐる彼女は、湊町驛頭の唯一の近代風景である。

僕は恰度この深里橋を見下ろすこころに毎日背を向けてペンを握つてゐる。あの橋がこれまで粒々辛苦の工事場であつた時分の毎日を知つてゐるものには、振返つてその面目一新振りを眺める度に胸のすくやうな快感がこみ上げて來るのを覺える。

更に僕は恰度十五年前から同んなじ椅子で古かりし深里橋を見下ろしてゐたものであるが、こうも立派に改築された姿の前に昔日を振返つて見ると、交々の感慨で胸が一ぱいになつてくる。その中ではつきり思ひ浮べることは、『時のあわたゞしさ』である。しかし時のあわたゞしさは卽ち人生のあわたゞしさ、生活のあわたゞしさである。生活に疲れた人間の架換は出來ぬものか？

自嘲

出口雨町

『尋常六年を卒業した時、私は斷然、作家になる決心で女學校へ入つた。……だが女學校を出る頃には、私は文學志望をすつかり捨てゝゐた。こんな時代に生れて、文學などいふのんきなことをやつてゐるのが何かに對してすまないやうに思はれた。私は社會主義運動に入るつもりで堺眞柄氏をたよつて上京した。』と平林たい子は言つてゐる。私は自分を振り返つてみて實に恥かしく思つた。二十四にもなつて未だに川柳を弄あそんでゐるこの姿よ。レマルクと同年齡なる山雨樓氏がじつとしてゐられないと言はれた氣持以上のものを味はつた私　自らの無能さを嘲つてやる。

佐野學集を手にして想ひごと　（五、七、八）

夢其他

夢　尾崎海洋人

美しい女が雲の中から俺に來いと云ふそして仰向いて居る俺の口の中へ澤山な星の粒を投げ込んで呉れた其時から俺は泣く事を覺えた。

斷光

フト見れば四角だ
ジット見て居れば圓だ
遠くから眺めば三角だつた
其時俺は霧の樣な嬉しさを握つて居た。

夏

大陽の輪が微かに慄えて居る
玉虫色に狂ふ繪日傘
ハンマーに戲れる鐵粉
彼等は殺人的に囁く
キット惡魔の心臟が最後の努力を試みて居るのだ。……と

魔

息苦しい
心臟が破れそうだ
黄色い唾が無暗に出て來た
自分は其夜寢るのさえ恐ろしかつた。

超特急と納涼

三輪夏曉

去るムシ暑い夏の夕暮に納涼を目的として所謂一九三〇年の産んだ超特急へ乘つて見ました。道頓堀あたりのカフエーで生ぬるい電氣扇の洗禮を受け乍らクリームソーダをストローで吸上げたつて一圓や二圓の散財に成るんですからね。田舍をまるつきし知らない私なんかは田植姿を拜見したり牛や馬を追ひ使つてる農村の青年を見たりする事が面白かつたんで結局一鳥二石の効果が有つた譯ですスピードアップ、スピードアップたゞ萬ケ一の時にやあ生命を提供したら良いんですよ。

寂々

木山青砂郎

縋り付く樣に二人の手が延び出した、確つかり握り合つた四つの手からフルスピードの情血轟々として流れ出した。それは家族と賣笑婦、主人と雇人、そんな物に拘束され得ない全く二人切りの享楽天地だ。ふと涙に濡れたお互の頰に氣付く嬉の涙……純情の雫……愛の權化としての我に氣付く……それは哀しくも虐られてゐるものゝ理想境から來る淡い一夢だつた。

せめてもの夢に慰められた戀

その後の無花果

關本雅幽

朝起に青い無花果ぽつり落ち

其の秋は來た尙枝葉は小さな實を結びつゝ盛に伸び廣がつて行く。然しごう言ふ理か熟しかけては落ちて失ふのであるちようど其の頃我の年來の切望が叶つて鄕から子を貰つて來た。忽ち寂寞の扉を破つた陽氣さが裏庭にまで溢れ出て無花果の小枝を拂つて『むつぎ』が毎日翻るやうになつた愈邪魔物にされた無花果はたう〳〵其の味も見せずに葉と共にぽつり〳〵と落ちて庭の片隅に靜に冬の眠りに入つてしまつた頃ふと子供は腸を害ねて病みついた。

我々は且つて經驗せざる苦慮と百日近くも戰つて翌年二月堂島川の流れもゆるやかな小春日に凱歌を上げて退院した其

の喜びは彼の靜な冬眠の無花果をも根元から除つてしまつた。

我々の死力を盡しての手當もひた押しに押しすくめられ僅か一週間後の朝まだきに

誠にお氣の毒さまと醫者は去り
うまんまの夢消え去つて窓しらみ

じめ〳〵と降る五月雨を念佛三昧の我々夫婦は番茶を啜つては默念と此の狹い裏庭に空しき眼を止めて居る。

雜草は青々と潤ふて居るのに彼の無花果は再び芽を出さない。それのみか『かたつむり』一族の宿となつて居る。

香煙よ戲れ父と母ときり
外を覗けば邪魔な物干竿があり
佛あり番茶に腹のふくれたる

（五、六、二五、）

句をふりかへり見る

森石竹

僕は句が進むにつれて、句をふりかへるのに面白味を感じる。そうして自分のグループの人達の丁度よい研究句になる事である。

逢ふてやつてください坊や歩きます
ゆるされぬ妻へ子供がはうてゆく
子の末がどうなるものか夫婦きり
夜中ふとすみをおさへる子の布團
起こすまいとして憎らしい蚊を逃がし
赤ちやんやそのはずかしさいつ覺え
包を解いて親を味はふ
忘れた頃に子が眞似をする
乳のはる夢から醒めて子をさがす
片乳房はなしてのみなれとんぼ

今の句から見ると、川柳人情味の中に滿足して居た事が判る。今でも思ふ、句の調子や、何度讀んでも丸る味のあることなどは、初心の方々で無暗に新しがる人はどこか古いやうな感じがしても、一度かうした中に自分と云ふものを見出だされたなら、隨分新しい良い句を吐かれる事と思はれます。僕は斯樣な眞實の涙と愛に最後の一句を殘さんと努力をしてゐるのです。で只今の句の進み方が又元の道に戻る事が出來れば、充分に自心のある句として、殘し得ようかと思はれる。

（五、六、二五、夜）

簾の影から

加藤文醉

本月買ひ集めた珍本の中に『滑稽三太郎ばなし』がある。作者は鉢亭魯文作で一雲齋國久の畫で安政三年版のものゝある。この本に就ては軟文學研究誌一ノ三に秋庭氏が詳細に述べられてゐるから、内容の一端を述べてみよう。表紙題は『八王子三太郎ばゝア東京めぐり』である。一九作の『東海道膝栗毛』を眞似た作品である。江戸が東京と改名されてからの膝栗毛式のものは、二三持つてゐるのであるが、その中でも拙劣な内容をもつたと思つた。この『滑稽三太郎ばなし』は八王子在炭燒村の老婆と、同じくその甥の三太郎とが彌次と喜多の役をしてゐる。田舍者の兩人がはる〴〵江戸見物に來て膝栗毛式に種々滑稽を演じるので三太郎よりも老婆の方が活動してゐる。兩人の道連として越後と甲州から出てきた見物客と江戸見物の案内人の久三といふ男とがついてゐる。

○

『冠附化粧紙』これは文政九年十二月の版で紙數は七十四枚浪花民邑雜山の撰である。表紙は梅と竹の畫がある。筆は

不明。この本とよく似たもので『はなめがね』『みきのくち』を持つてゐる。撰者はいづれも違つてゐる。この化粧紙に口畫とも云ふべき畫と句が載せてある。畫は鐘成の印が見える。句主は不明である。

東による笠
　勿体ない　角錢　ひらふ　陸道者
西による笠
　行儀ようこしかけているおらんだ人
南による笠
　こゝかいナア八鬼山すごひ母むすめ
北による笠
　一番に笠のきはだつ加賀の家士

金貨の光り

大久保大夢子

大阪驛の賣子が俳誌『向人』を買つて居る。こんな解りきつた事さへ珍らしがらねばならぬ程俳人は金貨の光りに背いて居る。金貨の光りに育ぐまれない文明があらうか。藝術があらうか。オット人事ではない。お多分に洩れない柳誌ではなからうか。

○

落語をきく。薄馬鹿野郎の對照にはウンザリする。藝妓をよぶ。型の通り奥行のない哄笑だ。カフエーに行く。薄つぺらな笑のの斷片だ。モット何かないものかなア

川柳にも——

○

『牧』といふ字を書く『ノギヘンに文』か、何度も〳〵書く少々あやしくなつて來た。ツクリにル又を書いてみる。モウわけがわからん事になつてしまつた。近頃推敲したつもりの句が一つも出ないで十句に滿たすためのお添物の句が一つ二つ活字になつて居る。何か足りないものがあるのかなア

運命

大阪　河野双車

社員食堂の入口に大きな木蓮の木が植てあるそして其の木には四方から丸太の支へがしてある。俄然嵐が訪れた大木を支へる可く運命づけられてる丸太はヘコヘコになつて大木を支へねはならなかつた。何日かして大嵐は去つたが風雨にさらされながら大木を支へた丸太は續いて訪れた何時晴れ可くもない陰鬱な梅雨にそこここから腐蝕して取捨てられるのも時日の問題にせまつた。

木蓮は相變らず我がもの顔に大きな花をつけてゐる……。（昭和五、七、三）

木馬に乘る

平井蒼太

限りない幻滅の悲哀と、憂鬱を極めた肉體の疲勞と、而も果て知らぬ悔に責めさいなまれて、滄浪として女の家から飛び出した私に、午前十時の六月の陽は、情け容謝もなく雨霰と鋭い鋒先を向けて來る。

東武鐵道に運ばれて淺草驛に吐き出された私は、完全に煙草の脂に溶かされ盡した胃臭に包まれてゐた。何う仕やうも

ない心の軌道は　恐ろしい地響を立てゝ彷徨ひ續けてゐる。慰ひを求める魂の觸手は、緑の樹陰清冽な水の色、深々としたた寢臺にも例へらるゝ母性の懐を探がし呼ぶのではあつたけれど、東京淺草附近の雜然としたバラックの塗料の臭氣はさうした私の欲望をすげなく拒否して行く許りだつた。

仲見世の裏通りを、影薄く歩を運ぶ私には觀音菩薩の御堂にも用の無い身である。

瓢簞池を廻るベンチの上には、無意味に空間を凝視てゐる浮浪人の群が、汗ばむだ着衣に蠅を遊ばせてゐる。見るもの私の心を更に強く責め立てないものはない

衝いて出る深い溜息と耳鳴りの私を包んで、何處からか聞きなれた樂の音が流れて來た。私の足は樂の音に連られて、歩を合はし始めてゐる。流れ流れて水族館カジノ、フォリイの前に立つた私は、軒を並べてゐる昆虫館の剝落ちたバラックの壁の内側から、其ジンタの音が流れ出てゐることを發見した。

蜻蛉の眼の玉のやうに空虛な二つの入口の奥に、木馬と自動車とが備へられたメリイ・ゴウ・ラウンドが　ごろ〳〵すじさまい響を立てゝ、恰度眞中に高く聳えて設けられた五人のジンタの奏でる樂の音に合はせて廻轉してゐる。

何んと昔懐しい古びた音樂だ。何んと素晴らしい郷愁を呼び起すことだ。子供心への復歸、童心の止め度もない甘い追憶。五分間金五錢のテケツが、私の疲れた心を慰めて呉ゝるのだ。ふら〳〵と圓板の上に出た私は、五六人の幼兒に交つて恰も夫れらの餓飢大將であるかのやうに、栗色に塗られた木馬の脊に跨つた。館内に設けられたベンチに憩ふ人々の、呆氣に取られた目を脊に浴び乍ら、やがてメリイ・ゴウ・ラウンドは廻轉を始めた。

ガッタンゴットン木馬は踊りを續けて廻轉する。頭の上からジンタの樂は『天然の美』を繰り返し奏でる。木馬の脊に跨つて、甘い郷愁とほがらかな童心はしきりに快よい眠りを誘ふのであつた。

七回目が來て時、私は美しいテケツの娘に『ここは御國の何百里』をやつて呉れることを望んだ。ジンタに通じられた私の子供らしい望みは直ぐ叶へられて、やがて『赤い夕陽に照らされて』の樂の音は始められた。私は七八歳の甘い追憶の淵に轉げ込みながら、泌々大人の假面を嘆いて、心から涙に濡れそぼれた。―

私は今、木馬の爲に赤むけた傷を土産に、生活苦の待つてゐる大阪へ歸へらうとしてゐる。今日迄の東京への憧れは、玉の井の柳暗花明の巷があつたが爲であるけれど、明日からの私の望みは、更に再び木馬の脊を戀ふることに依つて始まるのだ。何時の日にかは、山高帽にフロックコート洋傘・小脇に挾んで口髭を撫しつゝ木馬に乘つて、大人共の假面を引剝いでやり度い。―六、六―

よいこまけ

まんはつたん

御堂筋の地下鐵工事が始まつた。四五間もある鐵柱をコーン〳〵と大地へ打ち込んでゆくあの男性的な音響と力とには全く魅せられてしまふ。

私にフト女土工達がだらしない唄に合して綱を引く『よいこまけ』と對象して見てこれが一九三〇年の地上に於ける同一作業であるかと寧ろ恐ろしくなつた兎に角よいこまけ派の柳人は御堂筋地下鐵工事を一度見物していらつしやい。

蚊

辰巳籬楓

都會の蚊は田舍の蚊よりもすばしこいことは一概に云ひ得ない。だが大阪の蚊は非常にすばしこい。それはあの商人のいたちに似たすばしこさに似て居る。おとなしいやうで、それで居てなか〳〵油斷は出來ない。大阪の蚊は羽音も立てないこつそりとしのび脚である。明るみを堂々とやつてくるのではない。すこぶる陰險である。すばしこく地をはふやうに飛んで來て、えさにありつくや、痛きまじにあの針を立てゝ人の血をむさぼり吸ふそして飛びにげることの早いこと、とても手におへない。

四五年前琵琶湖の北岸で一週間程夏の日を過ごした事があつたが、こゝの蚊もやはり大阪の蚊に似て居た。同じ大阪と云つても全然蚊の苦しみを知らない場所は別として場末の蚊になると正に猛威をたくましくしてゐる。

大和は山に圍まれて居る。大和盆地に居る蚊は大體よく似た性を持つて居て。すこぶるのんびりして居る。大膽と云へば大膽でもあるが、ぼおつとして居る。顔や耳元へ悠々と飛んで來て亡例的なうなりを立てる萬葉人の血を吸つた蚊の羽音も正にかく〳〵であつたらう。その蚊の子孫に萬葉人の子孫である大和人は血を吸はせて居るのである。

藪蚊になると頗ぶる男性的である。その動作も悠揚せまらない。藪の露に滿足出來ない輩は人の血を吸ひに來る。若しそれ脚にでも止るものなら。百發百中掌の彈丸は命中する手を離すと蚊の死體は、ほろりと落ちて脚と掌に蚊の鱗粉が黑くあざやかに殘つてゐる。落ちた蚊は未だ脚を動かしてゐる。

蚊帳の中に横になつて、外で飛び狂ふ蚊のうなりを聞く事は此の上ない夏の情趣をそゝり立てる。暗の中で使ふ團扇の音と蚊のうなりは日本の夏の詩趣をぞれだけゆたかにすることか、蚊やり火の暗に浮く赤さ、藥屋の軒を立ちなやむ蚊やりの煙は又なくなつかしいものである。水鄕の蚊のうなりは厩神經を痛きまでしびきするが、山國の蚊の羽音には音樂的なリズムがひそんで居る。秋の半頃に飛んで來る蚊の羽音は正に哀卑の曲と云ふべきである。（五、六、二九）

各地柳壇

本社七月例會

七月六日　於　端之坊

氷業新聞社寄贈の氷柱に一沫の涼味を覺へつゝ作句に耽つた。席上路郎主幹は「山宣の墓參」と「一樂書房の樂燒」について語られました。句會後樂燒に筆をそめる人々もあり、里十九氏寄贈のコーヒに喉をうるほし十時半すぎ趣味の一夜を散じました。（公二記）

參會者　路郎、海洋人、綠雨、憲太、愚陀、雨町、沐天、柳甫、翠峰、夏曉、一杉、亂耽、ひろし、かほる、山茶花、山雨樓、虚白、吉郎、串二、二南、さだを、康郎、英郎、里十九、繁坊、泰子、鶴峰、翠夢、圓角、貴山、新水、葉平、波計、あきら、公二

兼題　肉　路郎選

並肉でよいと下宿は云ひそへる　貴山
健かに吾子の肉体夏にいる　葉平
肉の香に鼻へハンカチあてゝゐる　柳甫
シガナルを見ながら肉を食べに行く　海洋人
掌の堅さに人の逆らはず　一杉
豚肉へ南京町の日が暮れる　憲太
稼ぎ貯めれば肉は笑ひかけ　さだを
肉までも啖ふ養父へ育ち行く　公二
たまに買ふ肉が奥齒に引かゝり　山雨樓
喜びの席なる父の肉の落ち　圓角
肉慾の奴隷となりて世に叛き　山茶花
三味線の彈ける女と肉をたき　かほる
人と牛との市價の相違よ　亂耽
煮へつまる肉に盃持ちかへて　新水
肉さげて呑せとばかり友がくる　吉郎
腐肉堆くして金の音聞ゆ　愚陀
ちと肉を食へと醫者から云はれ　雨町
いゝ体裸になればなでられる　同
肉にせよかしわにせよともめてる　観月
すき燒のふたりへ夕刊投げ込まれ　同
觸れ合ふた肉と肉との恐ろしく　串二
肉つぼへ爪跡殘す刑事室　同
海水着肉体そのまゝにぬれてゐる　翠夢
さもしくは肉の奴隷となりにけり　同
張りこんだつもりの肉が齒にこたへ　翠峰
留守事にロースと極める若夫婦　同
（人）五十目の客を大事にする肉屋　憲太
（地）人肉の市場に朝のきりふかし　葉平
（天）まただかにはの子を抱いて夏　同
（軸）そろばんで片付てる靈と肉　路郎
（軸）いつもきの肉と葱との仲であれ　同

席題　贈り物　かほる選

氣安さは古新聞に包んでき　鶴峰
贈り物割前と云ふ名がならび　波計
贈り物つまらぬ一句書き添へて　新水
贈り物氷殘して歸へるなり　二南
女三人に贈り物値をふまれ　愚陀
あれこれと年に合せて贈り物　串二
近頃の娘に困る贈り物　亂耽
贈り物眞夏を届けられるなり　一杉
贈り物まで判じやうとする　同
贈り物しばし話の中に置き　柳甫
贈り物簞笥を開ける音がする　同
（人）贈り物當てゝ御覽とほどかせず　山茶花
（地）贈り物にきて子供を抱いて見る　里十九
（天）贈り物主人は永く支那に居る　亂耽
（軸）贈り物渡しそびれて橋へ來る　かほる

席題　南洋　ひろし選

ポスターに金のなる木がある南洋　憲太
南洋の土産は半分腐りかけ　翠峰
南洋の空は明るいものに見え　圓角
（佳）南洋で受取る銀貨光りすぎ　亂耽
サービスを改善したい助役も居　新水

鐵道へはつきり裸みせてゐる　里十九
鐵道はメランコリーな線となり　公二
見送つた汽車へレールが伸びて行く　山茶花
鐵道に沿ふて可憐な月見草　雨町
鐵道に誤解を避けてゐる女　二南
（佳）黛略で伸びた鐵道山を抜け　波計
（軸）鐵道のある風景と谷讓次　亂耽

席題　水枕　互選

水枕ひたひを誰かさはるなり　柳甫
水枕朝を素氣なう放つとかれ　沐天
水枕泣く兒へすかし〳〵させ　吉朗
親類がみんなよつてる水枕　公二
水枕ふんでなほつたらしい顔　貴山
昨夜より二度も少ない水枕　新水
水枕武骨な父の手でしかへ　波計
水枕も共に燒きすてぬ　葉平
水枕寢返り打てば音がする　山茶花
水枕さかさに干してうらゝかさ　同
水枕蚯蚓が鳴いてゐると云ふ　二南
水枕隣りの聲が尖つてゐ　同
水枕まぶたがあつくなつてくる　さだを
氷割る音もさびしい水枕　同

席題　横顔　互選

默つてゐても好きな横顔　一杉
横顔へ愛想を云へば限りなし　二南
知らず居る女の耳朶の可愛さよ　繁坊
横顔に卷紙の端たれてゆき　かほる
算盤の父の横顔ふくれてゐ　沐天
横顔に視線感じて露路を拔け　山茶花
出合ひがしらに馬の横顔　公二
降りてから見た横顔の氣にかゝり　吉朗
横顔が彼女に似てるショウインド　柳甫
すれてゐる舞妓横顔覗かれる　山茶花
ビルデンゲの横顔の泣き笑ひ　亂耽
麻雀にわが横顔を忘れてゐ　同

川柳雜誌社神戸支部

川柳梅雨の會（大阪）

六月十九日夕　於　茶寮アムビリコ

夏の句會が始まる。肌に汗しながら熱い番茶をすゝる。久し振りの會合。第十四回例會。出席者一、三霞、鬼笑太、凡骨、耕甫、明華、亂耽、卯生、南耕、睡花、翠石、九葉、東洋鬼、嶺月、紋太、清公子、華水、二南、市公、（楊井二南報）

席題　素通り　互選

素通りが出來て嬉しい二人仲　明華
素通りの二三軒も來て振り返り　三霞
素通りをする氣煙草を溝へ棄て　二南
素通りは病氣の妻の藥とり　市公
蓄音機やつてゐるな素通りし　華水
素通りを何處に居たのか知つてゐる　東洋鬼
襟などを合はせ素通りするつもり　卯生
素通りを責める女の美しさ　同
素通りの頭の上の萬國旗　亂耽
ゴールデンバットとそして素通り　同
素通りがつかまつてゐる曲り角　凡骨
素通りに今日は女の連れがあり　同
もう未練なく素通りをさせてゐる　同

席題　全權　亂耽　選

評判が惡く全權詩が出來る　東洋鬼
全權の汽車がきつちり出てしまひ　卯生
全權へ旗なびいてるなびいてる　華水
全權へ聲待ち受けてゐるラヂオ　三霞
全權の顔に似合はぬ智慧を持ち　同
全權の胡坐も何時かうつされる　九葉
全權へ日本晴が續いてゐ　同
號外に全權の顔活きてゐる　二南
日本の風を全權吸ひに立ち　同
（人）全權の騷ぎをよそに寞つてゐる　凡骨
（地）全權だ日本人の歡聲だ　清公子
（天）その話さげて全權酒のこと　東洋鬼
（軸）全權を迎へる街の失業者　亂耽

席題　城　東洋鬼選

城の石うちの疊にたとへられ　市公
逃げて來て城には遠いとこに住み　睡花
パテレンを奉じた城に草がのび　亂耽
灰色の街を悲しむ城の跡　清公子
天主閣昔の空の色でなし　九葉
城下町緋の提灯が搖れるなり　二南
名君の城に綠が茂つてゐ　同
城の松城の廣さを取圍み　紋太
城の跡ちぎれ〳〵に見て廻り　同
（人）落書を許して天主閣の鳩　睡花
（地）城などを見上げ急がぬ乘馬隊　嶺月
（天）城が見え出してタクシー曲ゐな　亂耽
（軸）漢文の素讀へ今朝も城が晴れ　東洋鬼

席題　持參金　互選

持參金世間の噂知つてゐる　凡骨
ほれられて持參金まで付いてくる　明華
あの家も嫁の里から建たそな　清公子
纏つた話を聞いた持參金　紋太
持參金そつとそのまゝ共稼ぎ　市公
持參金思ひの外によく動き　二南
持參金それが孝なら參ります　鬼笑太

針差しの向きも淋しい持參金　九葉
持參金夫のおらぬ晝になれ　同
冗談に出來なくなつた持參金　睡花
三角の家を建てたる持參金　東洋鬼
持參金附きを貰つた好い男　同

兼題　雨　紋太選

シグナル燈火色に雨が降る　清公子
露地の雨女ひとりのもの思ひ　凡骨
堀り下げた工事に今日も雨が降り　華水
梅雨の雨申譯ほど降つてやみ　翠石
木賃宿亭主も困る雨になり　南耕
づぶ濡れになつて船頭苦を敷き　同
(人)雨などにかゝはつてゐぬ砂がを　卯生
(地)屋臺店そのまゝ露地の雨に暮れ　東洋鬼
(天)叱られた子供へ雨が降つてゐる　九葉
(軸)煙草好きこの大雨の椽へ立ち　紋太

川柳雜誌社　御旅支部例會（大阪）

七月六日　於宇治花屋敷　櫻井圓角報

兼題　獨　學　路　耶　選

獨學が勇を奮つてプロークン　路烏
獨學のひよんな所であらを見せ　多耶
獨學の行末暗しさはあれど　同
花見にゆくを机にかじり付いてきく　圓角
獨學へ友は上京知らせて來　同
獨學へ道頓堀の明るすぎ　翠夢
うらなりと迄呼ばれたる獨學者　同
獨學の故郷を質せば山の人　靈壺
講義錄萬年床で讀んでゐる　同
檢定をパスして天井低く見え　習々
獨學へ養子の口をすゝめてる　同
獨學に木石ならぬなやみなり　同
(人)獨學のお里も知れて素直なり　路烏
(人)獨學者辭書程知つたとこもおり　多耶
(人)獨學でかち得し地位の淋しやさ　翠夢
(地)金儲けの味に獨學フイになり　圓角
(地)獨學の邪魔とは女心得ず　習々
(天)獨學は夫嫁喧嘩を聞いて寢る　靈壺
(軸)獨學へ辭書を與えたが叔父の愛　路耶

兼題　背　廣　路　耶　選

就職も出來ず親から背廣料　路烏
初めての背廣ネクタイ貰ひに來　習々
懸命に戀をしてゐる背廣なり　靈壺
賀川服月賦の背廣笑つてる　同
背廣きて未だ間もないに髯のこと　多耶
この背廣幾年きればよいのやら　同
その背廣愛人月賦とは知らず　翠夢
日曜日背廣を着ない安樂さ　同
舊式の背廣に正直痩せてゐる　圓角
背廣こそ拵えたものゝ童貞だ　同
派手な背廣で借金して廻り　同
(人)よれ〳〵の背廣無産の闘士なり　翠夢
(地)惜しみなく月賦の背廣酒を吸ふ　習々
(天)楚々として背廣の影が蹈んでる　路烏
(軸)宿替に背廣で來たを手傳し　路耶
(同)岐阜提灯の下で背廣を脱がされ　同

席題　弱　點　路　耶　選

弱點をつかんだ情婦の强いこと　翠夢
弱點も見せず女はまくしたて　回
弱點でそこが貴方のいゝところ　圓角
弱點へ電話の聲は荒うなり　同
檢定をパスして天井低く見え　習々
獨學へ養子の口をすゝめてる　同
(人)本當の弱點はまだ見せない氣　習々
(地)弱點を掴られてかはしやぎ出し　路烏
(天)弱點でとう〳〵五圓とられたり　圓角
(軸)弱點にあはは〳〵と笑つき　路耶
(同)弱點を握られて居て二號にし　同
(同)弱點があるか一ト足さきに出る　同

席題　宇　治　路　耶　選

生娘に山宣の墓敎へられ　翠夢
新絲を外してならぬ宇治の里　習々
(秀)山宣をとむらう宇治の降んでる　圓角
(同)花屋敷酒汲む前をリユクサック　路烏
(軸)手を出せば屆きそうなり興聖寺　路耶
(軸)晴好雨奇の宇治の山宣　同

川柳雜誌社則府支部湯苔吟社

朝田新水氏歡迎句會（別府）

六月廿日　別府　木村晃卓報

席題　水、枇杷　互　選

枇杷の木にせみも鳴いてた夏でした　對島
初夏の味をとつくり枇杷に知り　三猿堂
初夏の空枇杷の色にも氣づかれる　同
膝ぼしへ一つころげた枇杷の種　新水
枇杷喰べたあとの机の上を拭く　同
水の味うまいものとは杓で呑み　同
木賃宿水だけ清い井戸があり　同
故郷の水の流をさゝやかば　晃卓
出盛りの枇杷が食後の膳に添ひ　同
木に藷じて又格別の枇杷の味　同

席題　朝　新　水　選

早起きの朝へ豆腐屋吹いて來る　三猿堂
お早ようと只それだけで朝はすみ　對島

朝はよしへちまのつるも伸びてゐる　晃　卓
朝の陽へ蒲團をかむる　公　休　日　同
朝の氣が肌へゆるるゝよ冷水摩擦　同
（軸）つまらぬ給仕と思へど朝を出る　新　水

川柳雑誌社平野支部

路郎先生歡迎句會（大阪）

六月廿九日　於　平野魚伊食堂

熊本黃蛾報

路郎選

一人旅　草履だこ言ふ人もなし一人旅　助六
町近し　只歩むのみ一人旅　同
一人旅　もう故郷も姉の頃　櫻果
降りて來た札所見返る一人旅　同
一人旅よう　似た犬がついて來る　黃蛾
一人旅淋しいとこに一二軒　黃蛾
一人旅彼れはどんなにしてるやら　路郎
（軸）妻のこと子のこと宿の夜の長し　同
一人旅財布が輕ふなるにつけ　路郎
一人旅もうあの山も暮れてゐる　同
一人旅我れもさびしき男なり　同

現在　互選

現在の世相を怨みペンチへ寢　櫻果
久し振り逢へば世帶をしてるなり　公二
現在は金をたよりに生きてゐる　同
手のつけ樣もなし現在の已　助六
昔も今も心に變りはないよ君　黃蛾
借りる事ばかり現在考へる　路郎
現在の彼はいいたい事を云ひ　同
もう女などは忘れて子を育て　同
現在に滿足をして二三杯　同

川柳雑誌社加古川支部

耽柳會句會（兵庫）

六月二十日　水田篤男報

大臣

大臣の竹馬の友は鍬を持ち　洛陽
大臣の權兵衛踊り堂にいり　同
大臣になればゆつくり歩くなり　光穗
大臣へすかさず記者はマチをすり　同
新聞を見ながら大臣飯を食ひ　篤男
大臣の二字で故郷を喜ばせ　みや子
大臣になると忘れず戻つて來　泰山

親し

其親しみ指を差されるやうになり　みや子
二十年親しさ更に哀へず　泰山
親しみも持てず別れて行くのがら　同
候では親しい心書きにくし　光穗
親しさも不仲も子供らしくあり　洛陽
妹を吳れろやろうとのみ交し　篤男
日曜の朝へふとんをめくりにき　同

籐椅子

籐椅子のマンマ末子はさゝげられ　篤男
籐椅子でれんれころりが遠くなり　同
籐椅子は去年の塲所で季節になり　光穗
水藥が變り籐椅子にやせてゐる　同
籐椅子をこかして子等は汽車ごっこ　洛陽
籐椅子へかけてさせるを持て餘し　同
籐椅子屋餘り賣れそうにもみへず　みや子
籐椅子の置き所なし二階借り　泰山
籐椅子の主人失業らしくなく　同

川柳雑誌社天王寺支部

七月例會（大阪）

七月十日　於　内藤製作所　須崎豆秋報

兼題　眞實　綠雨選

眞實を賣るにも馴れて絹衣裳　三汀
眞實がよつぽど後でわかつて來　豆秋
眞實のとゞく時分に金は無し　柳精
眞實の話は矢張り金のこと　柳影
（佳）眞實の話へ酌婦横を向き　同
（佳）內情をすつかぶつて智惠を借り　櫻果
（佳）眞實へ女給は歌を唄ふなり　公二
（軸）眞實に云ふても金は貸しねず　綠雨
（同）眞實にすれば男から笑ひかけ　同

席題　命日　綠雨選

命日にわざ〳〵歸る律義者　柳精
團子にせうかおはぎにせうか命日　櫻果
和尙が來て命日を思ひ出し　公二
友達の命日俺は生きて居る　豆秋
命日を思ひ出させた丸い月　同
命日へ鳥子は醉ふて戻るなり　柳影
命日も忘れる店のはやりかた　柳影
（軸）命日に行くと孫の話ばかり　綠雨

兼題　砂　互選

樹の影で眞晝の鶏は砂を浴び　公二
砂ほこり立てゝ行軍黑い顏　柳精
砂道に足形深う殘して來　綠雨
泣かされて砂を掴んで追ひかける　櫻果
砂つけて共に遊んでゐた二人　同
砂濱になつて女は泣いて見せ　三汀

川柳雑誌社

糸屋町新人句會（大阪）

六月六日夜　於　河村喫茶店　枝松規堂報

席題　浴衣　互選

片肌をぬいで浴衣のよくしやべり　規堂
形見の浴衣父に似る　流星
行水の浴衣をつけてほつとする　由紀子
スピートの旅東京へ浴衣がけ　讃昌
スマートな浴衣にぼんぼ飛んでゐる　正二
浴衣短かく待つてゐるだらう　舟々

席題　夫婦　選

名ばかりの夫婦へ子供産れて來　流星
道樂も夫婦となれば變つて來　正二
老夫婦若きころはと力みだし　三九
遊廓を夫婦で歩く田舍者　由紀子
夫婦して甘ふ子供を育て上げ　正博
隣りから夫婦揃ふて抱きに來る　舟々
嵐れる夜を火鉢に座る老夫婦　同
心ブラに妻の默殺されて行く　規堂

席題　鹽　選

鹽ふつてもうさや豆に出來上り　正二
鹽からい味噌汁寺でのまされる　三九
鹽かげん上手に今朝の長なすび　由紀子
鹽を撒くばかり土俵のはかどらず　舟々
鹽のはら〳〵悲しき家に入る　同

川柳夏の陣（神戸）

七月十日　於アムビリコ茶寮　日野華水報

暑さに負けず夏の陣を張る。

市場　互選

素通りへ市場の聲がつゝかゝり　敕太
市場ふと今日の賣上げのぞいて見　華水
市場から歸る風呂敷蠅がつき　東洋鬼
市場から女の智惠で買つてくる　凡骨
葱一把市場へ行くにたのまれる　同
ミシン踏む足か市場へさそはれる　市公
市場から工場の笛にいそがされ　同

敵將　二南　選

感激のシーンに敵の將とゐる　桃水
敵將の信ぜられない計報來る　不然
敵將の歡迎國は平和なり　華水
挨拶の握手敵將面憎し　嶺月
敵將の作法正しいのを怖れ　卯生
挨拶の時に敵將見つめられ　紋太
（佳）敵將の辯面白くさゝやかれ　同

夜道　紋太　選

古郷の勝手知つたる夜道ふみ　耕甫
夜の道怪奇めいたる前の人　鬼笑太
兩の手が帶を握つてゐる夜道　卯生
宴會がはてゝ夜道の風を聞き　華水
西瓜番夜道の人に火を借られ　清公子
毎晩の夜道に月が圓うなり　凡骨
まだ人が通る夜道で時計を見　嶺月
（人）もうあんな奴はと歸る夜道なり　嶺月
（地）馴れた夜道を自轉車で金を持ち　二南
（天）本當は夜道を歸る腹でゐる　紋太
（軸）夜道するこの頃家の用が殖え　明眸

卯生　選

何がなしその明眸にひきづられ　梅雅
明眸を信じて派手な海水着　不然
明眸にスプンの動き見つめられ　山都
明眸へ男の息がなまぐさし　二南
明眸へ男あり男等をうるさがり　嶺月
明眸の挨拶だけの舞臺へ出　同
澄み切つた眸に今日も又言ひまぎれ　東洋鬼
明眸の聞けば淋しき過去を持ち　同

選

均一　互

均一で買つたを貰ふ故郷の姪　東洋鬼
均一の端布に妻のあさましさ　市公

川柳雜誌社 梅田支部句會（大阪）

水谷鮎美報

兼題　花道　かほる　選

花道で大見得切つて中車入る　鳴玉
花道へ出るなり蝶六笑はれる　夕鐘
花道でお染の舟がはかどらず　同
花道を駕が通つて鐘の音　觀月
花道で小判を分ける惡二人　同
花道で役者の顏を長く見る　卜居
七三へ下郎は科白すてゝゆき　鮎美
花道の雪駄は派手な音になり　同
花道の巾一ぱいに醉ふて入り　同
（人）花道に居ならぶ侍女も晴やかに　卜居
（地）花道で後見のつくいゝ踊り　夕鐘
（天）花道へきて一層の拍手なり　卜居
（軸）花道を久保田清がこさへさせ　かほる

兼題　畑　新水　選

出養生朝の畑にきてしまひ　鳴玉
畑握る〳〵手にまめができ　鳴玉
菜畑の今日も戀歌で暮れてゆき　夕鐘
畑だけ昔のまゝの姿なり　里十九
夕刊をもつて畑の虫を取り　觀月
（佳）鍬をぐつさりいれた芋畑　卜居
（佳）畑の父へ晝を知らせる　鳴玉
（佳）今はもう畑に父の姿なし　里十九
（軸）戸をたてゝ皆んな畑へ行つてす　新水

兼題　犬　かほる　選

家出する夜更けの道に犬がつき　鮎美
強いのへ遠く廻つてテリヤ行く　夕鐘
犬を叱つて座敷へ通す　親月
配達夫犬の話をして歩き　同
(人)犬呼べば呼ばれた犬がやつくる　鮎美
(地)元旦の犬もうれしいのか走り　親月
(天)うらゝかさ笑へば犬がほへゐる　鮎美
(軸)とてもよい姿で犬は走るなり　かほる

川柳雑誌社平野支部

黄蛾遭難一週年句會（大阪）

六月廿六日　於藤岡櫻果居　熊本黄蛾報

遭難　黄蛾　選

無事なればこそ遭難も思い出し　春波
土に轍に遭難の血汐　櫻果
遭難のあの日ジメジメ降つてゐた　豆秋
遭難の中に名士が交じつてゐ　同
遭難の意識と共に痛み出し　平次
(軸)不安な中に保險會社の暇　黄蛾
あの時はお守りさんも折れてゐた　同

席題　乳房　豆秋　選

七人目いだない乳をあてがわれ　雪城
乳もみにかれと隣りすゝめに來　櫻果
乳房も恥かし頃の十五六　春波
又出來る乳房を姑みのがさず　公二
行水の乳房はつきり見て通り　助六
クッキリと帶に乳房が乘つてゐる　黄蛾
(軸)鮮人の女丸い乳房出し　豆秋

席題　高下駄　公二　選

高下駄で來ればよかつた道普請　櫻果
集金に高下駄履いて女將が來　豆秋
無雑作に高下駄履いて何處へ行く　黄蛾
(軸)高下駄とガーバシユースの舗道の夜　公二

看病　櫻果　選

看病はすゝまぬ膳に向いてゐる　公二
夜が明けてから看病は眠むくなり　豆秋
看病の代つてほしい日もあつて　黄蛾
(軸)看病の代つて祈るお區目　櫻果

賣上げ　助六　選

其妻にして賣上げもふへてゆく　春波
賣上げの銅貨詠歌へやつてゐる　公二
(軸)賣上げの中に見付けた支那の錢　助六

行水　互　選

恥しいまゝに行水濟んでゆき　春波
母の行水へ稲妻凄し　助六
行水へチヤンとビールが冷てゐる　豆秋
戀を知らずに行水を派手に　黄蛾
熱い湯を入れる行水ふちにのり　公二

緣雨鶴峰對座吟（大阪）

六月十六日　福田鶴峯報

浴衣、獨樂

鏡臺にうつる浴衣が嬉しい夜　緣雨
ビルザンゲの蔭に浴衣の二人づれ　同
艶つぽい色を浴衣の下に見せ　鶴峯
父の氣嫌獨樂がよく廻り　緣雨
占ないでもなし獨樂はこつち向く　同
泣きやまぬ子に獨樂を廻す父よ　鶴峯

松竹座の夕（大阪）

六月三十日　水谷鮎美報

夏みかん　鳴玉
夏みかん嫁もいつしよになつて食べ　同
夏みかんみつともないのが賣れ　鮎美
話とぎれて夏みかんの味　同
うちとけて團扇片手の夏みかん　同
夏みかん美しくみる許嫁　同
夏みかんすつぱし金魚浮いてゐる　同
眠むたき女夏みかんに眼をさまし　同

ふたりで歩くのは久しぶりです、エロの道ぶらを何處へ……ビールの泡です。

南海至誠川柳會（大阪）

六月九日夜　於天下茶屋集會所

竹内多聞報

席題　急所　互　選

このところ急所なのだと敎へられ　呑風
王手飛車急所を指したつもりなり　格子樓
抗辯の急所をさゝれ鈍るなり　萬年青
急所丈け外して社長酒にする　青砂郎
出戻りを母は急所にふれずにゐ　朝陽
さしづめは急所を避ける猪口をし　黑天子
決心は急所をなでゝゐるばかり　さだを
折角の急所自殺しやうとする　同
ふれゝばふれる程女氣が弱り　五輪
急所とは知らずに云つて左遷され　路郎
呑ます丈け呑まし急所へふれさせず　同
やりてとは急所々々へ鼻ぐすり　同

席題　吹殼　黑天子　選

吹殼をモダンガールは踏んで行き　さだを
しんれこの吹殼ばかりへ夜は明り　海耳
惜しそうに捨てゝ飛びのる軌道線　天郎

吹殼になつて寄席の幕は閉ぢ　萬　兩
永座してフト吹殼に恐縮し　萬年青
吹殼あつめて仲居よく喋舌り　多　聞
吹殼を撰り〳〵妻の愚痴になり　青砂郎
（人）吹殼の踏み蹂られる運命に　同
（地）吹殼を投げて友達呼び戻し　朝　陽
（天）合ッ點の吹殼溝のさきへとび　多　聞
（軸）顔をば寄せて吹殼積まれたり　黒天子

席題　ほーげた　互　選

裏長屋ほーげた吐くなと喧嘩聲　一　壺
親方の留守はほーげた叩いてゐ　萬　兩
そんなと言ふでは無いと母は撫で　海　耳
令日も來てほーげたなほく長屋の子　五　輪
ほーげたが逃げそこなつてドヤまれ　瓢　山
ほーげたをお國自慢にしてるなり　青砂郎
ほーげたは母に似てゐるとも言はれ　貴　山
言ひ負けはそのほーげたを覺へて來　さだを
そのほーげたに亭主養はれ　同
そのほーげた大人呵ッ氣にとられ　萬年青
ほーげたに近所の手前なぐりつけ　同
冗談に云ふほーげたもたのもしく　一　杉
ほーげたの前と後に壁があり　同
ほーげたへ早や退けどきの笛は鳴り　朝　陽
ほーげたへ女工は長い舌を出し　同

席題　便　り　朝　陽　選

筆先が功を奏して爲替來る　格子樓
明日行くと手紙で妻の里歸り　神　代
久し振りたよりをやれば死んでゐる　瓢　山
クロバーの便りで寄宿舍花が咲き　飛　水
五月雨の封じて送る好い手紙　一　形
此處からはお前のだよと嫁に見せ　黒天子
獨り者通信もなく淋しがり　天　全
段々と便りも減つて幼な友　萬　兩
娘もうあなたと書くに躊躇せず　青砂郎
病んでゐるその鼻先へ富士便り　さだを
名を替へて來た便りすら疑はれ　五　輪
（人）假名文字の吾が子の便り讀み直し　萬　兩
（人）良い便り母の姿がうかんで來　同
（地）御無沙汰のお詫ばり長ふ書き　格子樓
（天）通信は世界の距離を短ふし　飛　水
（軸）流連へ便りは旧父のきっぢこと　朝　陽

席題　新　米　互　選

新米の悲哀は又も選に洩れ　海　耳
新米は風呂敷ばつかり持たされる　格子樓
新米は藏から椿に問ふてゐる　黒天子
新米の聲は朝から嗄れてゐる　萬年青
新參のその大贈を賞められる　貴　山
江戸育ち新參でゐて負けてゐず　五　輪
新米の能筆らしい筆捌き　青砂郎
新米の休憩にまで氣をつかひ　樹　光
新米へ今日も電話がかゝつて來　さだを
新米のそれから先は知らぬたり　同
新米の返事天井へ突きあたり　多　聞
新米の下駄キチリと揃へてゐ　同
廻り道して新米戻るなり　朝　陽
新米と新米と泣く納屋の隅　同

兼題　職　責　路　耶　選

職責を果すと誓つて別れしが　一　泉
職責は踏切番も轢き殺し　呑　風
職責は全ふしたが息は絶え　海　耳
職責を知れとお客は言ひたそう　紫　水
職責を全うもせず生き殘り　格子樓
職責と別にお菓子を買ふてやり　黒天子
職責で知らず〳〵に遠ざかり　一　仙
職責は重いとばかり無口なり　天　全
異狀無き戰線に今日も五人死に　五　輪
見送りへ職責の事も話してる　瓢　山
職責をCOSTOPで過ごしてる　同
職責の拔足をする氣にもなり　樹　光
職責で死んだことさへ嗤はれる　同
職責で遙かに椅子はへだてられ　多　聞
遮斷機を押へ職責負けてゐず　同
門を出れば矢張り竹馬の友でした　青砂郎
家にゐれば笑ふてばかりゐる父よ　同
死ぬることは職責意識して　貴　山
飲むことに決めた職責二時を聞き　同
寢なかつた丈けは寢ず番はたより　同
制服を脱げば職責たゞの人　同
（佳）職責にいつか頭痛も忘れてゐ　神　代
（同）牧師の子さんぼ釣りまでとめられる　五　輪
（同）凶刄に斃れて巡査部長なり　格子樓
（同）職責を論ずる程の位置でなく　萬　兩
（同）職責を辨當がらの音もよし　貴　山
（軸）職責で慾が一つの中に生き　路　耶

兼題　腹　選

腹へ乘る兒へ夕刊の逆からはず　多　聞
腹立ちは戸の開け閉めもきつくなる　涼　哉
財産は腹の子丈けへやるつもり　廣　月
腹遣ひ小さな聲で子を叱り　寛　飛　水
ゲツト來る虫を殺して今に見よ　掛　川
今更の樣に女房の腹を見る　格子樓
腹の子のためと勝訴を輕う逃げ　骨　皮
腹立てど泣くより知らぬ若い妻

上役の腹を目當の仕事なり　烏莊
腹にこらへて靴下を履く　一杉
腹にない事まで言つて叱られる　瓢山
腹の底見えてゐますと女給逃げ　紫水
何事も無かつた腹のさすりやう　貴山
御佛へすがり山路へ腹が減り　黒天子
門違ひ腹をかゝへて笑はれる　天耶
つき合つて見れば゛ゆかしい腹の中　同
おかしさは君と僕との腹の皮　青砂耶
情ない涙が腹に落ち附いて　同
空腹を訴へまいとする躾　さだを
ポーイふと空腹なのを意識する　同
ひもじさへ道頓堀の「ヂヤズ」の音　五輪
シヤンデリヤ見詰て腹の子を案じ　同
(佳)提灯にされる腹を河豚は持ち　貴山
(佳)其の腹は知らず美男の御曹子　五輪
(佳)腹匐ひをする兒が家に二人あり　巧路戯
(佳)背伸して腹立たしさを隠すなり　樹光
(佳)腹一杯言へば淋しさだけのこり　一杉

生駒參詣　(大阪)

七月二日　於大市食堂　福田鶴峯報

頂上　雑吟

木津川が半道程見へる　生駒山　緣雨
えつさ〳〵蟻の運ぶ土　同　緣雨
己さんを信じ鳥居くゞるなり　鶴峯　緣雨
せきまんのやと女給の午前二時　緣雨
人違ひ客に女はてれてゐる　同

歌讀みの父よ孝行な子を持ち　同
はづかしそうに八重と云つてのけ　鶴峯
女給になつた事情聞くよしもなく　同

社告

最近「近作柳樽」の投句が非常に激増したので、これを一部と二部に分ち、一部は主幹が從來より以上の嚴選をされ、一部は安井ひろし氏が選される事になりました御投句の方は一部か二部のごちらか一つを選び「近作柳樽一部」又は「近作柳樽二部」と明記して御送句下さい。

近作柳樽一部(十句以内)　庵生路郎選

近作柳樽二部(十五句以内)　安井ひろし選

新刊紹介

東天紅

本書は東京帝國大學法學部に屬する明治新聞雜誌文庫の所藏目錄であつて、今日の文化の根源をなす明治文化を生んだ明治初年から二十二號に至る新聞雜誌名が普く掲げられてゐる。あらゆる方面の明治研究者にとつて唯一の羅針盤たるを失はない。

明治研究と編纂的怪手腕を有する宮武外骨氏が本文庫の主任者であることは、全くその人を得たるものであらう。四六倍版アート紙印刷の美本である。編纂兼發行者は東京市神田區錦町三丁目九番地瀬木博尙氏(非賣品)

無產者夏期大學

學生募集

期日　八月十五日ヨリ十九日迄五日間　午後七時より九時

場所　南海難波驛前精華小學校

講師　京大森口、商大河田、關大辰己、大原高野各博士、府市社會課長等

會費　金貳圓

申込所　南區新戎橋　**萬よし**

編輯後記其他

路郎生

九十五度以上

九十五度の暑さである。川柳に對する熱は少なくとも九十五度以上である。斯くして八月特輯號生るか。

蛭子省二氏の不斷の熱援、川村花菱、川上三太郎氏の特別寄稿正に「川柳雜誌」を重からしめるものである。私は生活苦に喘ぎながらも「柳壇の人々」と「旅のこころ」とを書きつづけた。「旅のこころ」は意外に長くなりさうだ。漸く圖館に於ける海峡親和川柳大會の終つたところまで書いた。一昨年は旅行記が書けなかつた。それほど私は健康を害してゐた。今回は拙い印象記にしろ書けるだけになつた。句はいゝのがないので發表を見合はせた。次號へは是非載せたいと思つてゐる山雨樓君の「主觀句の研究」は同君の多忙から今月は休むことになつた。萬よし君が久し振りに句を寄せた。これから又川柳のために働くと云つて來た。もう押しも押されもせぬ一人前の政治家になつたんだから少しは餘裕を作る必要もある譯だ。大いに發奮をのぞむ。ひろし君は編輯に校正に大車輪である。綠雨君は不眠不休で、「川柳雜誌」の經營方面に全力を擧げてゐる。杏三、雨町、公二の若手連の活躍も目覺ましい。「川柳雜誌」はもう一ト足フン張らなければならぬ時だ。川柳の名によつて大いに後援していただきたい。

「光耀抄」はいよ〳〵獨立した社關係の人々から募つた「この葉書を受取つた日のこと」は豫期以上に興味ある記事となつたことをよろこんでゐる。これは編輯同人までが參加した。忙しい中から殆んど全部に近い人達が回答を寄せられたことをうれしく思ふ。

樂燒と水戸料理

前號が出て間のない六月二十九日の日曜日に、丸山公二君が知遇をうけてゐる平野の根本氏の一樂畵房から樂燒の揮毫で趣味の一日を送りたいから是非來ないかといふ案内をうけたので喜んで出かけた。畵家、俳人、僧侶、實業家、いろんな人達の集りだつた。みんないい氣になつて繪の具をなすりつけてゐた僕もその中に交じつて惡筆を弄して見たが碌なものは出來なかつた。尤も拙い作でも燒の具合で頗ぶる雅致のあるものに出來上るのでなか〳〵興が深い。少しく涼しくなつたら樂燒川柳會をやりたいと思つてゐる。

揮毫のあとで、主人公の鄕國水戸料理の御馳走にあづかつた。この料理が又素的に珍らしい。由來珍らしいものにうまいものは稀だが、この水戸料理ばかりは珍らしくてうまかつた。水戸の老公が西山へ隱居をされ、百姓をしながら案出された自給自足のお料理なんだそうだが、このヴィタミンのABCDEFGまで含んでゐてこれだけ喰べればカロリーも充分なんだとは庵主の說明だつた配するに南地新町の美人をもつてされたなど拙づかうら筈がなかつた。徒らに諸君の食慾をそそるのも罪だから料理の內容を書くことはさし控えて置く。

平野の一夜

薄暮一樂畵房を辭した公二君

「週刊朝日」

懸賞 **文藝大募集**

川柳「失業」

選者麻生路郎氏▲用紙官製ハガキ一枚一句に限る。ハガキの裏面には必ず住所氏名を明瞭に御書き下さい▲應募原稿には「川柳」と明示せられたし▲大阪中央郵便局私書函五〇番大阪朝日新聞社內週刊朝日懸賞文藝係宛▲秀逸三名に賞金、佳作五十名には記念品贈呈▲締切八月廿五日限▲入選作品は九月號に發表

週刊朝日

と私とは折角ここまで來たのだから舊同人の助六君を訪れた。幸ひ宅にゐたので、すぐ近くの料亭で舊交を溫める。支部の黃蛾君がよぶ。黃蛾君が且州君をよぶ。すぐに小集をはじめた。

色紙や短册に感興をやる。この夜且州君が改號を求めたので、たちどころに櫻果の名を以てした。櫻の果は私の夢の表象かも知れない。

座談會と月評會

特輯號讀物として七月四日の夜倶樂部樓上で「句作に關する座談會」を開催した。從つて月評會は一回休み、次回は七八二ケ月の作品で卓を圍むことになつてゐる。

句會と山宣の墓

七月六日、御旅支部の句會で宇治へ出かけた。一行は圓角、翠夢、路烏、習々の諸君と私を加へて五人靜かな一日のトリップであつた。小雨に逢つたので、黄蘗山行を後廻はしにして、山本宣治の墓參りをした。墓は小學校の上の小丘にあつた。宣治は無產黨の代議士であつたが、その墓碑は墓地中隨一の大きな自然石で、全くあたりを拂つてゐる堂々たるものであつた。要垣によつて圍まれた墓碑の表面には花屋敷山本家之墓と彫まれてある。堂々たるのも無理はない。これはブルジョアの墓なのである。宣治はブルジョアの家に生れてブルジョアの弊をあまりに知りすぎてゐたのであらう。墓前には貴名受がある。

一行は小雨の中に佇んで作句し、その句を名刺に認めて山宣の靈に捧げた。墓碑の裏に廻つて見ると、「昭和二年八月十日亀松六十九歳逝」としてある。

同志山本宣治の
最後の演説から
山宣ひとり孤壘を守る。だがわたしは淋しくない。背後には大衆が支持してゐるから
大山郁夫書

としてある。

この碑文にはセメントで塗り潰された痕跡がある。川柳に新生命を吹き込むために、又その社會化の運動に、多くの犧牲を拂ひつつある自分は山宣のこの僅かなる言葉にも心よき響を感ずる者である。

墓地を下つて、花屋敷に入り酒杯を手にして句作に耽る。

晴好雨奇の宇治の山宣の句を得た。記念に二三句を半切や短册に認めて花屋敷に殘した。歸る時母堂が門口まで見送られた。私は默つて頭を下げた宇治川を船で興聖寺の方へ渡つた。歸途黄蘗に寄つたが別に記すこともない。夜は本社の句會に臨んだ。氷業新聞社寄贈の氷柱が暑さを柔らげつつあつた。私は立つて趣味と熱と題して樂燒に揮毫したある日の話と山宣の墓に對する感想を語つた。會場の一隅では樂燒に川柳を揮毫してゐる人々もあつて夏の夜は早や十一時に近い。

動物園句會其他

▼動物園の夜の句會を開くことにした。園長の林さんが動物を詠んだ川柳に就て動物園の動物の實際から觀た感想を聞かして下さることになつた。私も動物について話すことにした。別欄に廣告が出てゐる筈だ。御一讀の上、涼みがてらの出席をのぞむ。

▼久しく病床にあつた道後の淺井冷々子君の令圍が十七日に永眠された昨冬。十一月に伺つた時には溫顏を以つて迎えて下さつたのに、今はもうゐられなのか。私は暗い心を懷いて弔電をうちに行つた。

暑中御伺

不朽洞の裏手には野球のグランドほどの空地があります。値上りを待つてゐる金持の根氣のいいのにいつも敬服してゐる次第ですが、不朽洞の二階から見ると、不朽洞の芝生とも見えます。金持に税金を拂はした庭も一寸涼しいものの一つです。いつ二階から覗いても、このグラウンドでは二男のアートが黑い汗を流して自轉車を乘廻はしてゐます。彼も又自分のために出來た空地だと思つてゐるのかも知れません。暑いとか涼しいとか云ふことも主觀の問題ですね。皆樣の御健康を祈ります。

不朽洞にて
麻生路郎

これは山宣の父であらう。その隣りに「多年子」としてある。多年の二字には朱が入れてあるこれは山宣の母である。その横に、

昭和四年三月五日
宣治
四十一歳逝

投稿規定

▼近作柳樽及課題吟の句稿は葉書又は同型の厚紙に各題別紙に認め、住所氏名雅號を明記すること。

▼近作柳樽は一部又は二部のいづれかを明記する事

▼各地會報は半紙判の原稿紙に清記のこと。

▼文章は二十字詰半紙判原稿紙に認めること

▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記すること。

▼締切は嚴守されたし。

▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入のこと。

募集

第七卷第十號課題

八月五日締切
（各題十句以内）

▼秋　蛭子省二選
▼運命　高橋かほる選
▼地圖　住田亂耽　友淵貴山　共選

第七卷第十一號課題

九月五日締切
（各題十句以内）

▼柿　松丘町二選
▼涙　松盛琴人選
▼橋　朝田新水　木村晃卓　共選

毎號募集

▼近作柳樽（一部）十句以内　麻生路郎選
▼近作柳樽（二部）十五句以内　安井ひろし選

◇近作柳樽の一部と二部へ同一人で投句することは御遠慮ありたし。

▼各地柳壇（會報）
▼文章（評論研究感想吟行漫文）

社告

社務一切（編輯に關する件、投句、購讀廣告）の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます。

定價

普通號	一部 金參拾錢
新春特輯號	一部 金五拾錢
八月特輯號	一部 金四拾錢
半壹箇年前金（特輯號共）	壹圓八拾錢
壹箇年前金（特輯號共）	參圓六拾錢

廣告料

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます

昭和五年七月廿五日印刷
昭和五年八月一日發行

第七卷第八號
（毎月一回一日發行）

編輯兼發行印刷人　大阪市西成區千本通五丁目七番地　麻生幸二郎

發行所　大阪市西成區千本通五丁目七番地　川柳雜誌社
振替大阪三一五一四番
電話天下茶屋二五七九番

事務所　大阪市住吉區杭全町六〇三番地　川柳雜誌社
振替大阪七五〇五〇番
電話天王寺一一六七番

賣捌書店

（大阪）大賣捌　二盛社書店。（明文堂　其他　市内　各書店）
（東京仲見世）玉森堂（神戸）米田、後藤、寶文館（函館）
石塚（京都）三宅（松山）弘文舍

川柳雑誌社關係の人々（順はろい）

賛助員

岡田三面子　池田雪峰　山本凡々子　平井蒼太　藤里好古
川上三太郎　石川双葉子　増井汀柳　日野草水　酒井駒人
池澤樂居　西村市公　丸山公二　森石竹　朝田新水
大道弘雄　川村花菱　友淵貴山　須崎豆秋　北山悟郎
岡本一平　吉岡鳥平　川村觀月　近藤テルホ　水谷鮎美
吉田清　熊本黄蛾　辻左馬　柳川洲馬　楊井二南　岩本素人
片岡直方　吉田清　永田里十九　中原圭二郎　中川めかく子　越田久水　岩崎柳路　橋本綠雨
嘉納純　窪田銀波樓　田中辰二　安川久流美　前田雀郎　小出榴重　藤村作　國枝史郎　長崎柳秀　藤本卯之助　柴谷柴舟　篠原春雨　赤井清司　淺田一蛭子　末弘嚴太郎　森東魚　桑原京郎　松村敏郎　松田多郎　山本雨迷
中澤濁水　阿形一杉　中見光路　阿部閑生　上田柳影　櫻井圓角　水田光穂　三輪夏曉　白井梅里
中野柳陽　淺井冷々子　安西杏三　原史風　長谷川一徹　松盛琴人　太田朝陽　福田山雨樓　小川三猿堂　出口雨町　龜井花童子　高橋かほる　竹内多聞主　中島鐵洲　麻生路郎
伊藤綠之助　井花童子　麻生葭乃　住田亂耽

同人

編輯局（同人）

客員

伊藤彦造　大島濤明　生田翠夢

社友

相元紋太

道頓堀支部（大阪市）幹事庄　万よし
天滿支部（大阪市）幹事北山　悟郎
濱寺支部（大阪府）幹事太田　朝陽
神戸支部（神戸市）幹事楊井　二南
山口支部（山口縣）幹事柳川　洲馬
函館支部（函館市）幹事龜井　花童子
高知支部（高知市）幹事中澤　濁水
梅田支部（大阪市）幹事水谷　鮎美
螢ヶ池支部（大阪府）幹事田中　紫浪
金澤支部（金澤市）幹事中川めかく子
糸屋町支部（大阪市）幹事近藤　テルホ
田邊支部（和歌山）幹事辻　左馬
箕川支部（島根縣）幹事伊藤　綠之助
豊橋支部（愛知縣）幹事白井　梅里
平塚支部（神奈川）幹事酒井　駒人
加古川支部（兵庫縣）幹事水田　光穂
京都支部（京都市）幹事桑原　京郎
鳥取支部（鳥取市）幹事中島　鐵洲
別府支部（別府市）幹事小川　三猿堂
堺支部（堺市）幹事友淵　貴山
松山支部（松山市）幹事岩本　素人
守口支部（大阪府）幹事朝田　新水
御旅支部（大阪市）幹事櫻井　圓角
高岡支部（富山縣）幹事越田　久水
天王寺支部（大阪市）幹事須崎　豆秋
平野支部（大阪市）幹事熊本　黄蛾

暑中御見舞

昭和五年猛夏

昭和至誠團學藝部川柳同人

半田悌次　池澤樂居　山田久太郎
大塚堅坊　山田天溪　土井萬年青
森本黑天子　河内瓢山　後藤竹石
谷口海耳柳　天全柳天郎
漆萬兩　廣田曙水　松島稻子樓
山田烏莊　内村樹光　紀平涼哉
道田骨皮　川戸一壺　菅呑風
友淵貴山　上田籬下　木山青砂郎
木山さだを　畑井英一　寒川樂亭
萬屋瓢霞樓　西川飛水　神代龍太郎
阿形一杉　三輪夏曉　太田朝陽
吉田一稻　竹内多聞

暑中御伺

川柳雑誌社梅田支部

水谷鮎美　大阪市此花區龜甲町二ノ七九

姫田夕鐘　大阪市港區高尾町一ノ三七　仁昇堂方

天野卜居　大阪市住吉區喜連町二一九六

藤原鳴玉　大阪市港區石田布屋町三ノ一四五德丸清秀方

川村觀月　大阪市西淀川區大和田町六三四　靈阪實藏方

永田里十九　大阪市南區疊屋町六

川柳雑誌社鳥取支部

暑中御伺

同人

高田穂波子　鳥取市川端町一丁目

谷本青水　同

堤一風　同

中島鐵洲　同

藏田鴨山　新茶屋町

山下源太夫　立川四丁目

山下佳水　同

增田耕民　川端一丁目

杉谷湖山　桶屋町

暑中御伺

川柳雑誌社天王寺支部

尾崎海洋人　西區南堀江下通二丁目

釜本柳精　天王寺區大道四丁目一八

瀧口武藏坊　住吉區阪南町西三ノ五九　教重方

中野裸人　浪速區惠美須町二ノ三二

山崎柳山　天王寺區大道三内藤製作所

丸山公二　天王寺區國分町三

福田鶴峯　天王寺區北河堀町六二

湯淺斗人　天王寺區大道三内藤製作所

須崎豆秋　天王寺區大道三内藤製作所

伺御中暑

川柳雜誌社
（人同部支口守）

石川双葉子
大阪市西成區紡濱本町四丁目六

石川尺八寸
大阪市外守口町寺内　驛前

原　あきら
大阪市外守口町寺内

西田詠逸
大阪市外守口町

奥居金太樓
堺市附洲町五

中道テ、ツオ
大阪市外守口町寺内

上阪當リ矢
大阪市外守口町寺内

安西杏三
大阪市東成區北清水町八九一

朝田新水
大阪市外守口町車庫裏

木村白蛙
大阪市外守口町

清水漫中
大阪市外守口町寺内

平井蒼太
大阪府北河内郡三郷村西橋波

暑中御伺

五年盛夏

川柳雜誌社函館支部

龜井花童子

暑中御見舞

神戸市中山手通七丁目一六ノ七　日野華水

神戸市三川口町三丁目一九〇　西村市公

神戸市花隅町九六　楊井二南

神戸市花隅町九六

川柳雜誌社神戸支部

川柳雜誌社平野支部

暑中御伺

大阪市住吉區平野本町二丁目四番地　熊本黄蛾

大阪市住吉區平野梅ヶ枝町六丁目四番地　藤岡櫻果

暑中御伺

川柳雑誌社 御旅支部同人

大阪市東區粉川町一六
生田翠夢

同所
生田みつる

大阪府中河内郡玉川村岩田
片桐靈壺

大阪府中河内郡玉川村岩田
高木習々

大阪市東區淡路町三丁目
梅村路烏
電話本局六二一四

大阪市東區和泉町二丁目
松田多郎
電話東八四八

大阪市東區島町二丁目
福田飛佐志
電東三六八四

大阪市東區農人橋二丁目
櫻井圓角
電東五三一二

暑中御伺

毎度有難う御座います

昭和五年盛夏

大阪市南區學屋町周防町東
カナメ喫茶店
永田里十九

阪神沿線
魚崎町598—2

麻雀をたゝかはし
に御越し下さい。

住田亂耽

暑中御伺

出口雨町

東區東雲町二ノ一七三
（右ハ當分ノ住所デス）

暑中御伺

伊藤愚陀

大阪市東區仁右衛門町
五〇八ノ上

暑中の言葉

家庭爭議勃發防止のためなるべく
午後九時—十二時は、店番をして
サービスを勤めます。

大阪新戎橋
上かんや　万よし

暑中御伺

安井ひろし

大阪市南區安堂寺橋
通リ一丁目四三

暑中御伺

尼崎名賀壽會

今村吉朗
西畑亮山
中野玄洋
阪崎串二（斧葉改メ）
清水虚白

暑中御伺

大阪醫科大學

長崎柳秀

暑中御伺

南海電車

池澤樂居

大阪府下高師ノ濱

暑中御伺

阿部閑生

大阪市外豐中千歳通二丁目

暑中御伺

中澤濁水

高知市本與力町

暑中御伺

（愛宕川柳社）

富士野鞍馬

東京王子堀ノ内一三四

暑中御伺

別府市行合町北進館前

川柳雜誌社別府支部

湯苔吟社

小川三猿堂

木村晃卓

暑中御伺

浮舟

一部金拾錢

十二部金壹圓

浮舟川柳社

吳市成町十五

暑中御伺

「月見草」一ヶ月拾錢 半年六十錢 一ヶ年壹圓拾錢 送料三錢

聖城川柳社

石川縣大聖寺町魚町三四

高田茶撫郎

暑中御伺

松盛琴人

此花區上福南三丁目六六

平素の御後援を感謝いたします

神戸の「ふあうすと」月刊

神戸市御崎本町三丁目二九一

ふあうすと川柳社事務所

暑中御伺　山本靜香
大阪市南區上本町二丁目一六

暑中御伺　河野双車
大阪市東成區鳴野町三〇〇ノ五〇三

暑中御伺　内野桃水
神戸市下澤通一丁目一五〇ノ七
電話五ノ一五四一番

暑中御伺　沖野英郎
大阪市西區靱北通二ノ二三

暑中御伺　西村山月
大阪市港區鶴町三丁目一九八

暑中御伺　山本凡々子
大阪市南區盧町一丁目五一

忌中に付欠禮致します　淺井冷々子
松山市外祝谷

川柳雜誌社堺支部
暑中御伺　友淵貴山
堺市大町西三丁目一三

暑中御伺　安藤空山
愛媛縣新居郡東平

川柳雜誌社簸川支部
暑中御伺　伊藤綠之助
島根縣簸川郡高松村

暑中御伺　關本雅幽
大阪市港區鶴町三丁目一一〇

暑中御伺　森田輝翠
大阪市天王寺區細工谷町五八

暑中御伺　古谷愚圖坊
大阪市港區鶴町三丁目一一二

暑中御伺　松丘町二
大阪市東成區別所町五〇二

暑中御伺　澤井朱唇子
大阪市北區空心町一丁目四二
電話北七二六一番

暑中御伺　竹田芦穂
大阪市港區八條通二丁目

暑中御伺　高橋かほる
大阪市南區北炭屋町二〇一
電話南五九大番

暑中御伺　阿形一杉
大阪府泉南郡東鳥取村里田
三輪夏曉
大阪市住吉區王子町一ノ二七

暑中御伺

福田山雨樓

大阪市浪速區湊町保線事務所
電話戎一〇〇三

暑中御伺

桑原京郎

川柳雜誌社京都支部
京都市七條大宮東入

暑中御伺

池田雪峰

暑中御伺

川合舟々

大阪市東區糸屋町二丁目七

暑中御伺

中野柳陽

滿洲開原大和街二〇

暑中御伺

平塚支部

川柳雜誌社
神奈川縣平塚町旭座前
酒井駒人
中原圭二郎

暑中御伺

緣談先ノ調査
資産信用調査
家出人ノ所在探査
素行動靜秘密調査

赤埴探偵社

赤埴秀吉

大阪市東區北濱一丁目
電話本局二三七一番

（秘密嚴守）（調査正速）

財産隱匿。特許侵害等ノ探偵。地方出張探査ノ依賴ニ應ズ
營業ハ年中無休

暑中御見舞

和漢洋醫院

大阪市南區長堀橋一丁目
電話 南四一八八番

長谷川成一
私宅 大阪市東區大手通一丁目

入院隨意

院長 醫學士 山縣正雄

本院 大阪北濱三丁目電停前
電話 本局 二〇八〇番

暑中御見舞

山縣眼科醫院

新築落成

分院

大阪 梅田、天六、玉川町 九條、松島、戎町二 汐見筒、東雲町

神戸 穴門上、湊町一、小野柄一

西宮 寺前町、

清酒

午後六時 白鶴が待ち妻が待ち

白鶴をチントンシヤンと提げて來る

攝津灘

嘉納合名會社釀

古本屋時代

今のやうにあさから〳〵新刊が出ると新刊を一々讀破することは容易ではない。たとへ新本を買つてもいよ〳〵讀むころになれば、もう古本で至極新らしい本が出てゐる。こうなればわざ〳〵新本を買ふ必要がなくなる。極く綺麗な古本が出れば全く新らしい本を買ふのは莫迦らしい事である。殊に

公立社の棚

には斯うした新らしい古本が時々提供されるのであるから我々讀書子にとつては、誠にありがたい譯である。諸君も私と同じやうに公立社の棚から至極最近に出た本の古本を求められたならば幾冊か求めるうちには幾冊かをロハで讀める利益があらうと思ふ。

（路郎生）

暑中御伺

古本

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

▲日本橋を南へお渡りになつたら、直ぐ南へ這入つた東側です。本店が從來の店の一軒置いて北隣へ移りました。從來の店はそのまゝ營業を續けて居りますから一層お引立の程祈上げます▼

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話南五六二番

弊社の工場

暑中御見舞

設備

輪轉機外數臺の印刷機械、活字鑄造場あり、就業人員七十餘名、活字豊富にしてルビ付活字最も多く新聞雜誌等の印刷は弊社の最も得意とするところなり。

營業種目

新聞雜誌印刷、圖書出版引受、紙型鉛版活字製造販賣各種製版印刷、其他附隨事業一切

藤本兄弟社印刷所

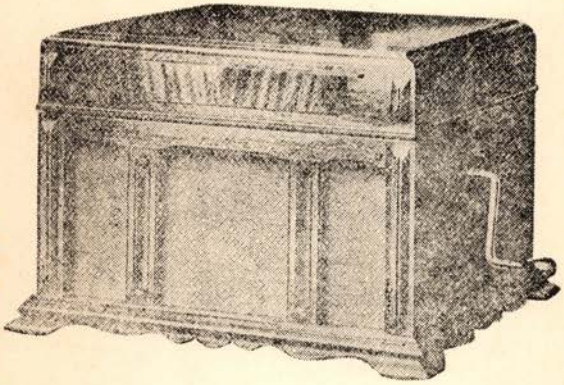
大阪市東區農人橋二丁目

電話東一七〇番七七〇番
振替大阪八二八四番

グレース 90號

月ヶ五賦月

金四拾五圓也



市内は一枚のレコードでもよろこんで配達ゐたします

機械 八分巾 スパイラル式 二連五面引

アーム S型オーソホニック式

聽音器 サクセスボックスV式自動ストップ付

一大特徴は蓋の開閉がスプリングテーアに依り自動式になつて居ります

ビクター
コロンビヤ
ポリドール
パーロホン
ルヤ

特約店

茂木蓄音器店

大阪市浪速區新川壹丁目七百八番地
難波元町下車十五銀行東
電話戎五六七三番

大正十三年三月三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和五年七月廿五日印刷納本　昭和五年八月一日發行

にきびとり
美顔水

心ある家庭には是非常備せられたき皮膚衛生藥

(一)ニキビ、吹出物 ═ 婦人は固より男子方でも、ニキビや吹出物の多いのは見よいもので御座いませんが、この藥は頑固なニキビや吹出物にも確かな効能がありますので、信用を博して居ります。

(二)蚤、蚊、南京虫 ═ その他毒のある虫にさゝれた時、この藥を附けますと、不愉快な痛さや痒さが止まり、さゝれた跡が腫物などになる事が御座いません。蚤や蚊で夜お子方のムヅかる時など、この上ない重寶な事がおわかりになります。

(三)皮膚を美しくす ═ 斯ういふ藥ですから、常用すればニキビ吹出物を防ぐは勿論、皮膚は次第に磨きこんだ樣に綺麗になり、顏の美しさを增しますので、心ある御家庭に常備せられて居ります。

發賣元
東京・大阪
桃谷順天館